

きか。何もしないより宜いとて、終日博奕ばかりしてゐては、随分困つた次第でないか。そこは人の本分からであつて、バクチこそ我が法律で禁じ、我が道徳で咎むれ、圍碁は我が高等遊戯と認められるが上、これで身を立てようとする者は、道楽どころか、時間の許す限りに於て技術を磨かねばならぬと同時に、下手の横好き、何としても上達しない連中は、お天道様の下に勤むべきを勤めず、徒らに時間を費すの空恐ろしきを察し、成るべく早く切上げるに心掛けなくてはならぬ。

何もしないより宜いとて、下手碁、下手将棋、下手野球、下手庭球はまだしも、下手麻雀、下手撞球に凝り、職務又は職業として何を成すべきかを忘れたやうになつては、無用の事にかまけ、有用の事に氣附かないだけ、何もしないより悪いことになる。普通に道楽とするを職業視するならば、全力を以て従事するも判つて居り、それ程の覺悟がなく、單に時を過ごすのみならば、餘計な事せず、悠々閑々、散歩でもするに若くはない。何もしなければ、間居して不善を爲さうと云ふが、或る博奕は既に不善に陥り、勤めるよりも戒むべきではないか。「時は

金」とは格言かどうか、無駄に遣ふと丸るで遣はぬと、どちらが時間潰しか。

(昭和一三・一二・二二)

劇震後の餘震

「人を呪へば穴二つ」とは何時誰が言ひ出したか、誰とはなしに世間の事實を見て考へ附いたのであらう。抽象的に云へば動反動の關係とし、地震に喩へれば、劇震の後に餘震があるに似ても居る。驕る平氏は二代二十七年で亡び、これを亡ぼした源氏は三代三十四年で亡び、源氏の權を奪つた北條氏は八代百年を越え、その代りに滅亡する時、従ひ死する者八百七十餘人、鎌倉に自殺する者六千餘人と稱し、鎌倉が廢墟になつた。豊臣氏を亡ぼした徳川氏は、これを亡ぼした翌年に初代が歿し、三代で兄弟喧嘩し、弟が迫られて自殺し、五代で直系が絶えた。十五代續いたものゝ、幾度も危いことがあつた。

徳川幕府の倒れたのを當然とし、これを倒すに代表者視せられたのは薩藩の西郷隆盛、長藩の大村益次郎、大村は暗殺され、西郷は賊魁として戦場に斃れた。西郷を戴いて亂を起した徒興は、大久保利通と川路利良とを敵と目指し、却て官軍に征服されたが、その翌年に大久保が殺され、翌々年に川路が奇病で歿した。因縁づくの話のやうなれど、さういふ事が有るには有り、別段に人を呪はず、呪つたと同然になるも已むを得なからう。我が日本では革命といふ事がなく、精々で明治維新の如きものであつて、舊將軍の系統は今でも相當の禮遇を受けるが、革命の行はれる國々では、一たび革命の起る毎に必ず幾回かの動亂を免れない。

英國で國王チャールス一世を斷頭臺で刑し、血の滴る首を擧げ、「これが叛逆人の首」と言つた時、さしにも怨みに怨んだ群衆も餘りの事と思つたとか。革命黨の首領クロムウエルが護國主として威名が中外に輝き、歿して莊嚴な葬儀を営まれ、それが王政復古で墓を發掘され、首を梟され、屍を下水に棄てられたこと、亦餘りの事であつて、やがて再び革命が起り、たゞ其の革命が鮮血の間に於てせず、平和裡に於てしたのが何よりと云はる。佛國の革命は是れ以

上に猛烈、王に續いて后を刑場に殺し、更に動亂に次ぐに動亂を以てし、ナポレオンの帝政で一先づ收拾し、その崩壊と共に幾變動し、遂に再び覇を大陸に唱ふるに至らず、前世紀の初め、大軍を以て露國を攻め、現世紀に入つて何が何でも露の鼻息を窺ふ。

最も悲惨なるは、何と云つても露國であり、彼の皇帝、皇后、皇子、皇女が、夫も同然に殺された。英でも、佛でも、君主を殺すに理由を發表した。不合理でも手續を履んだ。露では滅茶とも何とも言ひやうがなく、人と鳥獸との區別がない。その反動がなくて濟むものか、正に恐怖時代であり、今日人を銃刑に處し、明日自ら何となるか測り知れない。劇震の後に必ず餘震あるを承知せねばならぬ。(昭和一三・一二・二四)

彼等の自分勝手

明治十一年頃、東京大學法學部の學生で村山と云ふのが演説し、「萬國公法は耶蘇教の國で

耶蘇坊主が勝手に作ったもの」と言ひ、言ひ過ぎと聞えた。當時國際法といふ語がなく、漢譯の儘に萬國公法と稱し、知識の程度も察するに足るが、講義を聴いたり、書物を讀んだりして、さう感じた所があらう。彼の村山は排外思想でなく、卒業後に英國辯護士ラウダと法律事務所を開き、後に布哇で辯護士業に従事し、そこで病死した。萬國公法を耶蘇坊主が勝手に作ったと言つたのは、幾らか落を取らうとする所があつたにしても、全く腹にない事でなく、さういふ跡あるを認めたらに相違ない。

世間にピンからキリまでと云ふも、ピンにピンがあり、キリにキリがあるは宗教家であつて、佛教でホトケサマと云ふほど結構な人があるかと思れば、誰のいたづらか、釋迦が生れて「天上天下唯我獨尊」と獨語したと傳へ、超誇大妄想にした。これに較べれば茨野獨園が「あれを看よ、釋迦があつた通り兜率天で修業中だ、我々が何として情けて居れようぞ」と語つたのは宜い。基督も神の子とか、三位の一つとか、どこを押せばさういふ音が出るか。此等は後の人語る所とし、羅馬法皇アレキサンドル六世が全世界の異教徒國をスペインとポルトガルと

に兩分したが如き、單に紙や言葉の上に止まらず、現實に即し、人類の運命に關するので、事が容易でない。

未開野蠻の土地は其れで差支ないとし、歐洲以外を悉く植民地扱ひにし、征服者の利益を主にし、被征服者の禍福を問はず、我が日本が滿洲に、支那に、「共存共榮」を唱ふるを聞き、早くも侵略と解し、何としても防遏せねばならぬとするは、從來の慣例が先入主となり、他の解釋が頭に入らないのでないか。彼等は國家的關係に於て勝敗の外に考へず、「共存共榮」といふを夢のやうに怪まらずに居れず、既に人口三億五千萬の印度を植民地にし、更に四億五千萬の支那を植民地視し、偶々「共存共榮」といふを耳にし、「それ何ある、あなた嘘つきある」と口を突がらす。

英國が印度を植民地にしたので、日本が支那を植民地にするものと考へ込んで居り、日本が支那で共存共榮を念とするが如く、英國でも印度で共存共榮を念としてはなど、想像することだに出来ない。英國はさうでも、米國はさうでなからうと云ふが、そこは妙なもの、如何にア

ングロサクソンの割合が少いとて、やはりアングロサクソン國、何としたとて共存共榮を理解するを得ないらしい。耶蘇坊主と一概に言へぬけれど、随分自分勝手な坊主が居り、既に英國第一の坊主カンタベリ大僧正が譯の判らぬ事を言つて日本に毒づいた。そこは佛教の謂ゆる縁なき衆生で度し難いか。(昭和一三・一二・二六)

紳士學校

名稱は何としてもよく、假りに紳士學校として置く。華族を入れる學校を華族學校とするが如く、紳士を入れる學校を紳士學校とするので無く、職員を養成するを師範學校と稱するに倣ひ、或る志望の人を紳士らしくするをば、姑らく紳士學校と題するに過ぎない。紳士は廣い意味で「皆様」とか、「御客様方」とかと云ふ位のこと、乞食や泥坊でなければ事が濟むとし、狭い意義では可なりに資格を要し、何處でも不體裁な事のないやうに慎まねばならず、更に一

層狭い意義では、人間として完全に近づかうとすることになり、その最上は高嶺の花で、理想に止まり、こゝで言ふのは中間に於てする。

紳士といふは「ジェントルメン」の譯語として通用し、漢學者が「君子」と呼んだ所に當り、君子の戒めは大體に於てジェントルメンライキであり、小人はアンジェントルメンライキに外ならない。論語に「君子は争ふ所なし、必ずや射か、揖讓して升り、下りて飲む、其の争ひや君子」とあるはスポーツマンシップを意味する。たゞ君子が漢學と結び付き、漢學臭く感じ、且つ實にチャンコロらしい所があり、却て「武士」とか、「サムラヒ」とかゞ適當と覺えるものゝ、それも腰に大小をさゝなくては如何はしく、そこで新たに紳士といふのが行はれた。

我が武士道で「威あつて猛からず」となる筈なるも、精神を鍛鍊した割合に、社交上の練磨が足らず、穩かに委細を語るべき場合に木で鼻をくゞつたやうな事があり、その點は支那が世間の廣かつたゞけ、お世辭に巧みで、或は巧みに過ぎて空お世辭となる。歐洲諸國も色々

し、歴史の多い地は社交に慣れ、人を見て睨み合はず、フランス人の如才ないは勿論、ぶつきら棒らしいイギリス人も、さすがに世界を跨に掛けるので、人の呼吸を心得て居り、殊にジエントルメン連は成るほど練り上げた人物と感心せしめたりする。支那人が日本人よりも歐米人を尤もらしく思ふに種々の事情ある中、それが少からず與かつてゐる。彼等の眼識が足らぬからにしても。

我が日本人の主なる缺點は、外國人との交際に調子の合はぬ事であつて、やたらに笑ひ顔するか、溢つたくて苦蟲噛んだやうになるか、とかく應對下手で、それで何程割引せられるか知れぬ。そこで眞に紳士となるを望むのでなく、東亞の大舞臺の開けるに伴ひ、須要な技術や言語を教へるの外、むやみと威張つたり、やたらにお世辭したりせず、長者の風で、可不可なしに意思の疏通するやうに訓練してはどうか。大學は一面に於て紳士を養成する筈なれど、今まで其れが足らず、何處ぞで紳士學校を設け、又は紳士科を置き、速成的に紳士らしくするを得ないか。(昭和一三・一二・二八)

斯くて國運が發展

神功皇后が三韓を征伐された時、我が帝國の人口が百數十萬、多く見積つても二百萬に上らなかつた。關東平原まで定まつた道がなく、幾つも山を越え、川を渡るよりも、船に乗つて朝鮮半島へ往く方が容易と思はれ、開けた土地は九州から瀬戸内海附近で、却て半島へ近いやうに心得た。半島に大陸の文物技藝が傳はり、珍らしい物があり、有益な物があり、恩威を以て之を内地に運搬することに越したことがない。支那は三國に續いて南北朝に分れ、半島まで手を伸ばすの餘地なく、半島に小邦分立し、比較的兵の強いのに従つて安寧秩序を維持した。

日本が半島の一部を占め、物質文明を輸入する要地としたのは約四百年間、その末年に支那の南北朝が統一して隋となり、更に唐となり、朝鮮半島をも藩領とし、藩領は日本に従屬するを欲せず、欲するも許されず、天智天皇が皇太子中大兄として軍事を統督され、出征軍が戦つ

て勝つことが出来ず、遂に全く半島から撤退したと、一面に於て神功皇后の壯舉が中絶し、確かに國威の失墜なれど、一面に於て當時人口が三四百萬、如何に勇兵を以てしたとて、兵數に限りがあり、統一支那の大軍と戦つて利害得失の疑はしいが上、別に新たに思慮する所があつた。

既に人口が前より二倍以上になつたとし、尙ほ何と云つても四百萬に足らず、前に半島から強制的に文物技藝を輸入するを主眼にしたものゝ、既に半島が唐の領土に歸し、半島から唐の貨物を輸入するよりも、直接に唐の要港から輸入する方が有利と知れたのみでなく、大陸から得べき限りの農工の器具を得て考へれば、少量の既製品を輸入するに較べ、内地で見渡すばかりの草茫々なるを開墾し、或は茂れるだけ茂り、神代より斧の入らない森林を伐採し、その他製造すべきを盛んに製造するのが、何かにつけて遂に利益が多いと認めずに居れぬ。

そこで内地から半島へ出掛けず、半島の人を内地に移し、工商は都市に住はせ、農牧は關東に分配した。固より本來資源を開發するの意よりし、徒らに來住人の便利を計るのでなく、内

地人で未開地に進みたい者は殆ど其の欲するが儘にしたので、約五百年後には關東に贅澤品こそ少けれ、必需品が遠く關西を凌ぎ、遂に京都に於ける實權を鎌倉に遷すに至つた。鎌倉の執權北條時宗の時代、人口は一千萬前後、尙ほ少いと云へば少く、出でて大陸に戦ふに足らなくとも、留まつて大陸の兵を迎へ伐つに堪へ、そこで相模の太郎が膽斐の如くぞなる。

それから約三百年、とかく世が治まらず、遂に群雄割據し、大亂れに亂れ、漸く太閤豊臣秀吉の下に平定した時、人口一千六七百萬になり、大陸の兵が半島から襲ひ來つたのを逆にし、我より半島を経て大陸に進まうとし、七年間も押しつ押しされつして戦ひ、秀吉の病死で退軍した。大抵寡兵を以て明の大軍を破つたものゝ、何分にも兵數が少く、前進を續けることが出来ず、總じて地圖が疎漏な上、半島附近の海圖がなく、僅かばかりの水軍が散々な目に遭ひ、謀れば必ず成り、戦へば必ず勝つべき英傑も、西天を望んで眉を擧めずに居れなかつた。

半島を取つたとて、寶の山があるでなく、土地を開墾するならば、内地に開墾すべき處があり餘つて居り、將も兵も歸心矢の如き有様、徳川家康は餘計な事をして餘計な心配するより

も、出来る事をして安全に世を送らうとし、一切外に手を出さぬことにし、それが二代秀忠で愈々甚だしく、天下太平、國家安穩が何よりの事、三代家光に大志があつたと云つて知れたもの、大小名に睨みを利かすが精々であつて、四代五代は江戸の繁榮に陶醉し、それから後は朱鞘の武士が「飛んでゆきたや主のそば」など踊り、アメリカから黒船の來るまで醉生夢死した。それでも幕府の倒れるまで三百年足らず、人口が三千萬に達した。諸大名が驕りでこそ疲弊したれ、兵たるべき者が太閤時代の倍に近く、太閤ならば其の兵を以て一層活躍するを得たらう。そこで征韓論が起つた。當時維新勿々、萬事が整はず、非征韓論が勝を得たにせよ、征韓は國運發展の無意識的の聲明であり、二十年後に韓國で清國と戦ひ、更に十年を経て滿洲の野でオソロシヤの名ある露國と戦ひ、次いで間もなく日韓併合の實を擧げた。その間に人口が四千萬を越えたが、それから三十年で七千萬を越え、全帝國で一億に近づく。

人口一億では、太閤が愛親覺羅に先んじ、明朝を取つて代り、皇帝の位に即いたらうが、十六世紀と二十世紀とが人口の果進的增加に伴つて世相を變じ、今は四百餘州に君臨するが如き

が男兒の本懐でなく、如何に埋没した資源を開發し、持たない國に持つて奮進せしめ、持つた國に實の持腐れせず、持つたゞけの事を成さしめ、相ひ共に世界の物質的及び精神的の文明を高上するやう、機運を興し、大勢を導き、これを眼前に展開するに在ると承知すべき事になつてゐる。支那事變の第三年、昭和十四年は、帝國の發動で東亞幾億の民が畫期的場面を開く。

(昭和一四・一・二)

米國を何と見る

米國が獨立したのは我が十代將軍の世であり、我國で十一代將軍が職に就き、銳意革新に着手し、「維新」の語が出で、間もなく爛熟より頽廢に傾き、三十年間に四たび將軍が更迭し、明治天皇の下に眞の「維新」が實現した。十二代將軍の世、米國の小さな軍艦が浦賀に來り、江戸が上を下へと騒ぎ、娼婦が「降るアメリカに袖はぬらさじ」と書置したとか、傾く幕府に

拍車をかけたけれど、歐洲諸國の軍艦及び商船が續々到来し、中にも英佛兩國の鼻息が荒く、露國も底氣味悪く、比較的米國人が穩健で、親切で、國策上に野心を蓄へないか見え、或は歐洲側の横暴を抑制し、少くとも緩和するの意があると思はれた。

文明の紹介に英語の必要を感じ、英語の教科書及び教師は米國より來るのが多く、グールドリツチ、クエツケンボス等の名を冠した圖書が普及し、グールドリツチの假名ビーター・パーレーの萬國史が萬國史の代名詞のやうになり、各國史の第一に米國史が讀まれ、その米國史は自由を求めて遠く未開地に渡航した人々が、漸く安住の地を得ると共に、英國政府の無理無體な壓迫に反抗し、遂に七年も戦ひ、辛うじて勝利を得たことを説き、讀み來つて如何にも人間の本望らしく思はず居れなかつた。ワシントンが偶像視せられるは勿論、ヘンリーが「自由を與へよ、さなくば死を與へよ」と叫んだのが痛快と喝采された。

米國史を讀むのは、大抵獨立史に止まり、正に「青年米國」の氣分に満ち、無邪氣で、熱情で、至誠に逆るを感じず居れず、それが學制改革、政局變遷、その他種々の事情で、教科書

として米國史を讀むことが全く消滅し、自由に渴仰する者が無くなつた頃、新たに米國に注意を促されたのがイマートン一派の思想及び文學であつて、歐洲舊文明の物質的、功利的、殺風景から解放せられるかに感じた。期間は極めて短かつたにせよ、米國に憧憬を覺えたが、これに憧憬するかと思へば、直ぐ醒めて消え、それから米國に特殊の興味を感じたのは前のルーズヴェルト大統領の英雄的態度でもあるか、その後はマンモニズム、マムモナイトの外に特に言ふべき事がありさうにない。

獨立から僅に一世紀半、若い血汐の流れた當年を追憶すれば、今も正義人道に熱血を瀝ぐを聯想するを禁じ得ないとし、一世紀半に人口が驚くべし四十倍に上つた念進振り、質よりも量、珠玉が有るには有り、石や瓦で丘を成し、山を成し、玉の在りかを見出ラに苦む。喧々囂々、ラチオで鳴り響くはマムモンの聲、今更我が日本帝國の支那に於ける行動を解しないことを怪むは、石屋や瓦師にダイヤモンドを尋ねるに異ならない。米國で正義人道を口にすることは、ひたすら他國の利權に耳を塞ぎ、自國の利權を食らうとするを意味す。(昭和一四・一・五)

内閣更迭

英國の諺に「内閣更迭は寝返りの如し」とあり、理由があれば勿論、理由といふ程の事がなくとも、或る期間を経て更迭するを意味する。我が日本で「寝返り打つ」と云ふは違約とか、裏切りとかと解せられるが、これは向きを反対にするからであつて、寝返り其の物に殆ど意識を伴はず、特別の魂膽のありやうがない。内閣更迭は固より寝返りほどに簡單でなく、何等かの事情を伴ふに相違なけれど、その事情の中に疲勞又は倦厭といふやうな事が少からぬ部分を占めたりもする。新任匆々の際、殊に始めて入閣した場合、意氣軒昂、大に活躍しようとするが、幾回か閣議を果ね、例に依つて例の如しとなつては、飽くとなしに飽き、當初ほどに氣乗りがしない。

舊幕府の老中は平均三年で更迭したと云ふが、太平無事の世でもさうであり、中外多端、應

接に、執務に、裁斷に忙殺されては、大抵にして引上げなくなり、さもなければ新鮮味を失ひ、何をして御座るかと疑はれる。最初は首相として、平大臣として、職務が板につかず、うぶらしくもち／＼する所は、不慣れで齒痒いやうでも、それだけ緊張して居り、眞劍で全力を注ぎ、何かにつけて改めたり、新たにしたりし、屬僚をして鬼が出るか、佛が出るかと一憂一喜、はら／＼させもする。

近衛公は蒲柳の質といふ程でなくとも、頑健といふ程でもなく、それで未曾有の時局に直面し、兎も角も大體に於て國運に順應し、施設すべきを施設するを得た。時局は是れからと云ふべきであつても、さう云へば際限がなく、過去の一年半は能くも難局を處理し、大過なきを得たと賞讃せすに置けぬ。こゝらで一休みするも事の宜しきを得て居らう。關白の家系ならばこそと云ひ、さういふ事情もあるけれど、誰も引受手がなければ格別、鳥の鳴かぬ日があつても、組閣の天命を拜受する人に事缺かず、それも自分免許でなく、適當な人と信じ得ては、近衛公に於て一先づ骨休めするも御奉公の道とする。

第二次山本内閣に犬養木堂が逓相、平沼男が法相、木堂は普通選挙に意があり、思へらく「最も反対なのは平沼であらう」と、その覺悟で平沼に説いた所、答に「普選は私の持論」とあつたので、さすがの木堂も「どうも案外」と人に語つた。さういふ事は他にもあらう。平沼男とて何時迄も樞相職に居るのが本意でなく、國步艱難に臨み、樞相を他に譲り、自ら首相として一働きしたい氣持もあらう。木堂が案外と驚いたのは、善い意味の案外であつて、さういふ案外が續々世間に發表せられるれば、單に有象無象が喝采するのみでなく、前任者の苦心慘憺した所が愈々進展することにならう。今回の内閣更迭は寢返りとして普通の寢返りでない。

(昭和一四・一・七)

男らしいと否と

「西郷吉之助人と爲り肥大、古の宗任貞任などは斯の如きものなりしかと思ひやられ候」とは

中岡慎太郎の書面の一節であつて、宗任は何とあつたか、貞任は長六尺餘、腰圍七尺四寸と記載され、身長は大したことなく、腰圍は相撲にも餘り類がなからう。西郷は身長が六尺に幾らか足らず、腰圍も貞宗ほどの事がありやうにない。その貞任が飽くまで官軍に抵抗して斃れた所、西郷の城山に於ける最期と趣を同くするとは、若し中岡が知つたならば、不思議な次第と眉を擧めずに居れまい。官軍に抵抗するも事に依りけりであり、貞任が孤立援なく、飽くまで屈せず、軌り死にしたのは、兎も角も男らしい行動たるを失はない。貞任は男として死んだ。

然し男の意地で戦へば戦ふものゝ、奥州の一隅で何時まで戦へるか。究極の勝敗の知れて居る以上、早く平和にして相互の損害を少くするも心ある者の考ふべき所であつて、貞任の弟家任等が降つた後、宗任が弟則任と共に降り、源義家に信ぜられ、朝夕祇候し、或る日大官人に梅の花を問はれ、「我國の梅の花とは見たれども、大官人は如何に云ふらむ」と答へたとは、眞偽の程こそ疑はしけれ、斯く言ひ傳へられる迄、全然王朝化してしまつた。その後裔が松浦の隠居として赤穂義士夜討の陣太鼓を聴き、助太刀しようとしたとか、さても移れば變はる世の中。

斯く言ひ來つたのは外でもなく、國民政府で蔣介石が長期抗戰で頑張るかに見える一方、汪兆銘が日本と親和するの必要を説いて居り、どちらもどちら、已むを得ない所がある。但し蔣が自力を以て奮戦し、倒れて已むの覺悟と假定しての事であつて、英佛米の後援を何よりに頼んだり、ソ聯邦の助力で氣を強くしたりするやうでは、他人の禪で相撲を取るもの、寧ろ人形となつて踊らされるに過ぎないもの、男性たるの資格がないとせずには置けぬ。彼は歐米の勢力を東洋に扶植するのみであつて、不見識とも、没分曉漢とも、何とも言ひやうがない。

蔣は強いやうで、實は他國の傀儡、自ら立つを得ないオツチヨコチヨイたるに過ぎない。彼に較べれば安倍貞任は正に男兒の眞骨頭を備へてゐた。均しく抗戰するならば、貞任の如く自力を以てすべく、斷じて他力を以てしてはならぬ。天下國家の上よりせば、汪が將來を見透し、歐米に操られて東洋に血を流すの愚を知り、多年の盟友と袂を別つたのを遙かに男らしいとすべきでないか。蔣の一派は自ら事を誤るを察せず、汪を追究し、これを迫害するに夢中にならうが、小人の窮して濫するほど厄介な事がない。それに附けても、安倍兄弟が或は戦死

し、或は降服し、共に日本男兒たるを失はないのは、さすがに皇國か。(昭和一四・一・九)

富豪の生活

金ほど有力な者なく、金ほど無力な者なく、これを有力にするも、無力にするも人の力に依る。つまりは人の力であつて、善く使ふ人は、無一文で生れても金満家の出来ない仕事を成し、使ふことを知らぬ人は、金満家に生れても無一文と同然になつてしまふ。金さへあればと金儲けを専らにし、儲けた金で愈々儲け、さて儲かつた金で何をするか。自身は金儲けで終り、その金で子孫が國家社會に働いてくれれば、それも意義ある生活とし、子孫が無駄遣ひしたり、ポンチの慣れぬ手で山を張り、すつてんになつたりしては、折角の金儲けが空々寂々、單に金を計算したに止まる。

カーネギーが「富んで死ぬのは耻辱」と言つたのは、固より「貧乏で死ぬのが名譽」といふ

意味でなく、貧乏で死ぬのが宜い筈だけれど、徒らに巨額の金を遺し、それが何となるかを知らないこと、寶の山を素通りすつよりも智慧がなく、氣が利かないことになる。寶の山を素通りするは、勞力を費さぬだけの事がある。寶の山でウントコサと寶を持ち出し、息を切つて運びながら、その儘にして置くは、徒勞も並一通りでなく、他から御苦勞と言はうにも言ひやうがない。カーネギーは富んだけ金を活かして使はうとし、無駄に金を積んで置くのを馬鹿者の馬鹿げた所爲と心得、さてこそ耻辱と言つたのでないか。

有る處には有るからでもあり、歐米の富んだ國では、富豪の名ある者が政府の手の及ばぬ所で國家社會に貢獻したりする。多くは矢張り富んで死ぬにせよ、善く集めて善く散らすのが割合に居り、我が日本で皇國の特性を誇りつゝ、この點で聊か肩幅の狭きを覺えぬでなかつた。所で國運の發展に伴ひ、富豪の數が増し、中に富の程度で世界に指折りなのがあり、富が其れ程でなくて、公共的事業に活躍するのがあり、日本も兵ばかりが強いのではなく、文化文明に力を加へるに於て相當の位置を占めるを失はないことを證明するに苦しめない。

大倉男の大倉高等商業學校、根津氏の武藏高等學校、平生氏の甲南高等學校もさる事ながら、今回藤原銀次郎氏が全財産を抛ち、工業大學の設立に着手したが如き、文明時代の富豪の最も意義ある事業と稱するに足る。金額で之と較べ物にならず、事情も違ふけれど、大倉邦彦氏が東洋大學の學長となり、その維持の困難から救つたのも、感心の行動とせずには置けぬ。大倉の姓名で喜八郎の關係と早呑込してはならぬ、大倉に喜八郎系と孫兵衛系とがあり、全く系統を異にし、前者は陽徳を好み、後者は陰徳を好むらしく、筋の争はれない者があらう。孰れにしても我が金持が金と心中せず、金を公共的に使ふ徴候あるを芽出度いとする。

(昭和一四・一・一一)

奉公の實例

金を使ふのが宜いか、使はないのが宜いかと問はれ、使ふべきに使ひ、使ふべからざるに使

つてならぬと答へる位に止まらう。それは當然過ぎる程に當然であつて、答へになつて居らぬと云ふやうなもの、文字通りに使ふべきに使ひ、使ふべからざるに使はねば、人間の力の及ぶ所で出来ないことが無からう。何分にも使ふべきに使はず、使ふべからざるに使ふので、金があつても無いと同然、最初からなければ何時迄もウダツが上がらない。そこは神ならぬ人間のこと、到底充分な事を期待し得ないとして、幾らか使ふべきに使ひ、使ふべからざるに使はないならば、何程當人の仕合せとなるか知れない。

石田三成は祿を餘すを祿盗人と云つたとか。祿は奉公のためにし、奉公に費すべきものと心得た。祿二萬石の時、一萬石を島勝猛に與へ、これを家臣にしたが如き、祿高の割合に多く勢力を養ひ得た所以と知られる。後に十八萬六千石とも、二十三萬石とも記載せられるが、孰れにしても大した大名でなく、それにも拘らず、諸侯を禽合し、天下分目の合戦を敢てし得たのは、祿を最高限度に使用したのに因る所が少いとしない。如何にも兵機を知らず、島が地團駄を踏んで口惜しがつたのも仕方がなけれど、要するに當年の一傑物たるを失はない。小西行長

は出来るだけ金を貯へたとして、没落しては元も子もない。これと事替れど、山内一豊の妻が鏡臺から金十兩を出し、夫に駿馬を買はしめたのも、金の使途を知つたことになる。高價の馬も買ふべきに買はねばならぬ。

これは世間の立身出世より見ての事であつて、必ずしも奉公の道でなければ、時局の困難を説き、銃後の勤めを高調しながら、少しでも多く政府の金を引出し、勤儉貯蓄の名に於て貯蓄するは、ドブに捨てるに優ること萬々ながら、時局に處する方法を廣く世間に知らしむるに於て、甚だしく物足らぬ次第でないか。

今は「上に好む者あれば、下必ず之より甚だしき者あり」と云ふことが通用しないにせよ、何と云つても高位高官が世間の目につく筈、金モールも、大きな勳章も、目を引くやうに出来て居り、それが如何に日常生活を送るか、全く影響ないとしない。英國で小ピットが蔵相として、首相として、陸相として難局に當り、トラファルガーで勝ち、アウステルリツチで敗れ、歎息して歿した。生涯獨身で、國家を妻とすると稱し、年俸六千磅乃至一萬磅なのに、死

後に議會で其の債主に對し四萬磅を拂つた程、生計を顧みず、國家に盡くした。負債は賞めた事ではなく、マコーレーが「ピットが儉約したならば更に偉大」と云つたが、さう云はゞ云へ、英國にはさういふ例もある。我が帝國の在上者は何の状態か。(昭和一四・一・一三)

器用と不器用

世には器用な人と不器用な人とがあり、器用なのは何をしてでも直ぐ覺え、在學中でも餘り勉強せずの良い點數を得、運動でござれ、トランプでござれ、人並以上にし、就職しても事務に長じ、應對を巧にし、宴會で歌ひもすれば、踊りもし、無くてならぬ人物と思はれること、誠に天分に恵まれたとせずには置けぬ。これに反し、不器用なのは何をしてでも直ぐ覺えず、鉢巻して勉強しつゝ落第するかせぬかの所、就職しても呑込が悪く、宴會でボツネンと隅に居り、お歌ひなさいよ言はれ、もじくするなど、立身出世と縁切りと見えぬでなく、かういふのは誠に損な生れつきとする。

天分の差は何としても致し方なけれど、長所に短所が伴ひ、短所に長所が潜むやうな事がないではない。必ずと言へぬにせよ、萬能餘りあつて一心足らずと云ふことも相應に見出される。萬能餘りあれば其れで結構、一心がどうのかうのと問ふを要しないと云へば云ふべきも、器用な人は何でも出来る代り、何でも特に上達するといふ程に至らない。特に上達するには、能力を他に分たず、他の能力を犠牲にせねばならぬ事もある。天分の足りない者は、全能力を集中したとて、何程の事がないやうなもの、不器用な生れで専門に秀でるのが有る。不器用で終るのが多いとしたとて、何事かに傑出するのがあるには有る。

獨逸帝國のヴィルヘルム一世は至極不器用で、皇帝たるだけに長じた。その孫なるヴィルヘルム二世は頗る器用で、何でも出来、若い頃に英國人が賞め上げ、アドミレーブル・クライトンの再生と呼んだが、皇帝たるだけに長じなかつた。時勢もあれど、一世の首相ビスマルク、參謀總長大モルトケと、二世の首相ベーマン・ホルウエヒ、參謀總長小モルトケとを較べ、優

劣を察するに足る。クライトン自ら文武兼ね備へ、往くとして可ならざる無しと見え、後に何一つとして事業が遺つてゐない。何でも出来る人は幸福ながら、出来ること云ふ程に出来ない不幸を伴ふ。彼は器用で、瓦斯のやうに分散する。

一應は器用な人に生れるに越したることなけれど、仕事は善し、談判は善し、世話は善し、媒酌は善し、剣道、柔道、野球、庭球、釣、スキー、何でも善しと云ふのは、毛頭失職の心配ないは勿論、何處でも引張風になつたりするけれど、如何に才能があつても、人の力に限りがあり、時間は過ぎて二度と返らず、碁將棋は善し、麻雀は善しと云ふ間に何時しか十年二十年と経過し、一つ纏つた事業をと思ふ頃、孫の相手し、骨の折れることが厭やになる。そこで『もし龜さんよ』といふ兎が一眠りしなくても、あちらに飛び、こちらに飛んで居る間に龜に負けてしまふ。(昭和一四・一・一五)

獨身宰相

日本に獨身宰相が出たのは一寸珍しい。前に渡邊無邊があり、その前に誰があるか。可笑しい事には、新聞で埒もない事を吹聴し、家庭でどうのかうのと掲げながら、渡邊子の獨身で過ぎた事情を明かにしたのがなく、平沼男の何故に獨身で過ぎたかを説いたのがない。さういふ私事に立入らぬのかと云へば、さうでもなく、餘計な事まで記載しながら、直ぐ表面で判らぬことは、その儘にしてしまふ。深く立入るに及ばず、立入つたとて誰の利益にもならぬとの心得が普通になつて居らう。世間はさういふもの、新聞の探訪は警察の探偵と違ふと云へば、それで事が済む。

兄がヨシラウ、弟が麒一郎とは是れ如何、喩へば貴族院議員中村純九郎氏が八十七歳、銀行家中村純一郎氏が六十二歳の如しと云つては、物にならぬけれど、獨身宰相は歐洲で珍らしい

と云ふ程でないに拘らず、婦人が社交界に出るだけ、相應に問題となる。歐洲では獨身と云つて獨身でないのが可なりであり、羅馬法皇は公然の秘密で表と裏とが違つたが、職分を重んじ、職分を妻、事業を子と稱することが行はれ、伊太利の藝術の三傑レオナルド・ダヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロは揃ひも揃つて獨身、中にもミケランジェロは「藝術は嫉妬深くて競争者を許さず、我は藝術と結婚し、我が業績を子とする」と明言し、九十歳に達した。

英國でピットとフォックスとが兩々議會で火花を散らし、一世の壯觀を呈し、共に獨身と傳へられたが、フォックスは妻があり、三十六歳で之を妻にした。ピットは才色兼備の婦人と結婚の意があり、正に決しようとして政治と家庭との兩立し難いことを察し、「國家を妻とする」と断言した。他に事情があつたとも考へられるけれど、一身を國家に捧げ、鞠躬盡力、倒れて後に已んだこと、天晴れと稱するに足る。後に伊國の首相カヴールが「國家を妻とする」と言ひ、全く獨身で終はり、却つて家庭を念としないらしいガリバルディーが閨門兎角に修まらなかつた。

我國で入道は頭を圓めながら、公然の公然で妻妾を蓄へ、淨海入道の如き、その最も甚だしい者と聞えるが、獨身武將上杉謙信、女嫌ひの儒者井上蘭蓑等々、徹底的に女を寄せ附けないのもあり、十三代將軍家定は妻があつて、妻がないと同然、探し出せば獨身生活に面白いの、面白いくないの、感心なの、不感心なの、等々、随分數が多からうけれど、明治初年「酔うては眠る窈窕美人の膝、醒めては握る堂々天下の權」と語り、それが書生の志望と聞えたのを回想すれば、何の事情よりしてか、餘り年數を経ないのに、美人の膝なんか御免といふ獨身宰相の現れたこと、何の辻占か。(昭和一四・一・一七)

掛値ない英雄

二十世紀に入つて各方面に英傑の顯れた中、國家的の關係に於て誰が最も偉大の印象を與へるかと問はれ、躊躇なく獨逸のヒンデンブルグ元帥を挙げずに置けない。四年半の戰役を経て

獨逸が無條件降服を餘儀なくされ、彼の元帥は敗軍の將たるに過ぎないけれど、嘗に彼の戦功が赫々として戦史に輝くのみでなく、内外均しく獨逸の絶大打撃を被り、再興の極めて困難、寧ろ不可能を認める際、彼が泰然自若、少しも落膽せず、希望を以て將來を見つめ、大統領に推され、急がず、焦らず、國力の回復に着手し、八十八歳で病死するまで盡瘁し、ヒットラーのナチスを以て思ふ存分に活躍するの素地を造つた。

世間ではヒ元帥が百戦功なく、敵軍に故國を蹂躪せられるを見聞し、さぞかし口惜しがつたと思はうが、固より口惜しいに相違ないとし、絶えて失望の跡なく、前途を察して希望に満ちてゐた。と云ふのは一九一八年大戦が終結し、その翌年國內が上を下への騒ぎの眞最中、自傳（アウス・マイネン・レーベン）を著し、序文に「祖國の最大悲劇の日に書かれた次の回想録は、絶望の苦い負擔の下に於てせず、我が視線は確實に前途及び外界に注がれる」と記し、後序に「一時政變の洪水が溢れ、我が神聖な傳説を破壊するも、やがて洪水が減退し、我が國民生活の激浪より再び獨逸帝政の巖が現れ出るであらう」と記した。帝政は疑問ながら、國運

は着々恢復するを失はない。

宗教の如何を問はず、「苦しい時の神頼み」を常とし、特に基督教國で神の名を唱へ、これに祈願するの習慣があり、他教で「アーメン・素麵・餛飩の粉」と冷かしたりするが、ヒ元帥は質實剛健その物の如く、如何なる場合にも悲鳴を揚げず、基督教の經典を引用するよりも、祖國の神話を引用した。「ニベルングンの歌」は獨逸民族に普及し、彼れ一人に限つた事でないけれど、彼が私淑するは其の歌の英雄ジークフリートとして誤るまい。世間でヒンデンブルグ線と呼んだのは、彼れ自らジークフリート線と稱し、自傳の終りに「殘虐なハガンの哀切りの槍に斃されたジークフリートの如く我が疲れた前線は崩壊した」と記した。

我國に神話が幾つもあるとして、初めに素盞鳴尊、次に日本武尊、次に田原藤太秀郷の蜈蚣退治、次に源賴光の鬼退治がジークフリートに似る所があり、若し支那の傳説が澤山入込まなかつたならば、ニベルングンのやうな豊富な傳説が出来上つたらうと考へられる。ニベルングンが匈奴王アツテラに關係あるに於て、我國で再検討するの興味を覺えぬでない。それはそれ

とし、去るものは日に疎し、ヘル・ヒットラーの全盛時代となり、フォン・ヒンデンブルグが漸く忘れられるは巴むを得ない事ながら、彼こそ掛値ない英雄とする。(昭和一四・一・一九)

御上のお金

蟻が蠅を狙ひ、それを燕が狙ひ、それを鷹が狙ふと云ふやうな事は、人間社会で其れ程まで簡単に、露骨に、殺風景にこそならなけれ、幾らか似た現象が絶えなからう。棚から牡丹餅の落ちるを望んで居る所へ、古證文で財産問題が起り、そこへ事あれがしの辯護士が加はり、何がな物にしようとし、高利貸が辯護士から元利揃へて貰へると悦ぶなど、上には上か、下には下か、循環して意外の邊に及ぶ。獅子身中の蟲と云つたりするものゝ、蟲から見れば寄生すべき處に寄生するのであり、何等疚しきを覺えず、正々堂々と心得て居る。「今のお上は喘息持ちよ、晝もゼイ／＼夜もゼイ／＼」とは舊幕時代のこと、太平無事、枝も

鳴らさぬ御世にさへも、税の取立てが重要問題であつては、世界に乘出して中外多事な時代、愈々税の取立てが急を告げるは必然の勢、まして況んや未曾有の戦亂が展開し、帝國の安危存亡に關するとあつては、生命線に限界として一切を提供することが、巴むを得ないと云ふよりも、當然過ぎるほど當然とせねばならず、如何なる邊に如何なる新税を見出だすか、公債を起す以外に租税を増徴するの御苦勞を當局者に切望すべき事になつて居り、たゞ負擔の權衡が宜しきを得るか、比例に於て餘つた者に軽く、足りない者に重いやうな恐れがないか、そこに注意が肝要とするに止まる。何としても上納しては御上のお金となる。

そこで負擔の重きを加へるは覺悟の前、人口一億の帝國で堪へられぬ筈ないと斷言すべきが、御上のお金は固より拂出さるべき所、餘計に残すを要しないと、お金が出ると考へ、出させる工夫を運らすのが、あちにもこちらにもあり、愈々實行するのが何の割合か、幾ら金があつても足りさうにない途轍もない計畫から、氣樂に小遣を拵り出さうとする方法まで、夥しい數に上り、中には眞劍なのがあり、半眞劍なのがあり、或は出來なくても損にならず、出來

れば勿怪の幸と云ふのがあり、寄つてたかつて幾らなりとも甘い汁を吸はうとする。

この廣い世界で御上のお金を引出さずに働き得ることが有り餘つて居り、それで働いてこそ働きがひがあるとすべきに、これに目も觸れず、耳も傾けず、多かれ少かれ直間接に御上のお金を當てにするは、如何に習慣とは云へ、感心した事とするを得ない。團體の力を以てすべきは團體を以てし、個人で企て得るは個人に於てし、政府から金を引出さず、餘りあれば政府に寄附する位の心持で事業に着手し、それで時局相當の態度とすべきでないか。何等かの名義で政府の金を引出し、型ばかりの事を成し、貯蓄報國の名に於て貯蓄するが如き、日本精神と云へさうも御座らぬ。(昭和一四・一・二二)

同名異實

我が帝國が英國と同盟し、續いて露國と正面衝突した時、英國政界の中心人物は拓相ジョセ

フ・チエムバレンであつた。一拓相に過ぎないけれど、管轄範圍に於て南阿戦役を起し、英帝國の運命を決した。日英同盟は首相及び外相の名に於てせるも、元はと云へば英國が能ふ限りの力を南阿に注ぎ、東洋が手薄になり、前に日本に干渉した露獨佛が隙を窺ひ、英の權益を奪ひ取りさうなのを恐れての事であつて、當時歐洲で日本の實力を知る者が少く、餘計な事をするやうに冷笑したりしたとし、局に當る者は知り、案外に効果あるべきを察し、日本が露國と戦ふのに驚異の眼を睜つた。

チエムバレンは辣腕を以て知られ、行掛りに拘泥せず、昨日の友を今日敵とするを憚らなかつたにせよ、多年の劇務、殊に南阿戦役で身心疲勞し、靜養の間、日本に好意を寄するに替らなかつたらう。その二子、オーステン及びネヴィルは、共に政界に活躍し、現にネヴィルが首相として三面六臂の働きを次から次と報道せられるが、父の辣腕と違ひ、眞綿で首を締めようとし、英語流に云へば爪ある手をピロッドで包んで居り、何としても日本に悪意を懐くのみか、永い戦亂で東洋を疲弊させ、印度と同じく植民地扱ひするの時期もがたと望んでゐる。さ

うは問屋が卸さぬけれど、兎も角も父が日本に好意を表したのと正反対になつてゐる。

日露戦役で米國大統領セオドール・ルーズヴェルトが仲裁役を買つて出た。彼は普通のヤンキーと違ひ、英雄肌を好み、何程か確に英雄肌を備へた。家に財があるにも因れど、金儲けを念とせず、財閥を攻撃するを憚らず、それで財があるとして、絶えて奢りの眞似せず、人里離れた處に住み、衣を脱いで木を伐り、事あれば敢然是非を争ふなど、利害に没頭する連中と趣を異にした。彼は相當に日本を理解したらしく、日本人を好み、日本人の爲に辯護した。自分は加州大學で彼の演説を聞いたが、白人以外の無力を説き、「日本を除き」(セーヴ・ジャパン)と一語高く言つた。

今の米國大統領フランクリン・デラノ・ルーズヴェルトは、前のルーズヴェルトの遠縁に當るとし、寫眞で見た所では似ても似つかぬ相貌、はて面妖なと思へば思ふ方が間違ひ、聖主マルクス・アウレリウスの子が闇君コムモツス、英雄的の先代に對し、町人風、現金主義、オツポータニユニスト、オツチヨコチヨイの當代が出たとて、特に怪むに及ばぬ次第ながら、同名異

實、名を聞いて親しみを感じ、實を見てオヤ／＼と呆れ返る所、これも世界に乘出しての一つの経験であらう。前のチエムバレン、前のルーズヴェルトを追想するにつけ、當代に幻滅を感じるを禁するを得ない。(昭和一四・一・二三)

犬 扱 ひ

高知市の人が餘り賞めないけれど、宿毛町は土地の狭い割合に人物が出で、中にも岩村通俊男、林有造、岩村高俊男があり、林の話に兄弟三人の中で末ほど劣り、高俊は箸にも棒にも罹らぬとあつた。これは高俊が愚と云ふのでなく、才を恃んで何をするか知れず、全く當てにならぬと云ふを意味した。實に高俊は器用で、宴會に踊つたり、歌つたり、大に座持ちした。それが石川縣の知事になつた時、縣廳の役人を料理屋に招き、酔の廻つた頃、盃を持つて出で、「こゝに居る人は皆吾輩の犬だ、ワンと言ひ給へ」とて、言ふと共に口へ肴を入れ、一人々々

にワンと言はせ、犬の眞似させて大笑ひした。

何を思つてさういふ事をしたか。石川縣は大藩の後と聞き、一つ奇抜な事をして世間の度肝を抜かうと考へたかも知れぬ。彼は戦争の自慢話をし、好んで劍舞し、腕力で負けぬとの意氣を示した。然し縣廳の役人なればこそ、云はれるが儘に犬の眞似したれ、單なる縣人の會で「ワンと言へ」と云つては、冗談と聞えない限り、「何を無禮」とか、「何を生意氣」とか、袋叩きとなるを免れない。そこに縣廳の役人の情けなさがあり、つまりは五斗米のためであつて、それだけで犬の眞似せねばならぬと云ふもの、考へて見れば我ながら意氣地なく感ぜずに居れまい。彼の岩村もそこは承知して居り、縣廳の役人に對する外、「ワンと言へ」など嘸氣にも出さうと思はなかつたらう。

もはや時代が變はり、如何なる知事でもさういふ事をせず、まして中央の官廳で斯かる事のあるべくもないが、金魚といふ語が床次氏の口から擴まつたが如く、官僚の首腦あたりで政黨員の官職に尾を振るを見、犬に似て居ると思はぬことはない。政黨内閣として城を明渡した

際、時世時節、官僚側で尾を振り、犬扱ひされたけれど、近頃廻り廻つて政黨員がチン／＼し、時として骨を争ひ、ワンと云ひ、キャンと云ひ、官僚側で相ひ顧みて微笑し、淺ましもの者共かな、これでも喰ひやれとて、肉の切れを差出すかに見える所、聊か皮肉に感ぜられもする。

政黨内閣ならば、政黨員が政務官となるも判つて居り、政黨と縁もゆかりもない内閣に矢大臣の眞似すること、御苦勞か、物好きか、一寸言ひやうがない。萬民輔翼のためならば、内地でも、支那でも、歐米でも、着手すべき事が有り餘り、幾らでも働き得るのであり、僅かの俸給で役所の一室に閉籠るなど、男の下がるやうな氣持をしないか。官僚の大株は當年の岩村男の如きをこそしなければ、政黨を與みし易いとし、犬馬の勞を盡くさせる意がない筈がない。犬馬も時局に必要なれど、我と思はんものは、官廳に高等居候たるよりも、他に分別が出さうなもの。(昭和一四・一・二五)

政黨の今昔

「狡兎死して走狗烹らる」との諺は、走狗が「良狗」とも、「獵狗」とも、「良犬」とも、「獵犬」とも記載せられるが、支那の上古から傳はつたのであつて、跨濬りの韓信が戦功を立てた後、死刑に處せられる時も此の諺を引用した。我國に狗を煮て食ふ習慣がないので、ピンと感ぜないけれど、支那で食用の狗を飼ふ程であり、不用の狗を食ふのが普通になつて居り、獵犬も無駄になれば直ぐ食つてしまふので、彼の如き諺が擴まつた。我國でも其の諺が當嵌まる事實ないでなく、源頼朝が弟範頼義経を殺し、徳川秀忠が加藤福島の家を斷絶したが如き、適切の例に屬し、或る點で明治維新後に西郷一派が城山の露と消えたのもさう見えぬでなく、夏の綿入、冬の單衣といふ所。

「四時の序、功を成す者は去り、未だ成さざる者は來る」とは、春夏秋冬より聯想したにしても、幾らか抽象的になり、四季より離れて理解することが出来る。誰が何とも言はず、教へもせず、世間一般に之を知り、「花一時、人一時」と云つたりする。「盛者必衰、會者定離」では抹香臭くなるが、それとて理由の如何を問はず、已むを得ない次第として諦めてゐる。榮える方では樂觀し、祝賀し、有頂天になり、肩で風を斬つて歩き、衰へる方では悲觀し、憤慨し、愚痴をこぼし、肩身が狭いのを苦に病む。そこで「萌出るも枯るゝも同じ野邊の草、いづれか秋に遇はではつべき」と悟るのが現れもする。

速いことは言はず、大正から昭和にかけての事、政黨華かなりし時代ともいひ、官僚が我も我もと政黨に入り、政黨ならで夜が明けぬかに語り合ひ、それで入閣したのがあり、組閣の大命を拜したのさへあり、「政黨内閣は憲政の常道」と稱し、その前に何人も跪かねばならぬと心得たのに、がらりと舞臺が替はり、「政黨内閣とは以ての外、憲政の常道と言つて見よ、容赦はならぬぞ」との見幕に青くなり、二大政黨の對立も何處へやら、共同の陣を張つて一向に張り榮えがなく、官僚の驥尾ならばまだしも、むさくろしい牛後に附き従ふ所、憐れと云ふも

なく。

それならば政黨内閣は誤つたかと云ふに、冬は寒くて夏は熱く、政黨が幅を利かす時代も有るには有り、その故を以て官僚が少からぬ影響を被り、中に悪化した所もあるとし、善化した方が多いとせずに置けぬ。前に舊幕時代の殿様やお役人様風を帯び、勿體振つて人に悪感を催ふさす割合に事務が滞り、今は其れ程でない所に進歩を見る。沐猴冠が台閣に出入したのも利益がないとしない。政黨員は當年の事を追憶し、今昔の感に堪へないにせよ、彼も一時、此も一時、決して徒勞でなかつたと心に慰め、當てにならぬ憲政の常道に執着せず、新たに進むべき道に進まれかし。(昭和一四・二・二七)

ミイラ取り

「ミイラ取りがミイラになる」とは如何にして世に擴まつたか。ポルトガル又はスペインから

傳はつたとし、今は意味が判然しなくて、尙ほ幾らか通用してゐる。五代將軍の頃、ミイラが薬用として流行し、それからミイラになるならぬが話になり、「二度と行くまじ戀の町、もらふ小指のミイラともなれ」など、意外の邊に引用せられるに至りもしたらう。日本からミイラ取りに出掛ける者がなけれど、ミイラ取りは容易の業でなく、途中で斃れ、そのまゝ自らミイラとなると云ふやうな事が言ひ囃されたと考へられる。虎穴に入つて虎兒を獲損じたともなる。

ミイラ取りがミイラになつた例が色々挙げられるとし、阿倍仲麻呂は其の主なるものゝ一に居る。彼は十六歳で唐に留學し、同地に奉職し、七十歳で歿した。恐らく幼にして學才に秀で、學問の本場で勉強させ、朝廷に勤務させようとして留學を命ぜられたのであらうが、遂に歸朝せず、本朝の學界に何の貢獻する所がなかつた。尤も唐の文人と交際し、日本の蠻夷と違ふを證明するの功があつたけれど、李白王維等と應酬するの才藝を以て本朝に盡くしたならば、王朝の文學は彼の如きに止まらず、別に文運を培養し得たかも知れない。浮辭空語で實

生活に益ないとしても、歐陽修が「先王大典藏夷貊」と言ふのみでなく、詩で日本に學ぶべき者あるを歎きたらう。一雪舟の繪畫に於ける影響を考へれば、一仲麻呂の文藝に於ける影響を察し、その歸朝しなかつたのを惜まずに置けぬ。

仲麻呂は故郷を懷はぬでなく、實に船に乗つたけれど、五十餘年を異郷に送つたのは、住めば都どころか、唐の人事風物に心酔し、これより離れるに忍びなかつた所があらう。これと事が替れど、幕末より歐米に留學した人々は、一定の年數で歸朝こそしたれ、留學地を標準として一切を判断するに傾くのが多く、明治の中頃まで大學教授として講義するに英語又は獨逸語を以てし、成るべく外國人と差別ないやうにした。これは歸朝しても、外國に居ると同様にしがたがり、或はそれで一生を終つた。

漸くして講義は邦語を以てする事になつたが、やはり判断は留學地を標準とし、日本で講義するに歐米で聽講したと同じ態度に於てし、日本離れする程、斬新な學說として學生に悦ばれ、教授も人氣に浮かれ、うかと術を外して氣附かない。日本とても單純でなく、若干人の言

ふが如くするに及ばぬとし、日本から去つて外國化し、外國人の立場で説明するは、折角學才を以て生れながら、ミイラ取りがミイラとなるに異ならない。日本人として不羈獨立、我が信するが儘に行動するは宜く、外國に留學し、外國人の見地で判断するは、ミイラとなつて餘り良いミイラでない。(昭和一四・一・二九)

三 顧 出 廬

吉田松陰が捕へられ、自像に養して「三顧出廬令、諸葛已矣夫」と書いたが、漢學を修めた者で當世に志あれば、先づ「三顧出廬」を理想に描くの状態であつた。楠木正成が三顧を待たずに出たのが宜いとか、宜くないとか、漢學者間に議論となつた程、三顧出廬が重きを置かれた。日本でこそ三顧が問題になり、事の如何を問はず、救命を奉ずべしとの主張が常識化したれ、支那で文字通りの三顧、又は三顧に似たことが、當然の順序として行はれ、それでなく

て事が運ばず、運んでも準備が整はず、間もなく失敗に終ると推察する方、世故に長じた者だけの事があるとなつてゐる。『三顧出廬』といふ形式が肝要。

孔明は自ら管仲樂毅に比したけれど、志は伊尹太公にあつたらうと云はれる。伊尹太公は傳説に屬し、確かなことが知れぬとし、太古より彼の如き者の出る習俗となつて居り、歴代類似の事蹟があり、王佐の才が天の與へる所と考へられ、さう考へさせることが治安上に必要とされた。關羽張飛等が孔明を悦ばず、先主は「吾の孔明あるは、魚の水あるが如し」と云ひ、關張等は窃に孔明を嘲つて「水」と呼んだとか。實に先主は孔明の言ふが如くし、それで孔明も働きがひがあり、鞠躬盡力、死して已み、人臣の範を千七百年の後に垂れ、近年支那の一記者が「漢より以來、名中外に遍くして、婦人孺子、蠻夷外邦、咸な震欽して傾服す」と記した。

所で支那に革命が起り、歐米に倣つて共和政治にし、君臣の關係を廢し、孔明が居つたとて、猥りに自ら枉屈して三たび草廬の中に顧みる者ない状態となつたが、革命が起つても『三顧出廬』の習俗に變化なく、たゞ前には天命を以て君位に立つと知られる人が三顧し、今は民

衆を代表し、安寧秩序の維持に勤勞する人が三顧することになり、吳佩孚將軍に對し、代表的人物王克敏、梁鴻志、王揖唐、溫宗堯等に次ぎ、全國鐵路協會、全國郵務工會、全國航運工會、上海孔教會、中華學藝會、中國内河航運工會等が和平救國のために蹶起せよと促した。

昔は三顧する人が智者の智慧を借らうとし、今は智慧を借らうとするのでなく、反對に智慧を與へる代り、中心となつて幾多有力な人の意見及び行動を纏めて貰ひたいとあり、簡單に云へば孔明等が玄德を推戴し、世の紛亂を鎮靜しようとする關係を示す。それでゐる吳將軍は君位に即くのでなく、聊か佛國が獨軍に破られた後、チエールが約一百万票で議會に出で、次いで大統領に當選したのに似た所がある。差し當つての疑問は汪兆銘と何の關係になるか、それからそれへと幾變轉しようが、強いものは私心のない人、蹶起した以上は、孔明と同じく鞠躬盡力するの外ない。(昭和一四・一・三一)

象牙の塔

象牙の塔と稱すべき者が昔からあつたかどうか。遠くからさう見えて、近くで案外に面倒な事がなかつたか。若し意の儘に學び、氣兼苦勞ないのを象牙の塔とせば、大山柏公の考古學研究、徳川義親侯の生物學研究の如きを舉げることになるかも知れぬけれど、これとて内部には他で想像するやうな事はかりと限らず、まして國家で設立し、議會で経過及び出納を監視する帝國大學に象牙の塔と形容すべき事のありやうがなく、若しあるならば、或る人の夢か幻かよりして居らう。それも自然科学ならば、一心不亂に研究して差支なく、さうありたいとすべけれど、法律、政治、經濟、社會、等々となつては、十字街頭を横斷するの氣持を必要としないでない。

大原社會問題研究所の如きは、他から何の干渉を受けず、眞に象牙の塔と心掛け得るやうで

あつて、大原孫三郎といふ大きな影が塔の隅々に行渡り、その不快を買はないやうに用心せねばなるまい。最初より象牙の塔に籠らうとせず、世の中は持つ持たれつするものと心得居れば格別、象牙の塔を志さずならば、自身で金を作つて之を築き上げるの外に道がなく、若し尙ほ他から干渉を受ける場合、建築物は干渉されても、我が頭腦は神聖にして侵すべからずとすべきであらう。これを外にして何處に象牙の塔があるか。

官立大學で象牙の塔を心掛けるなど、以ての外の心得違ひであつて、官仕ひたるに於て官廳と異なることが無く、すまじきものは官仕ひと云ふならば、官立大學に教授たることも一寸首を捻らねばならぬ。時として象牙の塔に似たことがあつても、何時事變が起るかも知れないこと、今回の東京帝大經濟學部の事件で推して察することが出来る。と云つて私立大學はどうかと問はれ、これこそ象牙の塔どころか、板の塔、ペンキの塔、小さな地震でブル／＼震へ、落ち着いてアルバイトに従事するなど、難中の難、よく／＼の篤志家に限られる。

象牙の塔でないに拘らず、象牙の塔と考へたり、考へられたりする所に、これに住居する人

人の悩みがある。國家で何のために象牙の塔を造るか、考へて見るが宜く、國家は國家のためにするのであり、象牙の塔を造るならば、より多く國家のために働かしめようとするに過ぎない。埒もない人間に使はれず、悠々閑々、象牙の塔に住み、我が意の赴く通りに思想的生活を送らうと欲せば、大した金のかゝる事ではなく、自身で建造し、誰が文相となつたとて、誰が總長となつたとて、我れ關せず焉と濟まして居るに於て、誰も妨げないのみか、或は案外に國家に貢献するを認められぬでない。官設象牙の塔ではさうは參らぬ。(昭和二四・二・二)

塞翁の馬

「初夜の鐘を撞く時は諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞く時は是生滅法と響くなり」とは印度流の思想の傾向よりし、『いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむ』と讀まれもしたが、支那で『人間萬事塞翁の馬』と云ふは、幾らか之と繋がつてゐて、趣を異にする所が

あり、そこに佛教と道教との區別を見る。支那の禪僧は之を一にし、『人間萬事塞翁馬、推枕軒中聽雨眠』と言つた。支那では『盛者必衰』としても、その故に必ず悲觀すべしとせず、衰へる時に悲觀するとして、盛んなる時に悲觀するに及ばず、滿志得意、歡樂を極め得べきを思ふ。たゞ歡樂の永く續かないことを考へ、有頂天にならないやうにと戒める。

『人間萬事塞翁の馬』とは道話よりも寧ろ童話に屬し、卑近な常識に過ぎないけれど、それだけ世間の事實に思ひ當ることがある。諸行無常は炎天の候、菩提樹下に沈思默想するにこそ適すれ、春は花、秋は紅葉、それ〴〵享樂し、浮かれ鴉で浮かれては、後は後、今は今、禍に遭つて福を望み、それが必ずしも空望とは限らず、禍は福の倚る所、福は禍の伏する所、況んや徒らに運を待つのでなく、自ら力を伸ばすを怠らなければ、禍福門を同くするとて、禍よりも福が多かるべき順序であつて、さてこそ塞翁の馬も心掛け次第で福を招く。

斯く長談議するのは、相當の才能あり、相當の經歷ある人が、進退去就に感ふからであつて、若し現在の職を去るのが不幸ならば、その不幸なるだけ、幸福が待つて居り、或は豫期し

なかつた運が開けることあり、そこが塞翁の馬と心得て宜い。たゞ彼の馬に於けるが如く、單に運を待つてゐては、好運に恵まれても、遠からず惡運に迎へられ、場合に依つて取返しの附かぬことになる。こゝが孟子の謂ゆる天の重任を降さんとし、其の心志を苦め、其の筋骨を勞し、其の身を空乏にする所と思ひ、發憤努力せば、ヘナチヨコ教授の椅子を此上もないやうに考へた當年の愚を悟ることにならう。

教授の椅子よりも大きな男があり、小さな男がある。小さいのは精々勉強するに越したことなく、大きいのは強ひて窮屈な椅子に腰掛けず、新たに適當なるを製造する方、居心もよく、働き易いでないか。リットレはアカデミー全員を束にして出来ない事業を一人で成し遂げた。國運の發展し、女中難をさへ訴へる今日、堂々たる男子の身を以て、囀附き榮えのしない椅子に囀附くは、誠に惜しい次第であつて、『椅子は欲しい人に遣る、吾は東亞の天地で活躍する』となれば、椅子を棒に振ること、番に塞翁の馬どころでない。支那流は印度流に優るとし、我が帝國は日出づる國、更に支那流に優る所なくてはならぬ。(昭和一四・二・四)

英國の悩み

今こそ現金を持つて居るので米國に並ぶものがなければ、何と云つても英國が世界第一の大身代とせねばならぬ。五大洲の殆ど四分一を占め、太陽が領土に没しないと、古今を通じて類例を見出さない。それには運もあり、巧みもあり、惡辣もあり、ペテンもあり、今更國際法の名の下、眞顔に現状維持を主張するなど、蟲のよいにも程があり、湯武が天下を取つたのを逆取順守とするに照らし、逆取順守の極端なる者に屬し、湯武も聞いて苦笑を禁ぜず、後生畏るべしと言はずに置けなからう。俱利伽羅紋々でなくても、『おい兄弟、減法寒い、飲代を借してくれ』と言ふを斷はるに骨が折れても仕方がない。

彼の大身代にも悩みがある。心配すれば際限がなく、大抵にして樂觀するやうなものゝ、面積が米國より廣くて、人口が其の十分一に足らない加奈陀が、長い國境を接しつゝ、何時まで

も英本國の管轄で過ぎるか。一旦米國と紛争の起つた場合に何とするか。永遠に紛争が起らないと安心するか。紛争が起らなくても、年一年米國との交通を増し、ラヂオを共にし、行く行く米國と大聯邦を形づくるに至らないか。英が過去の行掛りを捨て、頻りに米の機嫌を取るは、少くともモンロー主義の及ぶ限り、廂を借して母家を取られるの關係とならないか。若し之を防がうとせば、何の方法を以てするか。

これは西に對しての心配、更に東に對しての心配とは外でもなく、今から十八年後、一九五七年は印度總暴動の一百年記念に相當し、それが無事に經過するか、それとも何等かの形に於て兵を動かすの餘儀なきに至るか、印度人は氣力がなく、奮發心がなく、團結することが出来ず、蜂起すると知れたものとするも、何がさて英本國の人口に七倍する三億五千萬人、その何分一かの動搖するを防止するも容易でなく、或は前より手を替へ、品を替へ、意外の行動に出るやも測られず、それを餘計な心配として、全く心配しない譯にゆかぬ。

印度のみならば心配するに及ばぬけれど、支那事變で東亞の形勢が何となるかの知れず、英

國が米佛ソと共に日本の活動を妨げるに努め、それが思ふやうにならず、日滿支協同で新機運を捲き起し、埋没せる資源を開發し、世界に立上るに於て、如何に卑屈なる印度とて、根が智能ある民族、印度は印度人の印度と目覺めた曉、英國に於て前のやうに一山百文で取扱ひ難く、自治を拒んだり、許しても名ばかりにしたりすることが出来なくならう。當年の同盟を忘れ、懸命に日本に突き當るは、支那に於ける權益の心配もあれど、それよりも印度に於ける臺所に火がつき、無盡藏の寶庫が煙となるを心配するに因る。(昭和一四・二・六)

御奉公の顔

諸葛孔明が政治軍事に長じ、木牛流馬をも造つた所、才能に於て無盡藏と稱するに足るが、それ程の才能は他に類例がないと言へず、前の伊尹太公を始め、唐の魏徵、房玄齡、杜如晦等、優るとも劣らぬらしく、孔明が帝に「臣成都に桑八百株、薄田十五頃あり、子弟衣食自ら餘り

あり、別に生を治めて尺寸を長ぜず、臣死するの日、内に餘帛あり、外に贏財あらしめ、以て陛下に負かず」と表し、歿して其の通りにしたとは、何でもない事のやうで、歴代大臣も小吏も容易に企て及ばなんだ所とせずには置けぬ。それが「天下熙々皆利の爲に來り、天下滾々皆利の爲に往く」といふ支那のみでなく、我が日本も御多分に洩れない。

考へやうに依つて孔明の如くするは甚だしくむづかしくなく、桑八百株、薄田十五頃あれば、子弟衣食自ら餘りあり、餘計なものを頂戴しなくて宜く、それでこそ臣節を全くすとすべきであつて、頂戴するならば夏も小袖、貰へるだけ貰はうとするは、身を商品とするのである。二一天作の五、臣節も算盤で割出すことになる。孔明は特に朝廷から恩賞を戴かうとは思はず、公事に公費を以てし、私事に私費を以てし、身を處するに何處までも公明正大、文字通りに鞠躬盡力死して已んだ。忠義もオマンマのためと云ふやうな事が微塵もなく、固より餘計な儲け事をせず、働くを要しない身で三顧に感激し、人臣の模範を垂れたので、十七世紀を經、依然歎美すべきを覺える。

人君の模範を垂れたのに羅馬のマルクス・アウレリウス帝があり、人臣として孔明の如くなつたらうと察せられる。我國の封建時代に君臣の關係の麗はしい例が多いにせよ、祿仕する者とか、祿を喰む者とか、とかく祿と忠勤とが交換的に考へられる傾向があり、事實に於てさうでなく、或は全く交換的に考へぬにしても、君臣の關係が幾らか賣りもの買ひものから離れず、祿が物を言ふかの跡あるを否定する譯にゆかぬ。それが今でも付き纏ひ、御奉公で貰へるだけ貰はうとして怪まない。

明治から大正に移る際、乃木大將が一切を清算して果てたのは、さすがに聖代と感歎するを禁ずるを得ない。大將は御上から頂戴する所を悉く君國のために使ひ、少しも卑吝の念を挟まず、眞に忠を志して忠を盡した。さういふ分子が日本國民の肺腑の何處ぞに潜んで居るに相違ないとし、忠君愛國を一手販賣しさうに見えて、政府から取れるだけ取るに努め、取つた所を株にし、或は貸屋を建てるなど、罪惡でないにしても、決して賞めたことでない。貴族の肩書で十人も歳費を辭退するか、何かに寄附するかで、何程時局下の人心を刺戟するか知れぬ。御

奉公の顔する人は多けれど、私慾ないのはさても少し。はて淺まし。(昭和一四・二八)

二三四

フランスの運

盛んなる者が必ず衰へるか、衰へないのみならず、愈々盛んになるべき可能性あるか、簡單に決するを得ないとし、一時大國の威名を轟かし、後に漸く衰へ、現に頗る振はないのが有るには有る。織田信長が四町四方の地を寄附して南蠻寺を建立した當時のイスパニヤは、世界を我が物顔する勢あつたのに、後に次第に領土を失ひ、今や本國の運命さへも他國で評議する状態となつた。豊饒なる土地が荒廢に歸し、グワダルキビル河に沿ひ、嘗て村落が一萬二千に上り、六十年前に八百に減じ、現に何の姿か。人民に理智があり、氣輕で、愉快なやうで、何分にも奮發を缺き、一日の享樂に日を送る。

十九世紀の後半に我が帝國が列國と交際し始めた頃、スペインは既に存在を問はれず、佛國

が陸軍を以て、英國が海軍を以て、世界の兩横綱たる觀を呈し、帝國も陸軍は佛に則り、海軍は英に則るに方針を定めた。東伐西征したナポレオン一世の偉業が記憶に新たな上、ナポレオン三世が一世よりも政治に巧みと評判され、我が將軍慶喜の弟が皇弟として隨行員と共に招かれた時の如き、各國の貴顯が綺羅星の如く、誠に前代未聞の壯觀と歎賞せすに置けず、中にも皇后ユーージェニーが天然の美に金玉の装ひし、女官と共に賓客に挨拶し廻る所、此世のものと思はれず、天晴れ天上の光景と感ぜられた。

明治維新にも其の幻影が破れず、佛が幕府を助け、英が薩長を助け、薩長が勝つて聊か佛に氣まづい所こそあれ、佛國が陸軍を以て世界に冠絶し、列國を睥睨するを疑はず、陸軍は須らく佛國の如くなるべしと望み、その士官を聘して教導せしめたのに、何事ぞ明治三年佛國が餘り名のないプロイセンと戦ひ、一敗地に塗れ、皇帝が捕虜となり、皇后が國外に遁れるなど、幾年の幻影が一朝に破滅し、フランスは如何なる國かと考へ直さねばならなかつた。さすがに大河に水が断えず、佛國が悪政で戦敗しても、相當の國力を備へ、第二流と落ちないと見えつ

二三五

つ、衰頹の勢を防ぐを得ないと察せられる。

百五十年前に佛國人口が二千七百萬で既に過剩と云はれ、今や四千二百萬で不足を告げ、若し一九三五年の生死の比例を以てせば、一九八〇年に人口が僅々七百萬に減すべしと計算され、その主なる原因を農家の荒廢に歸し、外人の來住を獎勵すべきを説くこと、或る點に誤解があるとしても、衰運の徴候の掩ふべくもないことを認めねばならぬ。何として斯くなつたか。サンバルトロミニ虐殺以後、内亂及び外征で、進取の意氣ある男が滅じたと云ふが如何がなものか。何にしても前のイスパニヤに次ぎ、茲に多年昔に聞えたフランスの運の衰へを見て多少の感がある。(昭和一四・二・一〇)

當年の追憶

加藤寛治大將の逝去で半世紀に近い當年を追憶するを得ない。と云ふのは明治二十

四年九月より翌年四月までの事、自分は軍艦比叡に便乗して南洋を廻つた。今の中將坂本俊篤男が大尉で先任分隊長、後に軍令部長となつた大將山下源太郎男が大尉で砲術長、軍神と諺はれる廣瀨武夫中佐が少尉であつた。新たに兵學校を卒業した候補生五十幾名中、加藤大將が主席であつて、見るからに利發さうで、應對がきび／＼し、隙がなくて、それで愛嬌があり、加ふるに自分の隣縣福井の生れで、何かにつけて話しが合つた。然し後に知つたやうな剛情な、強硬な、一本木な所があると思はなかつた。

今の大將安保清種男も候補生であつたが、當時林と稱し、何時如何にして安保となつたか判らず、或は養子になつたのかとも考へられた。所が父君の自叙傳を読み、父君が二十九年六月華族に列し、十二月籍を大阪府より東京府に移し、氏林を改め、祖先の本姓安保に復するとあるので、成る程と知つた。孰れにしても安保大將は加藤大將と當年出身の双壁であつたのに、今や一壁となつたこと、自然の順序とは云へ、追憶に寂しさを感じずに置けぬ。安保大將は父君が海軍中將、實に二代も海軍の要職に奉仕したことになる。

後に中將に昇進し、四十九歳で歿した江頭安太郎氏が、大尉で乗組み、寡言で餘り人と交はらなかつたが、これこそ海軍で罕に見るの逸才であつたと、後になつて聞いた。さう云へば中將で終つた人、少將で終つた人の中、或は適材適所で一層多く働きたのがあるかも知れられない。三十七年七月自分が戦地に軍艦三笠を見舞つた時、當年の候補生松本直吉、殖田謙吉の二氏が少佐であり、ブリツチに送り來つて別れたが、前者は八月、後者は九月戦死した。職分で斃れたのは本望と云へば云へるもの、候補生諸野亨氏が南洋の熱病に罹り、艦中で歿したが如き、最も不幸とすべきか。特に給仕上りで、親獨り子獨りとあつては、親の身でさぞかしと察せられる。

それからそれと、賤の芋環繰返せば際限ないとし、加藤大將がワシントン會議に加はり、ロンドン會議に加はり、最も強硬な意見を主張するに至り、聊か意外の感に打たれずに居れず、その意外が善い意義の意外であつた。士別れて三日、刮目して相ひ待つべしとあり、それが三日どころでなく、幾十年を経ての事ながら、秀才型は兎角長い物に捨かれるのに、彼は飽くま

で信ずる所を守つて屈しなかつた。偶然か、必然か、その主張は一時斥けられて、後に事實化した。容貌さへも前の繊細なものと違ひ、横太りして逞しく、斗酒尙ほ辭しないとの氣魄を示したが、それでも何處かに愛嬌があつた。(昭和一四・二・二二)

宗教家の行動

惡に強ければ善にも強いとは、何程まで事實か。ナマコの如く、クラゲの如くでは、何とも仕方がなく、堅い骨があれば、惡をするに強いだけ、善をするにも強いと言へさうであつて、本來精神的畸形兒に生れ、惡事を働くにこそ強慾非道、鬼とも蛇とも見ゆれ、何一つとして善い事を成し得ないのがあるが、大惡人の現れる社會に大善人の現れる可能性がないではない。柳下惠が孔子の友人であつて、その弟なる盜跖が大泥坊を働いたと云ふこと、事實でないにしても、さういふ事が有り得ないとすべきでない。一家族で其れ程の差がないとし、社會に積極

と消極とがあり、積極に烈しいのがあれば、消極にも烈しいのがあり、極端と極端とに別れる。

統計を取つての話でなければ、西洋は東洋よりも人の身體に大小肥瘠の差が著しく、それだけ人間と思へぬ大悪人が居ると共に、かういふ人間もあるかと感心するやうな大善人も居る。羅馬法皇廟に有らゆる罪惡が行はれたと云ひ、これに反抗した新教徒にも偽善の甚だしいのがあり、基督教に鼻持ちならぬのを見るにせよ、同時に生命を神に捧げ、艱苦に堪へ、危険を冒かし、骨を異境に曝らして悔いなしを見る。基督教に愚劣な事、悪辣な事、さもしい事がありながら、兎も角も今日まで擴まつたのに特志の宣教師の献身的行動が與かること多かつたとせず置けぬ。

十八世紀までの迷信的熱狂家は措いて言はず、十九世紀の教育を受け、天國が天上にないと知つて、それで深く未開の地に入り、土蕃の言語を習ひ、聖書を譯して布教するが如き、口先きばかりのアーメンで出来ることでない。モファットは八十九歳の大部分を南アフリカの内地

に送り、その夫人も絶えず協力し、娘はリヴィングストーンと結婚し、リヴィングストーンは三十三年間に未発見地三萬哩を旅行し、途中で健康を損じ、探検家スタンレーに歸國を勧められて應ぜず、土蕃に看護されて歿した。布教よりも探検で知られたとし、布教の功も没し難く、その住居する附近で酋長が奴隸賣買を憚つた。

本年一月五日第百回誕生日をマウリチアス島で祝賀されたブスウェルは、七十二年間も其の島で布教した。島はマダガスカル島の東方五百三十哩に位し、我が四國の九分一にも足らぬ面積、人口は約四十萬、その大部分が印度人であつて、日本で云へば鬼界ヶ島に相當するもの、そこで百歳の多くを送り、本國に歸らうとしない所は、若し愚とせば其の愚や及ぶべからずとならう。そこにアングロ・サクソンの底力があるでないか。我が大陸政策に於て宗教家が何の役割を演ずるか。幾らか献身的行動があつて宜からう。(昭和一四・二・一四)

癖となつて

飲酒喫煙は程度問題であつて、一寸休養するとか、心氣を轉換するとか迄は、咎めるに及ばず、寧ろ勤めて宜いとし、どちらの中毒しないやうに用心せねばならぬ。酔うて管捲きや尙ほ可愛いと云ふも、それは人と場合とに依ること、管捲くに至つて中毒が遠くなく、或は既に中毒して居り、成るべく飲まぬに越したことがない。喫煙も休息に一本二本と云ふは差支なく、忙しい眞最中にマツチを擦るは、當人は兎も角、隣の人の氣を苛立たせ、注意を奪ふの恐れがあり、當人も癖で仕方がなく、随分自身で困ることもあらう。何かの妨げになる癖は早く矯正するやうにありたい。

休養は勉強に必要であつても、それも程度上のこと、一定の勉強した後には休養するは宜く、決して勉強のみを續けてならぬけれど、僅かばかり勉強して、だらしなく休養するは、情け癖

がつき、仕事が出来なくなつてしまふ。ぼんやり手を明けて休むのでなく、碁將棋や、カルタや、麻雀や、乃至野球や、庭球や、撞球や、遊戯で腦力又は體力を費すは、別に技術を練磨し、上達し、交際上に意外の便利を得たりするにせよ、時間と勞力とに制限があり、一方に力を分つだけ、他の一方に力を減じ、比較的全力を注ぐほどに能率が擧らず、近頃どうかして居ると疑はれたりする。

何でも何程か休養になり、氣晴らしになるにしても、下手の横好きは徒らに時間を費やすに終り、器用で上手、直ぐ進境が見え、一年で初段に聖目から二目に上がるのは、碁仲間で賞められ、自身は愈々得意になるとし、圍碁で身を立てようとするならば格別、官廳又は學校又は銀行會社に肝要な役目があつては、幾らか役目に力の入れ方を減ずるを免れない。筋肉勞働者が一時間二時間室内遊戯し、坐業者が間を得てゴルフやスキーに出掛けるのは、望ましい次第とすべきも、本業を疎かにしないやうに心掛くべきは勿論、生涯の目的とする所に更に一層力を加ふべき事がないかを考へねばならぬ。

學校の秀才で彼こそ立身出世すると期待され、豫期通りに立身出世しながら、何時しか發達
が止まり、御多分に入つてしまふのは、それだけの人間と云はゞ云へ、器用に任かせて多方面
に力を分ち、集中力を缺くに因る所ないとしなさい。片手間では何としても上達することが出来
ず、上達の野心を起さず、單に一時の氣晴らしにするに止め、餘り時間を費さぬのが宜い。下
手の横好きは困つた代物とし、器用で上手なのは、力を分つ點に於て之に似たことになる。器
用な人は一應天分に恵まれて居るとすべきも、癖となつて力を濫費するは、恵まれるよりも損
を招く。(昭和一四・二・一六)

教授の知識

知識の種類があり、林檎の落ちるを見てハテなと首を傾げるのも知識、何故に上に昇らず、
横に飛ばず、必ず下に落ちるかと考へるのも知識、地球に重力があると假定するのも知識、重

力と距離との比例よりして太陽系の運行を考究するのも知識、太陽系より他の星系、それより
も宇宙、一轉して電子に研究を及ぼすのも知識、これを分類するのが容易でないとし、林檎が
落ちてハテなと怪むは、特殊の注意力あつての事ながら、好奇心の多い少青年の期間に於て
し、それが重要な發見の暗示となれば、世間で天才と稱して賞め上ぐ。然し知識の分量に於て
は、引續いて研究に研究を積んだ後に及ぶべくもない。

電光石火的に暗示を得るは少青年期に於てし、漸く長じて漸く老成し、多く過去及び現在の
事を知る代り、將來への想像の鈍るを免れない。自然科学又は物質科學といふ所では、成るべ
く最新式の試験に注意するを要し、それを理解し、更に一步を進めるに越したことはないが、人
文科學又は精神科學といふ所では、對象が人間の經驗であつて、或る一部に適した事が必ず他
に適すると言へず、種々の事情を考へねばならぬのであつて、一通り中外の歴史を詳かにする
にも僅かの歲月で間に合はず、相當に知識に富むは中年以後の事となり、同等の頭腦を以てせ
ば、年數の多いほど知識の分量を増すべき筈。

大學の理工科では、教授たる人が最も新たな理論及び實驗を見逃してならず、感受性の鋭敏なのが望ましく、自ら發見發明に従事し、學生にも刺戟を與へる所あるが、法政經文等では、或る點で之に似て居るとも、人間の能事が新らしいのみに限らず、現在に現在の事情あるが上、過去の人で模範となり、鑑戒となるのが多く、今日及び今後に處して宜しきを得るやうに教へるには、新進氣鋭、事を未發に察するだけで足らず、東西を例證し、是非得失を明かにせねばならず、それには單に卒業して留學したと云ふのみでなく、多年の讀書及び經驗を必要とする。

若し教授が老いて氣力及び記憶を失はねば、法政經文に於て老年ほど知識に富み、判斷に長ずる順序となるが、何分にも歳が争はれぬので停年制を設けるの必要を見る。そこで全大學を通じて停年があり、ないのも何時か定めるとし、それは大略人を同じと察しての事であつて、停年前に老耄するのと、停年後に尙ほ知識の増進するのと、同列に取扱ひ、ランケ、モムセン等が出でず、留學から歸りがけのオツチヨコチヨイに花を持たせ、それが調子に乗つて桁を外

したとて、他のオツチヨコチヨイと取換へ、オツチヨコとオツチヨコとの鉢合せと云ふのが近頃の問題となつて居り、これも時代相應の良い經驗、改善の代償として高くもなからう。

(昭和一四・二・一八)

英才の教育

孟子に色々の名言ある中、天下の英才を得て之を教育するを君子三樂の一としたのは、後に「教育」といひ、「育英」といふ語が擴まつたゞけでも、世に重要視せられたことを察するに足る。「教育」は英才を教育するに限らず、低能の教育、廢疾の教育、畸形兒の教育も、人道上に必要とし、英才を教育し、その性能を充分に發達せしむるは、幾らか教育の志ある者の何よりと考へる所であらう。先生と云はれる程の馬鹿が英才を教育し得べくもなく、馬鹿に教育さるゝは馬鹿たるを失はないやうでも、英才の語に拘泥せず、先に生れた者が後に生れた者を

導くと云ふ意味で、普通の人間として義務ともなり、樂みともなる。

然し國家社會の發達しない間は兎も角、その相當に發達した以上、教育は個人の欲する儘にして置けず、國家自ら任に當るべき事になるが、大局よりして劃一に流れ、法令規則で能不能を同列にするが上、財政の都合で動きの取れぬことがあり、そこで私立學校の興るべき餘地があり、必要がある。官公立でも英才を教育し得ないでなく、實に幾人をも輩出したものゝ、鶯が子を産むが如く産みつ放しの所があり、私立の方が世話が届くと考へるも尤もとし、たゞ先生たる人に金がなく、官公立ほどに設備が整はず、英才を教育するなど、思ひも寄らぬことが無いではない。案外に貧乏から英才が出るにしても。

小學校は殆ど悉く公立であり、中學も已むを得ねば悉く公立となるべきをば、私立で經營するがあるので、設くべきを設けず、均しく中學と稱して卒業生に少からぬ優劣を見る。大學は表面に何と言つても、帝國大學を標準にし、似て非なる者にならうとし、果して英才を教育するの任務に満足し得るやが疑はし。實は私立學校で収入を心配せば格別、英才の教育を樂み

とする以上、文部省で規定する所を文部省に一任し、劃一的の規定で出来ない所を敢てして然るべきでないか。小規模ながら自由學園の如きは一機軸を出してゐる。

慶應義塾や、同志社や、大學令に依らずに居れんだかと聊か惜しい氣がせぬでない。金に不自由ならば致し方なく、何とか都合がつけば、特殊の組織に於てし、官立よりも人材及び業績を出だし、他山の石たる方が何程教育界に貢献するか知れぬ。藤原銀次郎氏が慶應義塾に工業大學を設くるは、眞に結構な計畫、帝國のために賀すべきも、官立大學と同じものを設けるでは、政府で財政の都合のつく次第、何時でも出来ること、成る程と感心するを得ない。大學令に依らず、天才の徵候あるは中學を出なくても入學せしむる位的事があつて宜い。凡人の教育も必要とし、英才の教育こそ私立學校で第一の念願とすべきでないか。(昭和一四・二・二〇)

天才の程度

天才の最も明白に知られるは、東洋で碁將棋、西洋でチェスに於てするに若くはなからう。それは技術が簡單なからでもあるけれど、生れながらに特殊の才能を備へて居ることが、小兒の時から認められ、「梅檀は二葉より馨し」との諺が斯くまで適切に當嵌まるのがない。圍碁の名人となるには、十歳、遅くとも十五歳までに初段とならねばならず、さうならぬのは如何に勉強したとて、大抵の所で止まつてしまふ。カブラランカはキューバ島に生れ、四歳（日本流の五歳）でチェスを覚え、六歳で父に勝ち、間もなく島内に第一位を占め、一九〇五年十七歳でニューヨークに出で、コラムビヤ大學に入り、一九〇九年米國の選手マーシャルに勝ち、一九一九年國際競技に全勝を得、一九二一年再び全勝を得た。眞に天才。

相撲や、拳闘や、技術に屬しても、體格を以てする所が多く、生れながら相撲上手と云ふよ

りは、生れながら體格非凡とか、偉大とか云ふことになつて居り、相撲の天才と稱するのが普通の會話に適しないと感ぜられる。圍碁や、チェスや、體力をこそ要しなければ、智能に於て相撲拳闘等に分類すべき所があるにしても、兎も角も盤面に對して端坐する所は、一種の智慧較べに相違なく、一石又一石、一石毎に傍觀者の端尻し得ない所に出で、成るほど天才は違つたものと感歎せずには置けぬ。

碁將棋と云つて輕んずべきでなく、その名人たる者、又は名人に近い者は、何處でも相當の禮遇を受け、世間の世智辛さを覺えないが、「この時局に碁將棋でもなからう」と横槍が入らぬでなく、さう言はるれば折角の天才も餘り幅が利かなくなる。と云ふのは天才は天才でも、天才が簡單なからであつて、石や駒の代りに人間を使ふに至つては、天下の人が「英雄豪傑」と稱し、或は「蓋世の雄」と讚美するに至る。源義経は生れながら戰爭の天才であり、ナポレオン一世の如き、その極度に活躍する者であつた。「運用の妙が一心に存す」と云ふに替りがなく、即ち質が同じであつて、量が比較を許さぬ程に違ひ、あれはく／＼とばかりになる。

然し量を増大するに伴ひ、複雑の度を加へ、果して何の程度の天才か、容易に測るを得ない。生涯の事業に於て義経も失敗し、ナポレオンも失敗した。それ程の天才なく、寧ろ凡倉なる方が、安樂に生活し、或は榮耀榮華に世を送つて居り、その代りに何不足なく暮らし、隣近所に羨まれた連中が、生きてとも死んだとも後に傳はらず、歴史は幸不幸の判らない人が大部分を占めてゐる。簡單なる天才は何段と段附けにするを得るけれど、複雑なるはさういふ譯にゆかず、棺を蓋うても事が定まらず、或る點で成功し、或る點で失敗し、智か不智か、判斷がむづかしい。(昭和一四・二・二二)

小さな島の男

西印度にトバゴといふ小さな島、面積は我が佐渡の三分一、人口は其の五分一、地圖で一寸見えぬ位のものがある。島の名からして「はー、煙草の初めて出た地」と想はれもするが、

幾らか煙草が作られこそすれ、トバゴとタバコと全く關係がなく、タバコとか、トバコとか、本来メキシコ語とも、サント・ドミンゴの煙管の名とも云はれる。それならばトバゴといふ島は何か注意すべき事があるかと問はるれば、何分にも見えるか見えぬか位の島、精々で煙草の産地と誤解せられるが關の山とせずに置けず、誠に下らぬ話、先づ地圖でトバゴといふ島が見當つたならば手を擧げなさいとでも云ふべき所。

その島が見當つたが、それがどうしたと云ふことになるか。別段の事があるでなければ、本年その島でウイリヤム・カメルといふ黒人が百十六歳(東洋では百十七)で死んだ。これはセント・ヘレナ島でポルトガル人に奴隸として賣られたのをば、一八五〇年(嘉永三年)英國軍艦に救はれ、トバゴ島に移り、大百姓の一人となつた者であつて、數年前に三度目の妻を娶り、最初の妻で子や、孫や、曾孫や、澤山あるとのこと、セント・ヘレナに奴隸となるまで、何處にゐたかは記載されず、當人の胸には前所有主の焼印が押されてあつた由。トバゴ島には他にオール・エドワードといふ奴隸出身が居り、これはカメルより十年後れて來たもの、年齢

は不詳。

それだけの話ながら、所有主の焼印を押した奴隷の遺物が現に存在することが、博物館的の價値があり、今更のやうに奴隷の歴史を語る。ポルトガル人に賣られ、英國人に救はれたと云ふので、英國人が大きな顔するが、その少し前まで執れが執れと云ふことなく、たゞ英が幾らか早く切り上げた所に實利主義の敏活さを見る。英は儲けに抜け目なく、遠慮會釋もあつた者でなければ、廢止が有利と見れば、人道を高調し、我が力で廢止になつたかに吹聴し、涼しい顔をするのがいつもの例。

彼のカメルも英に救はれ、これを恩としてゐたらうが、それはそれとし、カメルが何時セント・ヘレナに移つたかゞ判らず、若し同島に生れたとせば、ナポレオン一世の歿した翌々年のこと、廣い世界に奇しき因縁とするに足る。それでなくても、賣られる土地が幾らでもあるのに、渺茫たる大洋の一孤島に賣られ、千古の英雄大ナポレオンと聊か運命を同くし、一は恨みを吞んで終り、一は希望を懐いて去つた所に多少の興味を咬らぬでない。壽命に於て前奴隷が

前皇帝に一倍するに餘りあるのみならず、地主様として農夫に敬はれ、兒孫の永く繁榮するを自撃した邊、小さな島の男ながら、偶然にも只の島の男と違ふ。(昭和一四・二・二四)

人間の疵

西郷南洲が僧月照と共に入水し、勝海舟と談笑の間に江戸城を授受したと云ふこと、如何にも英傑の風格を見るに足るが、西郷が江藤新平の窮狀を訴へるに耳を假さず、その梟首されるが儘にしたのは、可なりに冷酷な處あるを示す。江藤は果斷決行、情實を容れず、人に憚らるるも、人に愛されず、大久保と仲違ひしたが如く、西郷にも餘り面白くなかつたらうけれど、征韓論で進退を俱にしたが上、輕卒とは云へ、事を起して失敗し、究鳥として懷に飛び込んだからには、及ばぬ迄も出来るだけの事をせねばならぬ。江藤はそこを見込んでの事であつたらうに、寧ろ權もほろゝの態度に失望し、絶望し、切齒もしたらう、さういふ男と思はなかつた

にと。

これは西郷にも事情がないではなく、征韓論には主動者を繞つて策士が出没し、殊に土肥の策士が薩長兩派を分離するは此時とばかりに動き、先づ薩を助けて出兵せしめ、薩人に花を持たせ、形の上で政府の主腦とし、實に於て自ら之を操縦するの魂膽であるとして、誠しやかに吹聴するのがあり、長州側で尾緒をつけて宣傳したらしく、西郷が東京を去るに臨み、板垣が將來も相ひ共にすべきを言ふを聴き、「これから別でござす」と言ひ捨てた所、既に癩癩に障つて居り、江藤も同じ穴の狸くらゐに思つてゐたらう。正直な處があるだけに、水をさす者を信じ、人一倍に心持ちを悪くしたらう。

『獨不適時情、豈聽歡笑聲』とか、『探塵不耐衣裳汚、村舍避來身世清』とか、とかく世を避けるの氣持ちになつて、同情心の狭くなるを免れなかつたらう。若し江藤に同情し、滅刑に努める程ならば、大久保と睨み合ひせず、私學校黨の騒ぎが起らなかつたらう。その騒ぎで徴兵の實地演習を行つたと云ふものゝ、實地演習は他に幾らでも方法がある。大久保も大久保なが

ら、西郷も早く頭の發達が止まり、頑固に傾き、海舟の謂ゆる『蓋世の雄』が九州の一隅に没落し、惜しいとも何とも言ひやうがない。

さう云へば、當時の要路者は悉く西郷の親友、又は縁故、又は屬僚であつて、一人として西郷を救はうとせず、偶々山縣が書翰を貽れば、これに自殺を勧めるに過ぎない。自殺するか、しないか、西郷自ら百も承知、山縣のお切介を待つまでもない。勢の猖獗な頃は兎も角、城山で戦死を待つて居る頃、誰か一人くらゐは西郷の救ひ出しに乗出すべきに、全く見殺しにするとは、人物があると云つて、悉く知れたものとせず置きぬ。才能を云ふのでなく、人間がつてゐない。明治がさうであり、大正がさうであり、昭和がさうであり、それが浮世といふもの、まゝならぬのみでなく、人情の疵として遺憾に思はねばならぬ。(昭和一四・二・二六)

英米の前途

二五八

現代第一の富強國は英帝國、何と云つても世界陸土の殆ど四分一を占めて居り、持つ國として押しも押されもしないが、滿つれば缺くる世の習ひ、もはや全盛を過ぎたとせずには置けず、事實に於て之に代はるは、領土こそ斯くまで廣くなけれ、今を盛りに時めき、世界を我が物顔に振舞ふ米聯邦であること、彼れ自ら任ずるは勿論、少くとも一應は他も之を許さねばなるまい。ジョン・ブルに代つてヤンキーが出るとは、如何に後者が民族として雜駁とは云へ、アン・グロサクソンが近く二世紀來、飛躍的態度に出で、最も著しく勢力を張つたことになる。

英國が伸びる前、一時スペインが伸び、海上を横行するの勢を呈した。急に伸びて實力が伴はなかつたけれど、兩半球を跨にかけ、凡そ敵對する者を叩き潰すべしとて、英國の従はないのを怒り、「最も幸運なる艦隊」を派遣し、暴風に、戦争に、最も不運なる結果を齎らし、國

運が釣瓶落しに傾き、その反對に英國が海上に覇權を唱へるに至つた。これは別に禍が福となつたもの、即ち英が歐大陸に根據地を失ひ、已むなく海外に利權を求めたのが、太陽の領土内に没しない所となつたのであつても、大陸で海外に着目する時は既にユニオン・ジャツクが到る處に翻りつゝあり、他國で齒噛みしても及ばず、英國でどんなもんだいと身振りし、自由貿易の説法とごさゝい。

實利主義で固まり、世界政策を算盤で割り出す英國が、取返しに附かぬ失敗を演じたのは外でもなく、米洲植民地十三州の獨立であり、それは現に四十八州の大國となり、世界の金貨の半分を所有し、眼を開いて黄金萬能の夢を夢みてゐる。米國は人口が少く、國力が足らなんだ間、米洲の事は米洲で處置し、他の大陸の事は與かり關しないと標榜したが、後にスペインと戦ひ、キューバ島、フィリッピン島等を奪ひ、グワム島の防備を嚴にするとか、せぬとかで上下兩院に議論が涌く。グワム島の防備を嚴にして何をするつもりか。嚇かしては可笑しい。

スペインは英國を攻めて失敗し、英國は米洲植民地と戦つて失敗し、米國は兵を亞細亞に加

へようとし、失敗の路を辿るのでないか。米は世界大戦に加はり、獨塊に打撃を與へたとして得意がり、その割合に利益がなく、さういふ筈でなかつたに悔い、そこで戦争の利害得失に感ふが、亞細亞で戦ふを何程の事に思はず、阿弗利加へ獵に出掛けるやうに心得、愈々開戦となつて引くに引かれず、折角積み上げた金貨を撒き散らし、何の得る所がなく、民心が沮喪し、進歩が停頓し、他の或る國の愈々發展を續けるを羨むに至らないとしない。グワム島の防備を嚴にするは、米國の蹟くスタムプリング・ブロックを豫告しないか。(昭和一四・二・二八)

汝に出て汝に返る

世界で最も無智な蠻族と云へば、濠洲の土蕃を擧げる事になつて居るが、その土蕃が世にも不思議なブーメランを發明し、これを實用に供し、これを遊戯に使ひ、ブーメランの語をして世界的ならしむるに至つた。東洋でこそ今尙ほ餘り其の語が知れなけれ、他で殆ど一の諺を捨くを禁するを得ない。

となる迄に擴まり、『汝に出て汝に返る』を意味する。製作は極めて簡單、一メートルに足らぬ薄い曲つた木片をば、一面を平たくし、一面を圓くしたゞけのもの、それを投げやうによつて遠く飛び、廻り廻つて手許に返るのであつて、その廻轉で種々の曲線を描く所、文明人が舌を捲くを禁するを得ない。

孟子に曾子の言として『之を戒めよ、之を戒めよ、爾に出づる者は爾に反る者なり』とあるは、或は『爾』が『還』に通じ、チカキと訓すべしと云ふも、一般に『爾』を『汝』と訓するのみならず、それが適切に耳に響く。曾子が『之を戒めよ、之を戒めよ』と累ねて言つたのは、よく／＼重きを置いたものと考へられる。孟子も成る程と思つて引用したのであらうけれど、その割合に後世の儒者が注意を拂はなかつたのは、充分に意義を解せず、尤ものやうでもあり、當てならぬやうでもあるとした所があらう。その邊は曾子が徹底したに相違なく、人事に着目し、一切の事が汝に出て汝に返るとしたらう。

世間の事は一樣でなく、悪人滅びて善人榮えると限らず、天道是非かと歎じ、神も佛もな

い世の中と言ひもするけれど、菅原道實が太宰府に流されたのは、藤原氏に楯突いたからであり、楠木正成が湊川に戦死したのは、足利氏に反抗したからであり、一方に禍を求めて禍を得たとなると同時、一方に仁を求めて仁を得たとなる。道實が時平に、正成が尊氏に、御無理御尤もと御機嫌を伺つたならば、御家の繁昌疑ひないとしても、現に人が認めると全く違つた人物となつて知られて居らう。天道の是非は必ずしも安樂不安樂を意味せず、これを超越し、時として反対になる。それも汝に出て汝に戻る。身を殺して仁を成すは天道に則るものとし、安樂を欲せば其れ相當の事をするを要し、不養生をして養生を望むやうな事あつてはならぬ。情けは人のためならずと云ひ、報復を考へての情けは眞の情けでなければ、情けは情けを以て報いられ、無情は無情を以て報いられるだけの事がある。身から出た錆とは悪い方面を指すとし、善い方面も均しく身から出るに相違ない。文明國で案外にブーメランを知らなんだが如く、案外に汝に出て汝に戻るの關係を知らず、播くを要しない不徳の種を播き、その種から不徳が発生するを怪むこと、文明も鍍金を免れない。(昭和一四・三・二)

昔の南蠻

「南蠻」といふ語が昔から傳はり、凡そ南方から船に乗つて到來する者を悉く斯く稱したが、「南蠻鐵の兜」と講釋師が語るはスペインであつて、同國トレド市で今尙ほ當年と同一の鐵を製造し、トレド製として世に好評を博してゐる。然し日本に南蠻鐵が評判になりかけた時、その製造の本場なるトレド市が衰へ始め、即ち從來全國の首都であつたのが、首都がマドリッドに遷り、繁榮を奪はれることになつた。マドリッドが首都となつて間もなく、スペインが世界の最大強國たるかの觀を呈し、織田信長が京都で四町四方の地を南蠻寺に寄附したりしたのに、その盛んなスペインが急轉直下で衰へ、南蠻と呼んだのが阿蘭陀と呼ぶことになり、南蠻の語が僅かに「鴨南蠻」に残る。

スペインの如く、急に隆盛を極め、急に衰へたのは、歴史上に多く類がなく、國家として大

成金に成り上り、大成貧に成り下つたことになる。現に面積が我が内地より廣く、人口が我が内地の三分一とは、單に面積と人口との比例よりして將來の發展を期待し得べきが如く、往昔現在よりも人口が二倍し、それが次第に減じたとあつては、その何の故なるかを疑はずに置けぬ。今は幾らか増加の傾向があるとし、既に減じたが上、これに伴つて國運の衰へたこと、國家として最大問題でないか。

兎も角も大國の盛衰であり、その原因を挙げれば數限りもなく多く、土地及び氣候のアフリカ的事、民族の雜駁にして割據すること、變亂の多いこと、迷信の強いこと等々、悉く與かるとし、國王の命でコロムブスが新世界を發見したのに續き、國內の人が富を求めて我も我もと押し出し、人口の減ずる一方、力に任せて掠奪し、あぶく錢を得、寢轉んで暮らす懶惰性を助長したことが、頗る多く與かつてゐる。江戸子が宵越しの金を遣はぬとは、參勤交代で注文が多かつたのに因る。スペイン人は新領土で我儘一杯に振舞ひ、起きて働く馬鹿も居るかなど喝破し、それが習ひ性となり、働くよりも乞食するを當り前とし、誇りとするに至つた。

スペイン人が海外に發展し、自墮落で生活し得たのは、國運が停頓する所以となつた。海外に發展するは宜く、大に獎勵せねばならず、旅の耻は掻き捨て、自墮落に流れるは、當人のみの損失に止まらない。スペインはフランコ將軍が前皇帝の第三子ドン・ファン親王を奉じ、イタリーの首相シギヨル・ムツソリニの如く國家を改造し、民心を刷新するかどうか。事は全く別世界の話でなく、海外への發展を獎勵する時、良影響を考へると共に、惡影響をも考へねばならぬ。昔の南蠻の一時全盛を論ひ、程なく衰頹の一路を辿つたことは、後世に反省の教訓を遺さぬでない。(昭和一四・三・四)

彼の父と子

自分は齋藤博氏を知らず、知つたとすれば其の幼少の頃に顔を見たか見ないか位であり、成人して官に就き、外交界に活躍してから、絶えず噂を聞きつゝ、一度も遇つたことがないと

し、その父なる祥三郎氏とは、餘り往來こそしなけれ、遇へば互に勝手なことを言ひ合ふ間柄であつた。と云ふのは杉浦重剛、宮崎道正等數氏の設立に係る東京英語學校に、札幌農學校出身の志賀重昂、菊池熊太郎、今外三郎等諸氏が教鞭を執り、それ等の人々と雜誌を發行したことがあり、齋藤祥三郎氏も其の仲間であつて、何かにつけて話し合ひ、帝國憲法の英譯を批評したのを雜誌に載せたりもした。

後に志賀氏が洋行から歸つて云つた、『ワシントン大使館に目立つた紅顔の美少年が居り、それが「齋藤です」と挨拶し、齋藤誰かと思へば、祥三郎の息子と云ふに驚いた、あんなに顔が違ふものか』と。實に父は縦からも横からも風采が揚がらず、外務省に奉職し普通以上に外國語が出来ながら、昇進しなかつたのは、主として容貌よりして居らう。風采が揚がらぬと云つても、彼の如く揚がらぬのは珍らしく、單に小さくて不男たるのみでなく、お世辭を言つてお世辭と聞えぬ程、表情に拙であり、それが外交官となつたので、立身しないのも已むを得なからう。語學の才能があつたにしても。

齋藤祥三郎の名は大日本人名辭書にも、新撰大人名辭典にも見當らず、後者には齋藤庄三郎と云ふのがあり、京城高等法院部長であつたとか。庄三郎を知る人が何程あらうか、その庄三郎があつて、祥三郎がない位、祥三郎が埋もれた。所が祥三郎の子なる博が外交官としてめきめき昇進し、米國に大使となり、内外人に評判最もよく、不幸にして病に罹り、官職を去り、遂に彼の地に歿したが、米國政府で軍艦を以て遺骨を禮送するのみならず、本國で小村侯以來の外務省葬を執行するとは、萬が鷹を産んだとすべきものかどうか。

彼の父は萬と見えて萬でなかつたのであらう。確かに語學の才能があり、その才能が子に傳はり、更に發達したと思はれる。父が風采揚がらず、社交に拙であつて、子が美貌で愛嬌に満ち、人と語つて誰にも好感を持たした所は、天の戯れか、兩極相一致してか、それとも美醜は僅かに皮一重、毫釐の差千里を致し、本來多く言ふに足らないか。それはそれとし、彼の父と子と、二代續いて外交員に成長し、父は有るか無しかに取扱はれ、子は爵なくして有爵者以上に待遇され、燦然光を放つたこと、やはり此父にして此子ありと云ふべき所であらう。自分は

齋藤大使よりハル國務卿に宛てた海軍制限撤廢のノーチスを扁額にした。(昭和一四・三・六)

二六八

無情な事

今ならば西郷一派の城山での戦死寫眞が大々的に新聞へ掲載せられる所であらうに、さういふ事がなかつたのみならず、西郷の寫眞が遂に傳はらず、キヨソネの鉛筆畫が精々のものになつてゐる。その三年前の佐賀の亂も寫眞がなければ、江藤新平の梟首の寫眞が傳はり、昔の御用儒者ならば「臭を萬年に遺す」と記載する所であらう。後にこそ發賣を差止められ、事もあらうに梟首を撮影させ、全國の寫眞店に掲げさせたのは、其筋に於て見せしめとやらにしたのでないか。何省の誰が取計つてのことか。大久保の日記を読めば、滿更でもなさうに思はれる。

江藤を梟首にし、耻を世間に曝らさせたのは、行政の手都合に於てし、即ち能ふ限りの極刑

を以てし、不平士族の肝玉を冷やりとさせようとしたのであらう。それも時に取つての一考へとし、若し江藤が最も淺ましい刑に處せられたならば、大久保が最も殘酷なる殺され方をしたとせねばならぬ。六人が各々刀を加へたので、創口が多いが上、止めに刀を刺して置いた所、我國で餘り類のない殺され方であらう。それと云ふのも、已むを得ないとしての事ながら、多くの友人に對し、無情の處置を敢てした報復でないといけない。大久保自らは餘り恨みを受けな
いと思つてか、刺客が出發したとの報告に接し、外出に護衛を伴はず、ピストルを携へなかつた。

大久保も大久保なれど、江藤を極刑に處したのは河野敏鎌であつて、これは江藤の世話になつたもの、それが裁判で江藤に宣告したので、江藤の憤懣一方ならず、「恩知らず」と喝破し、法廷に見苦しい場面を展開したが、河野は功利以外の事に馬耳東風、それで買はれたのであつて、幾度も大臣になつたものゝ、五十一歳で突然「伯爵になつたから参内する」と言ひ出し、どこか調子が變になり、翌年狂つた儘で歿した。徹毒のためと云ひ、さうであつたとし、兎も

二六九

角も何かの祟りのやうに見え、誠に争はれぬものと言ふ所では言つた。

菅原道眞が太宰権帥に任じ、太宰府で歿したのは、江藤と比較にならぬ程であつても、後に祟りが恐れられ、左大臣正一位を贈られ、太政大臣を贈られ、天満宮に祀られ、神社の数が全國で一萬に上るに至つた。平將門さへも神田明神に祀られるは、祟りの恐れられる時代、江藤が何等かの禮遇を受けて居らう。死ぬもの貧乏、祟るなら祟れとあつては、物質萬能で仕方がなけれど、やはり天網恢々疎にして漏らさず、親戚を構はぬとか、友人を賣るとか、蔭に廻つて人を禍ひに陥れるとか、何とか無情な事をする者は、誰も祟らず、祟りやうがなくても、祟つたと同様なことがあり、時として祟るよりも空恐ろしく思はれる。(昭和一四・三・八)

惜しい感じ

西郷隆盛が僧月照と相ひ抱いて入水したのは、三十二歳の血氣盛りで放浪生活の時のこと、

江藤新平の救ひを求めるを拒み、極刑に處せられるが儘にしたのは、四十八歳の分別盛りで維新の元勳と云ふこともあつたか、前と後とで調子の合はぬ所がある。江藤は西郷の俠氣を信じて飛込んだのであらうに、西郷は一向に肌をぬがず、危険を冒して土佐に去るを餘儀なくした。これには種々の事情があり、西郷として江藤の極刑に處せらるべきを知らず、自首しても大した刑にならず、かくまつて政府と面倒を起すに及ばぬと考へたかも知れぬが、江藤から見ても随分薄情であつた。それで西郷たるを得るか。

江藤が極刑に處せられると知れて居れば、西郷もまさか全く捨て置かなかつたらう。政府でも面倒の起るを恐れ、遮二無二極刑に處した。西郷もさうと知つたならば、江藤が救ひを求めた時、鹿兒島縣の何處かに身を隠させ、自ら知らぬ顔をして居り、萬已むを得なければ、部下を以て守り、自身又は代理で官吏と談判し、事に依つて一戦を辭しないとの態度に出たらう。そこは政府で見えて取り、先んじて勢を制し、その勢で西郷一派の全滅にまで運んだ。西郷が江藤を見殺しにしたのは、やがて自ら城山の露と消える所以となつた。

そこで疑の出るは黒田清隆の事であつて、黒田は進退を賭して幕臣榎本武揚等の助命を願ひながら、郷里の先輩及び友人の死を待つに對し、單に成るが儘に任かしたのは何故か。既に勢が變じたにせよ、黒田が西郷の助命に奔走したならば、當年の歴史に一光彩を放つ所であつた。彼は幕末英豪の風を帯び、第二次三人男大隈、伊藤、山縣と趣を異にすると思へたのに、郷里の先輩等を見殺しにした所、やはり年齢及び境遇もあるか。前には三十歳、後には三十九歳、大きな隔りなくとも、早熟早老の身とて、五十歳を多くも過ぎず、形骸のみの廢物と化した程で、何とも致し方ない所か。明治の歴史に今少しくヒーロイツクな行動もがたと惜まれぬでない。

米國の南北戦役は、普國參謀總長モルトケが注意の價値ないと言つたにしても、兩軍の戦死が合せて百萬、國家の存亡に關したに相違なく、北軍で南軍を叛軍と稱し、徹底的に殲滅を期した。所が南軍の主將リーは將材に於て北軍の主將グラントに優るとも劣らず、若し早く全權を委ねられたならば勝利を得たらうと評せられるが、そのリー將軍は戦後にレキシントン市の

ワシントン大學總長として餘生を送つた。人情大統領リンコンもあつての事ながら、ヤンキ一の何處かにヒーロイツクな気分があると云はれ、これを打消す譯にゆかぬ。過去を顧みて現代に及び、あれやこれや惜しい感じがする。(昭和一四・三・一〇)

凡にして珍

コッツォオ平原と云つては、我國で特殊の地理學者及び歴史家を除いて知るものが無からう。今はユーゴ・スラヴィア國に屬し、世界大戰の際、獨逸のマツケンゼン元帥がブルガリア兵を并せて襲ひ來り、セルヴィア側で軍隊が苦戦して退き、多くの人民が飢えと寒さと疲れとで斃れ、印度婦人エルジー・インギリスがスコットランド婦人看護隊を率ゐて活躍したことを以て記憶されてゐる。インギリスの傳記はフランセス・バルフォア夫人の手に成り、夫人はアーガイル公の女、その夫は英國元老の弟であり、そのみでも英語通用の區域内に多少の話

題となるを失はない。

所でコツソヴオ平原に英音でザイチャと稱する村があり、これも當年の戰場として知られるが、村にヴェツセリ・セイヂエヴィツチと呼び、本年百二十六歳（東洋で百二十七歳）になる老翁が居り、十四回結婚し、結婚しないのと并せ、二十一人の妻で四十一男、二十九女を儲け、祖父として、曾祖父として、高祖父として三十七家族、總數二百三十八人に上り、妻で一人も存命するのが無く、彼自ら『今一度結婚したく、たゞ適當の女がない』と言つてゐる由。戦亂で荒れ果てたと思はれる土地に、斯かる長壽者が存命し、一家繁昌（繁昌でなければ子澤山）とは、造化の戯れとすべきかどうか。

百二十七歳では生れが文化十年、一八二三年となり、ナポレオン一世がエルバ島に流される前年に當る。今のユーゴ・スラヴィアはローマニア、ブルガリア、ギリシヤと共にトルコ領であつて、瘠せても枯れてもオーストリアがフランスと相ひ對して歐大陸の兩大關となり、外交の中心がバリーカヴィーンかと云はれたのに、そのオーストリアが崩壞して消滅したとは、

そのみでも列國の變遷を察するに足る。トルコ領からセルヴィアが獨立し、更にユーゴ・スラヴィアとなり、國家の大變革ながら、彼の老翁は特に亂を避けず、生れた土地に居つて武陵桃源と同様に心得て居るらしい。

セイヂエヴィツチは長い生命を如何に送り來つたか。幾回も戦亂に遭遇し、徒らに逃げ廻つたと思はれず、自ら戰場に出たかも知れぬけれど、長命の外に何一つとして記載されず、今でも結婚したがつて居る所、人間として餘り價値がありさうになく、鶴は千年、龜は萬年、單に長さがあつて、幅もなく、厚さもないと見える。然し『生めよ、殖えよ』と云ふよりせば、一生で二百三十八人の眷屬を造り出したのを容易ならぬ事業とせず置けぬ。當人のみを見れば、恐らく平々凡々の凡人、長命の新記録を作り、一代で大家族を出現した邊よりせば、珍中の珍とならう。（昭和一四・三・一二）

獅子身中の蟲

二七六

我國で誰も見たことが無くて、如何にも眞實らしく思はれ、普く世の諺となつたのに「獅子身中の蟲」と云ふのがある。これは佛教で獅子身中の蟲が内から獅子の肉を食ふが如く、佛教徒自ら佛教を破滅させる恐れあるを説いたからであつて、人間の條蟲を聯想し、成る程と頷かれ來り、忠臣藏の斧九太夫の如きが其の最も適當な例となつてゐる。然し獅子は動物園に來るまで、「牡丹に唐獅子」として假想の動物に屬し、その實物を見たものがなく、固より身中に如何なる蟲が宿るかを知らず、専ら人間の條蟲で推察するの外なかつた。所で身中の蟲が果して身の肉を食ふかどうか。さういふ事があるものか。

獅子の身中に特殊の蟲が宿り、身の肉を食ふかも知れぬけれど、條蟲より推して考へれば、身の肉を食ふのでなく、消化器に附着して養分を吸ひ取るのであり、悉く吸ひ取れば、獅子も

遂に斃れずに居れまい。條蟲で人間が斃れた例がないとすれば、獅子も身中の蟲で斃れた事がないらしいが、少くとも衰弱する位のことではあらう。そこで「獅子身中の蟲」の比喻が或る程度まで當るとし、獅子の肉を食ふのでなく、その養分を吸ひ取り、間接に衰弱の原因となると訂正すべき事になり、九太夫ならば御家の金を多く取らうとするのが蟲の作用であつて、縁の下で密書を読むが如きは、蟲の作用を取り越してゐる。

獅子身中の蟲が身の肉を食ふを意味せず、養分の幾分を吸ふを意味し、寄生蟲の別名たるに過ぎなければ、凡そ政府から金を取り出し、それに相當する仕事をしないのは、悉く獅子身中の蟲の範圍に入る。政府の大々的歳出入を以てせば、何萬といふ桁が何程のものでなく、千や、百や、何處の隅にあるか知れず、御用を申込むのが引切りなしとて驚くに足らぬけれど、塵も積つて山、より必要な仕事をするの妨げにならぬとしない。何でも幾らか尤もらしい理由があり、得べくんば助成するに若くはないとし、肝要な活動の鈍るを何と見る。

政府で出来るだけの事をせねばならぬが、國事多端の際、それも在り來りの多端でなく、建

二七七

國以來の多端とあつては、こゝが人間の働き所とし、政府の事は政府に任せ、成るべく政府に厄介をかけず、各自成し得る限りを成してはどうか。何としても政府の助力を仰がねばならぬ事は致し方ない次第ながら、國運の發展に伴ひ、國民各自に着手すべき事が増加し、金持は金持、金持たずは金持たずで方法がある。政府に何程金があつても足らぬ場合、無能の官吏は勿論、官金を引出し、其れ程の事をしないのは、總じて獅子身中の蟲たるべきでないか。體内の肉を食はなくても、その養分を吸ふは、明かに獅子身中の蟲とする。(昭和一四・三・一四)

國際法の父の記念

先月十五日英京ロンドンの蘭人寺院に於て、アスロイン伯の手で「國際法の父」ユーゴー・グロシアス(蘭名ユイグ・ヴァン・グロート)の大理石製扁額の除幕式が舉行された。英國のグロシアス協會及び國際法協會の斡旋に係り、英と蘭との國旗が翻り、ロンドンの市長も出席し

た。アスロイン伯は現にロンドン大學の名譽總長ながら、除幕式に於ける資格は、その職名を以てせず、祖先の關係を以てした。と云ふのは祖先のヴァン・リードが蘭國にてウイリヤム三世に仕へ、アスロインで戦功を立て、伯爵となり、幾代も蘭國に住居し、後に英國の皇族が爵を嗣いだといふ、約二世紀半の英蘭兩國の史的關係が最も多く與かつてゐる。

グロシアスが眞に「國際法の父」とすべきかどうか、全く疑問ないでなければ、現代に於て一般に斯く認められて居り、斯く認めて差支ないとし、人物及び經歷が特異の存在を示し、即ち同胞十二人中で彼れ一人が残り、他は悉く天死し、残つた一人が生れて神童、八歳(東洋の九歳)でラティンの詩を作り、早く古典に通じ、十七歳で辯護士となり、それから種々の官職を帯び、内亂で終身禁錮に處せられ、妻の計ひで脱出し、佛國に逃れ、そこで「戦和法」を著はしたのが、後に國際法の父と呼ばれる所以であり、更に瑞典に聘せられ、佛國へ大使となつて赴任した。

國際法協會の議長マクミラン卿は、「グロシアスは和蘭のみならず、全文明世界の光榮であ

る」と云ひ、「法則及び秩序が多くの地域に無視せられる今日、福音の豫言者を追憶するは新たに意義がある」と云つた。蘭國外相バチーンはアスローン伯の健康を祝し、「蘭國でユーゴ・デ・グロートと稱する人の記念祭は、その主義及び觀念の輕んぜられる時代に愈々必要」と云ひ、ハリファックス卿は「戦役の齎らす物質的損失が恐るべきにしても、道徳的損害に較べ得るやが疑はしく、グロシマスは三百年前に之を世界に教へた」と云ひ、終つて左の如く蘭國女王のメッセージを読む、「世界の善のため、この記念物は蘭國の此子が國際關係に苦慮した觀念を永續するに役立つ。」

英國で今更のやうに「國際法の父」を記念し、近頃世界で國際法を輕んずるを歎息するは、或る一部で心から正義人道を念としての事にせよ、狼が法衣を纏ひ、勿體らしい事を口走り、それが近年になつて前ほどに効力ないに由來する所ないか。國際法を應用する範圍は、三百年間に著しく擴大したけれど、随つて補綴すれば、随つて破綻し、力あれば權あり、權あれば利ありと云ふ所に於て、特に變化と稱すべき者を認むるに至らない。これは今の狀態で致し方な

く、英帝國が如何に反省するかと試金石とならう。(昭和一四・三・一六)

チエコの運命

「腰の刀はダテには差さぬ」と云ひ、その「ダテ」が「伊達」に通じ、仙臺の殿様及び家來が華美を好んだやうに考へられ、實は根も葉もなかつたと同じく、放縱とか、磊落とか、無軌道とかを「ボヘミアン」と呼び、其の本國なるボヘミアに何等變哲なことなく、羽目をはづして浮かれる所か、一般に勤勉で質素に日を送り、何としてボヘミアンの語が出たかと疑はれた。考證家(ポット、ミクロジヒ等)の説に據れば、一群の部族が印度から出てアルメニアを過ぎ、數世紀間バルカン半島に留まり、それから西に進み、佛國で其れがボヘミア(ベーム)から來たと認め、英國でジプシーと稱し、他でギタノス、チンガリ、チンギヤネス等々、色々に呼んだとあり、藝術上にボヘミアンの語の擴まつたのは佛國小説家ミュルジエーの「ベームの生

活』、續いて英國小説家サツカリーの『フィリップの冒険』が最も多く與かつて居るらしい。それはそれとし、聞き慣れたボヘミアの地名の代りに、チェコ又はチェコ・スロバキアと云ふのが通用し、妙な名として耳に響き、近來漸く妙に感じないと思へば、早くも變動が起り、新國家を建設して二十年記念を祝賀するかしないかに崩壊すること、歐洲に珍らしくない事にせよ、安定を缺くも餘りに甚だしいのを遺憾とせず置けぬ。

元はと云へば曾て大國で鳴らした奥國の縮小及び滅亡の餘波が収まらず、英佛の手加減で國際聯盟が糝粉細工した所が幾回も遣り直し、英佛も手の下しやうないのに因る。チェコ・スロバキアが國家を結成したのは、奥國に對してあり、英佛が奥を一小國にし、次いで獨に編入させては、チェコ等が獨立した意義を失はせ、將來如何にすべきかに惑はしむべきでないか。英佛で獨伊を威壓し、ギューの音も出さしめなければ格別、抜くぞ抜くぞの掛け聲や身振りのみでは、何となるか判らず、各々比較的安全で、確實で、有利な道を求めるの外ない。チェコ・スロバキアが創立者兼維持者たるマサリツクと運命を共にするも已むを得なからう。マサ

リツクは奥國に楯突くべき勢に生まれ、三たび新國家の大統領に選ばれ、一昨年八十八歳で歿し、與へられた使命を果し、始めあり、終りあり、近來の英豪と見えた。

マサリツクの高弟ベネシュは本年五十六歳、師に劣らぬ人物と論はれ、師が築き上げた特殊の國家をば、如何に新たな狀勢に適應せしむるか問題となり、そのベネシュが早くも失脚しては、國運の命脈が遠くないことを豫告して居つた。それにしてもボヘミアンで『今日は今日で澤山、明日は野でも山でも』としたのが偶然にも祟つた形ないとしない。(昭和一四・三・一八)

國勢の少壯老

論語に「少き時に血氣定まらず、之を戒むるは色に在り、壯に及んで血氣方に剛、之を戒むるは闘ふに在り、血氣既に衰ふ、之を戒むるは得るに在り」とは、國家社會にも當倣むべきであつて、その發達しない頃、色が問題になり、夏桀は末喜の色で亡び、殷紂は妲己の色で亡

び、ギリシヤのトロイ戦役はパリスが美女ヘレネを奪つたより始まると記載せられるのは、事實の疑はしにせよ、色が頗る重きを成し、少くとも世間でさう考へられたことを示す。年代を経るに従ひ、色で家を亡ぼす者こそあれ、國を亡ぼす者が無いのは、國家が既に成長を遂げたからであり、それから戰國時代が始まり、攻めつ攻められつする。

支那は早く戰國時代を過ぎて統一に歸し、時には三國となり、南北朝となり、唐初に魏徵が「中原還逐鹿、投筆事戎軒」と言つたけれど、列國競争とならず、中國が他の國家と對立し、大規模の戰國を出現するかに見えつゝ、久しきに續かず、延いて國争に備ふるよりも、上下均しく蓄財を念とするに傾く。多數は蓄財といふ程の蓄財ないとし、在上者及び之に次ぐ者は、蓄財を何よりと心掛け、それだけ國争に加はるを欲せず、已むを得なければ貧民を驅つて出陣せしめ、自ら戰場に出づるを避け、出づれば危くない所に於てす。彼等は身體が戰争に堪へないのでなく、國家的に老衰し、戰争に興味を覺えない。

匈奴王アツチラが羅馬皇帝の妹オノリアと帝國領土の半分とを求めたのは、色と慾との二途

に出たにしても、色氣あるは勿論、慾も消極的の貯蓄でなく、戰つて戦ひ抜くの國争心を以てした。百年戰役や、三十年戰役や、七年戰役や、利權の争ひながら、戰争のために戰争したと云へる。英國も、佛國も、その頃は國争心が熾んであつて、利害得失を考へつゝ、取越苦勞するよりも「何、やつつけろ」で進み、ナポレオン戰役に及んだ。そこで戰争の損得を慮つて平和主義を唱へ、更に漸く平和に慣れ、武勇談に花を咲かせなくなり、世界大戰に戰死一千萬を越え、戰費數千億圓に上り、それで何を得たかと自問自答し、半信半疑に悩み、勝つた方で殊に甚だしい。

窮して通ずるの諺に漏れず、負けた獨國、勝つて勝ち榮えない伊國は、國家を改造して立直つたが、兎も角も勝つて割前を多く得た英國や、佛國や、折角得た所を失つては大變とし、とかく近所に事勿れと祈り、それが事ありで困却し、精々で聲を大にし、極力軍備を擴張するぞ、ソ聯邦が出るぞ、米國が愈々出るぞと威嚇し、前に決定した所を次から次と變改され、ベソをかいて黙つてゐる。英國も、佛國も、一大革新を遂げない限り、血氣既に衰へ、之を戒む

るは得るに在り、即ち朝から晩まで二天作の五で夢中。(昭和一四・三・二〇)

二八六

偽善の疑ひ

「偽君子」の語は何時から出たか。明朝の楊慎が「眞小人は其の名美ならず、惡を肆にする」と限りあり、偽君子は既に美名を窃む、而して惡を流すこと窮りなし」と云つたが、その頃から廣く一般に運用したか。我國で歐米と接觸してから漢學が衰へ、「君子」の代りに「紳士」と云ひ、同時に「偽君子」の語が不用に歸し、これに代つて「偽善者」の語が出たこと、基督敎との關係あつて、その敎の弘まるに先んじ、「偽善者」の語が弘まつたのは、偽君子に代るべき適當の語が求められたのに因らう。「偽君子」は階級的の意義を含み、町人百姓に對して聊か仰山に聞え、「偽善者」には其の嫌ひがない。たゞ「偽善」の語があつて、「偽君」の語がないのは、本來文字の組立が違つてのこと。

そこで前に「偽君子」、今は「偽善者」と云ふとし、それも段階があり、世に傳へる所で原田甲斐や、大槻藏人や、その標本と見えるが、近來「愛國何々」、「何々報國」とて、愛國又は報國を附け加へることが行はれ、それで多少の利益を得るのは、當然の行爲か、偽善の嫌ひがないか、疑問たるを免れない。愛國又は報國の名に於て一人一家の利益を得ること、一人一家の利益となるだけ、愛國又は報國の看板に偽りがあり、偽善の範圍に入ると云はれ、然りとすべきか、然らずとすべきか。

「奉公」とは昔から言ひ來り、近頃「奉公滅私」ともいひ、文字通りに身を公に捧げるを意味するけれど、奉公が祿を戴くことに解せられ、「祿を喰む者は君の爲に死す」とて、祿と勤勞とを交換的にし、果ては「奉公人」と稱し、下男下女の別名となつた。これと云ふのも奉公に私利を伴ひ、名と實との齟齬する所があり、さう云へば「愛國何々」といひ、「何々報國」といひ、それで幾らか懷を温めるのは、前に偽君子、後に偽善者と呼ぶ所でないかとの疑ひの出るを禁ずるを得ない次第であつて、そこは神でもなく、佛でもなく、人間として仕方がない所

二八七

と解釋し、餘り深入りせぬが花、花は遠目に見るものとするか。

二八八

總じて七分三分の兼合ひ、絶世の美人でも脱糞の場合に美人たるを失へば、尤もらしい言ひ分も根掘り葉掘りすべきでなく、大抵にして聞き置かねばならぬとし、その大抵がなか／＼むづかしく、少し位の偽善を問はず、眞善と同様に取扱へば、圖々しい偽善が大びらに飛び出し、始末に卒へないやうにならぬでない。當人は必ずしも偽善の意でなく、眞善の意に於てしても、往々盗人猛々しいともせられる。政府の金を有利に使へさへせば宜いやうなもの、そこに偽善の行はれる餘地があり、氣を附ければ油断も隙もあつた者でなく、成るべく大目に見て置くとして、立派さうな口を利き、どうやら怪しいのがあり、先づ御用心。(昭和一四・三・二二)

英國と佛國

英國は一世紀前に米洲植民地十三州を失ふの大失敗を演じた。その後には瀛洲へ植民し、他に

も力を伸ばし、現に世界陸土の約四分一を占め、押しも押されもせぬ大國ながら、前に失つた十三州が現に四十八州となり、富に於て舊母國を凌駕するを考へれば、眞に取返し附かぬ大失敗を演じたものとせざるに置けず、一たび大失敗したものが再び大失敗しないと誰が保證するか。奇なるは前に大失敗した際、國民がさぞかし残念がつたらうと思はれるに、さにあらず、一部でこそ悔恨したれ、民權黨は一般に満足を表し、ノーフォーク州の大地主なる同黨員コークの如きは、毎日晚餐に祝杯を擧げた。

大失敗後に刻苦經營し、謂ゆる之を東隅に失ひ、之を桑榆に收めた所、さすがにジョン・ブルとすべきも、何時如何にして前の大失敗に劣らぬ大失敗を演ずるに至らないか、測り知れないと承知するを要する。佛米ソと結んで日本の勢力を東亞より驅逐しようとするは、失敗して損失となるは勿論、物の見事に成功して却て大なる損失とならないか。日支兩國の共存共榮から印度獨立の機運の捲き起る恐れがあるとし、ソ聯邦が勢力を東西に張るの曉、英國の帝室がロマノフの二の舞を演じなくても、餘り芽出度からぬ結果を招き、少くとも尊敬を減すべき

二八九

は、避くべからざる順序と氣遣はれぬでない。

往年佛國が英と争ひ、米洲植民地の獨立を認め、これに援軍を送つたが、自由の急氣の燃え上る處、佛國に飛火して革命運動が勃發し、皇帝皇后が死刑を宣告され、貴人や、貴女や、有司百官や、そんな筈がないと言つて聽かれればこそ、津浪の押し寄せるも同然になつた。後に共和政治となつて、偶々露國と同盟し、首都の中央に露帝アレキサンドル三世の名で橋を架し、次にニコラス二世の代に露國で佛國革命以上の革命が起り、社會主義を生盪いとして共產主義を行ひ、名もソヴェート聯邦とし、それに接近すれば接近するほど、從來の勤儉より頹廢氣分に移り、新興獨逸と競争し得るやが疑はしい。

前の世界大戰には、日本と伊國とが聯合國側に加はり、それが戰役の結果に影響したこと少いとしない。若し第二回の大戦が近く起ると假定せば、他の事情を同一視し、第一回の聯合國より日伊兩國を除き、それが反對に立つを察せねばならぬ。第一回到日伊が加はつてさへ、英佛露が彼の如く苦戦を續けたれば、更に日伊を敵に廻はし、如何に勝算を夢みるか。日伊の軍

備は前回の比でなく、それが獨軍と共に活躍するに於て、英と佛とが根柢より國家を危くすると推斷すること、決して一方に偏するの見解でない。英と佛とは重大な危機として衷心より思熟慮すべきでないか。(昭和一四・三・二四)

名譽教授

テイネンとは停年か、定年か、偶然に同音異義の語が適用するが、最初に範を示した軍隊に準じ、こゝに停年として置く。軍隊では體力のみでなく、智力を重んじ、時として智力を何よりとするけれど、戰場に砲煙彈雨を冒すの前提で、體力あつての物種とて、現役、豫備、後備に分ち、それも戦線で突撃するは、元氣第一、所帯心の附かぬに越したことなく、丁年から遠くないのを求め、遠くなりかゝるのを停年で省く。後陣で采配を揮るは元氣よりも思慮が肝要、總司令部で計畫するは、孔明の如く羽扇を手にし、四輪車に乗つたとて、勤まらぬでな

く、そこで階級が上るほど停年が後れ、元帥に至つて停年がないことになる。老耄の恐れあるは元帥になれぬとして。

何でも年齢が争はれず、日下開山も四十迄ながら、體力を問はないのは割合に長く續き、安田の老人が「五十六は洩垂れ小僧」と言つたのは、満更のでたらめでなく、彼の老人は八十を越して普通の五十六より確かであつたらう。ランケは八十を越し、盲目で世界史に着手し、十字軍に達した。さういふ事も有るには有るが、大多数は歳に勝つことが出来ず、世間の悠長な時代は兎も角、進歩の速度を加へ、變化の急劇を告げては、新陳代謝の宜しきを得るを要し、一般に停年制を設くるを以て必然の順序とせずには置けぬ。

所で司法官に停年があつて、特に名譽判事、名譽検事と云ふやうな事なく、他は尙更であるのに、大學又は専門學校で停年の教授を名譽教授と稱するのは外國の例に依つたとし、外國で何としてさういふ例が出来たか。原語のプロフェッサー・エメリツスは教授職を卒へたと云ふを意味し、一定の年限を無事に勤めたこと、それだけの功勞あることになるも、それは普通の

官吏が恩給を貰ふまで勤続したと同様であつて、特に名譽とすべきかどうかは疑はしい。恩給を貰ふ官吏を悉く名譽官吏と呼んでは、名譽が餘りに多くて、名譽たるを失ふ。

エメリツスを名譽と譯したのは、名譽の安賣りになり、「明君の制、賞は重きに從ひ、罰は輕きに從ふ」との意を得たとし、單に名譽教授と稱せず、一々母校の名を冠した以上、母校の名譽に關するが如き事件の起つた場合、空吹く風と眺めず、進んで多少盡力する所あつてはどうか。近頃心理學者が教科書について運動したが、他に種々の問題が起り、帝國憲法を始め、前任者の解釋と相ひ容れない事があり、名譽教授たる者は肩書の名譽に對しても吾れ關せず焉とすべきでなからう。母校の異變に痛痒を感じず、名譽教授の肩書で平然たる所に停年の必要を認むべしと言はるれば、それもさうかと改めて考へ直さねばならぬ。(昭和一四・三・二六)

勇氣と堅忍不拔

TochIとはタルボット・ハウスの電信略語であつて、世界大戦中、一九一五年英國ウインチエスター僧正の息タルボットの戦死記念に設置され、兵士宿泊所となり、青年團カヴエンデツシュ俱樂部を併せ、次第に擴張し、婦人扶助聯合會も設けられ、三年毎に祭典あり、世界各地より會員が集まるが、本月四日夜、保護者なる皇后の親臨で燈明の式が舉行された。デヴォンシャイヤ公未亡人が總長として、マクファイ嬢が建設指導者として、皇后を迎へ奉り、皇后が着席あるや、會衆（大部分は婦人）が喝采し、次いで國民頌歌を誦ひ、それから式があり、小童ピーター・ウエルシュが花束を皇后に捧げ、マクファイ嬢が皇后の來臨に御挨拶を申上げた。

皇后はマイクの前に立たれ、聯合會の進行を續けるを悦ばれ、左の如く言はれた。「今や國民全體として困難な時機に臨む。吾は他を助けるに忙しい人々が—それは多い—その人々が今

日最も必要なる所に應じ、建設的業務の一部を擔任するの事實に打たれた—外でもなく、勇氣と堅忍不拔（ステツデインネス・オヴ・バーボース、直譯では志望の堅固）ぞよ。婦人扶助聯合會員は他人に對する奉仕を以て勇ましく且つ有用な生活を送るを示すの機會に接する。」それから皇后を始め、點燈の式を行ひ、靜肅の間に皇后がローレンス・ピンヨンの詩句「我等が老いて遺されるが如く彼等は老いなからう」といふを誦し、一分間の沈黙後、「汝の光を人の前に輝かし、彼等をして汝の善い仕事を見せしめよ」と言はれた。

儀式が何とあらうとも、英國の皇后が時局の困難を説かれ、「勇氣と堅忍不拔」とを高調されたのは、多少の注意を拂はずに置けぬ。皇后は名もエリザベス、エリザベスの名は珍らしくなけれど、英國の皇后として往昔エリザベス女王が國威を輝かしたのを追憶するを禁ずるを得なからう。場所も場所ながら、他の事を言はず、「勇氣と堅忍不拔」とに力を込められた所、さすがとする。

女さかしくして牛を賣り損ふ、國民政府の宋美齡の如きジャ／＼馬も困り物なれど、大國に

君臨する女性は其れ相應の心掛けなくてはならぬ。總べて比較的の事として、アングロサクソンの長所は割合に「勇氣と堅忍不拔」とにあり、それが減じては國運を維持するに堪へない。前に佛人が勇氣で英人に優り、鈍重で之に劣ると云はれたが、その勇氣が覺束なくなつては、英國に追隨するも已むを得まい。今は英人が獨逸人と較べ、孰れが「勇氣と堅忍不拔」とに於て優るか問題に屬し、將來の浮沈は全くこれで分れるとせねばならぬ。然し問題は餘所ごとでなく、我が日本人は「勇氣と堅忍不拔」とに於て何の状態であるかを慮るを要する。

(昭和一四・三・二八)

領土の變遷

「四時の序、功を成す者は去り、未だ成さざる者は來る」とは、單に常識よりせる觀察であつて、何等研究の跡なく、普通の現象を普通に言ふに止まり、それだけ例外を除いて自然の順序

と認めずに置けぬ。國家社會では個人と違ひ、生老病死が判明せず、永遠の發達を考へ得るにせよ、多くの場合に「盛者必衰」を免れず、ローマ帝國は彼の如く興り、彼の如く亡び、彼の帝國に次ぐ者も幾らか運命を同くすると見え、又は察せられぬでない。國家は個人よりも生命が長いやうで、チエコ・スロヴァキアの如き、四半世紀も續かず、鳴物入りの國際聯盟が何をしてゐるか、トボケ者の多いのも程があると思はれる。

小さな事は言はず、コロムプスの發見で舞臺が世界的になつたのは我が足利十一代將軍の時のこと、足利が十五代で亡び、それから徳川が十五代續き、十六代たるべき人が現に生存し、通じて餘り長くもないのに、世界の領土は幾回も變遷し、初め新機運に乗じて我國に來たのがポルトガル、それからスペイン、スペインの盛んな頃、世界で最も廣大な領土を占め、メキシコを新スペインと稱し、我が支倉常長は隨行六十八人と新スペインを経、スペインの首都マドリツドに着き、國王フィリップ三世に謁し、ローマに到り、法皇パウル五世に謁した。

所が當時のスペインは世界に領土を占めて居るやうで、實はフィリップ三世の父なる二世の

代に必勝艦隊を英國へ派遣して失敗し、衰へかゝつた國運が支へ切れず、内政外政兩つながら宜しきを失ひ、支倉が使命を果し得なかつたのも之に因る。そこでスペインから獨立した蘭國が勢を得、制海權と共に商業線を張り、先づ東印度會社を起し、次いで西印度會社を起し、東西に力を伸し、鎖國の日本とも一手販賣したが、それも一時の事、次に佛國が領土に手を擴め、航海及び植民を以て世界に冠絶し、日本で津輕海峽と呼ぶ前、列國の海圖で佛人ラ・ペルーズ伯の名に於て之をラ・ペルーズ海峽と記した。

然し佛國の廣大な植民地も次第に縮小し、これに代つて現れ出たのが英國であり、今や世界の全陸土を四分して其の一を占めるの勢を示す。佛國が現に領有するは、新たに阿弗利加で得た所が多く、サハラ沙漠の如きがあり、前に蘭國に代つて領有した土地の大部分を擧げ、英國の領有に歸し、英帝國の領土に太陽が没しないと、朝の大鼓が夕まで續くと、彼れ自ら誇り、他から賞められたりするが、これは二世紀來のこと、それで何時まで維持するか、やがて年貢の納め時が来るでないか。今や歐洲の中央に獨國と伊國とが頻りに爪を磨きつゝあり、そ

の經過は將來の問題に屬するとし、領土の分配は早晚列國の實力に比例する。

(昭和一四・三・三〇)

最後の天保男

天保は十五年が弘化と改元し、その十四年に生れたのが田中伯であり、それが九十七歳とあつては、世間に知られた天保男が全く無くなつたことになる。自分の父は文政生れ、母は天保生れ、伯叔父母は文政又は天保生れ、自分の成長する頃は天保生れが多く、明治年間の前半を天保生れの全盛期、その後半を衰頹期と稱して差支ない。全盛より衰頹に移る過渡期は、譽められもし、誹られもし、天保錢として百文に二十文足らずと言はれもした。天保年間それ自ら大御所時代の末期に屬し、正に歡樂極まつて哀情多く、過去に戀々たる者が衰亡の道を辿り、將來に活きる者が乾坤一擲の快擧に加はらうとする所。

眼が見えてか、勢に驅られてか、七百年の封建制度を打破し、維新の政治に参加した人々は、賢愚勇怯のさまじくながら、特殊時期の氣分を帯び、即ち破壊と建設との中間に居り、或る程度まで有閑武士の頹廢的習俗に染み、染まなくても當然とし、或る程度まで内地の弊害を憤慨し、外國の文明を羨望し、能ふ限りに改革を行はうとし、『酔うては眠る窈窕美人の膝、醒めては握る堂々天下の權』と誇ひ、それを人生最上の事と心得た。これは『男が良うて金持で、それで女が惚れるなら』とか、『君と寝ようか、五萬石貰ふか』とか、廓全盛時代の遺習であつて、天保男が二三十歳頃に有頂天になつたのも怪むに足らない。

明治の初め、三條公が芳原に通はれた。大隈侯が伊藤公井上侯等と梁山泊生活を送つた時、孰れ劣らぬ豪遊振りを發揮したが、大隈が『どうだ、かう遊ぶものゝ、政府の要職に居つては、外國人の聞えも宜くない、もう罷めようでないか』と言ひ、他の二人も承知した。二人は一年ばかりして復た遊び出し、大隈はそれから遊ばず、西洋流の紳士を氣取つた。遊びも變遷し、遊廓から待合に移り、或は一年毎に妾を更迭し、中には随分亂暴なのがあり、黒田伯は亂

暴で聞えただけれど、年齢のせりもあり、時代の推移もあり、天保男が前ほど噂の種を播かなくなつた。

大隈は天保男で最も早く行狀の改善に心掛け、さすがに早稻田大學を創立したゞけの事がある。田中は最後まで天保男で通すし、それを得意にしたらしく、恩顧を被つた者の外、たゞ徒らに長命した人とは思はない。天保男に善い事もあり、悪い事もあり、高等長脂差の趣ある所は面白いとし、中學生や高等女學生が聞いて呆れるやうな話を遣すは、前世界の動物、恐龍、禽龍、雷龍、梁龍、劍龍、三觶龍等の繪畫と同然、聊か氣味悪く感ぜしめぬでない。大隈は出來ぬにしても、最後まで進善を念とし、後の教訓とするに足る。田中の我を張り通したのは宜く、何等進善の跡の見えなかつたのは、最後の天保男として惜しい。(昭和一四・四・二)

前皇帝と現總統

三〇二

近頃廢帝が珍らしくない中、カイザー髭で世界を風靡したカイザー・ヴィルヘルム二世が、本年蘭國ドルンに第八十一回誕生日を迎へ、世が世ならば髭を左に捻つて東列國を心配させ、髭を右に捻つて西列國を煩悶さすべきに、何處にどうしてゐるやら、問ふものも有るか無しかの状態、それと反對に當年の上等兵、今の獨國總統ハイル・ヒットラーが飛ぶ鳥を墜すは易いこと、巢窟の鳥獸をも心服させる勢とは、變れば變る世の中、彼のカイザーが聞いて如何の感がある。復辟の困難は國內よりも國外の事情に因るとし、舊埃國の一平民が獨逸民族の中核となり、世界の風雲を捲き起すと見えること、前に誰が考へたか。

前カイザーは初め吉、後に凶も最も甚だしく、若し世界大戰の勃發して間もなく崩御したならば、カイザーが存命したならばと言はれたらうに、戦役が続けば續くほど、思つたよりも無

能と云ふことが知れ渡つた。無能とは不器用を意味せず、前カイザーは誠に器用な生れ、何でも出来ぬことがなく、英國皇室の關係でアドミレーブル・クライトンの再生と稱せられたけれど、そのクライトンが萬能餘りあつて一心足らなかつた如く、前カイザーも徒らに忙しく立廻り、何にでも口出しつゝ、肝要な點を忘れ、忘れなくても埒が明かず、外國の元首を手玉に取るやうで、結局は孤立に陥り、大本營を汽車に置き、あちらに飛び、こちらに飛び、たゞ徒らに奔走するだけ。

彼は内に帝國建設の元勳ビスマルクを捨て、外に日本へ露獨佛三國の干涉を加へた。一寸偉らさうで、そのみでも大局に通じないことが判かる。日本は陸軍の關係で獨國と親密な筈なのに、彼は元勳に熱湯を飲ました如く、日本に熱湯を飲まし、これをして英國と同盟し、露國と戦ひ、世界大戰に至らしめた。彼は日本の如き、どうでも宜いとしたが、それが誤りであつて、その點で英國政府が確かに優つた。今のヒットラーは餘計な知識を振廻はすこそ前カイザーに及ばなけれ、國家及び世界の實情に通ずるに於て遠く之を凌ぐ。

三〇三

日本に味方する者が勝つとは、日本人の勝手な見解とすべきでなく、これを勝手な見解としては、早晚敗れるを免れない。前カイザーが日清戦役後、基督教國の聯合して黃禍を防止するやうにと諷刺畫を發表したのは、オツチヨコチヨイの標本たるを示し、そこに將來の没落を豫告して居るとして誤ることがない。彼は利口で邦家を覆へし、果然三代目で賣家の札を出した。賣家を預つたのがヒンデンブルグ、それを買つて建直したのがヒットラー、今や西に伊國のムツツリニ、スペインのフランコと結び、東に日出づる日本と相ひ呼應し、國際關係を改造し、若干國の横暴を禦がうと企つ。(昭和一四・四・三)

勉強、遊樂、睡眠

幾らか文化の進んだ土地では、三度の食が普通と考へられる如く、八時間勉強、八時間遊樂、八時間睡眠が適當と認められ、若し前に氣附かなかつたならば、人から聞いて成る程と感

ずるのが多からう。が寄宿舎の類を除き、三度の食さへ時間も分量もまち／＼、中に二度とするのがあり、四五度とするのがあり、八時間制に至り、判然一晝夜を三分するは、恐らく世界に一人もなく、先づ其の心得に於てすると云ふ位に止まると思はれる。これは何としても充分に實行することが出來ず、大體の目安とするのみで、これを几帳面に勵行する場合、何處でも違反者が多く、始末に困つてしまふ。

と云ふのは人毎に體質が違ひ、肥えたもの、瘠せたもの、運動好き、運動嫌ひ、等々で一樣に取扱ひ難いのに因るが、均しく勉強と云つたとて、僅かの時間で能率の擧がるのがあり、長い時間で役に立たぬのがあり、機嫌變へで働いたり、働かなかつたりするのがあり、幾通りにも區別せずには置けぬ。遊樂も一食に半時間から一時間、それに各自の嗜好で、運動、漫談、碁將棋、晝寝等となるが、讀書の如きは勉強に屬するのもあり、遊樂に屬するのもあり、或る人は讀書して知識を増し、これを實生活に適用し、或る人は喫煙の代りに讀書し、頻りに讀んで何が何やら、空々寂々、少しの得る所がない。

所で時間が金となり、金が物を言ふ世間で、八時間勉強するよりも、十時間勉強する方が金高多く、十二時間勉強すれば愈々多いとあつては、體力の續く限り、勉強して多く金を得ようとするに傾き、食事時間を加へて十五時間働き、遊樂時間を一時間にするのが少いと云へない。一週一日の安息日に遊べば、休養に差支ないやうなもの、その一日をも金にしようとは、それ程までに金の力が強い。それで身體に故障がなければ、勉強家として賞むべきも、若し疲勞して早く衰弱するやうでは、金の犠牲となり、ミイラ取りがミイラとならう。

近頃職工で大臣以上の収入あるのが珍らしくないと云ふが、大臣も収入で相場附けられては、苦笑を禁ずるを得ない。ユダヤ人にでも使はれて居るか、下らぬ事を言ひ出したもの、諸葛孔明は死に臨んで御上から一金も貰ふまいと遺言した。眞の御奉公は斯くなくてならぬ。筋肉労働者も向上心ある間、金の上に精根を消耗すべきでなく、天下國家を念としては、尙更懷中を考ふべきでない。勉強する者は遊樂を廢してならず、勉強と遊樂とを交互的にすべきが、普通に勉強と思ふを遊樂と感ずるは、効果多い性分と稱するに足る。いや／＼働くのでなく、

働きたくて働くのを結構とし、睡眠時間は八時間より少しも減じないやうにありたい。

(昭和一四・四・五)

後鳥羽天皇

本年は後鳥羽天皇が隱岐の島に崩御ありて七百年に相當し、一天萬乗の躬で十九年も島に住はせられ、「我こそは新島守上隱岐の海の、あらし浪風心して吹け」とよませられたのを追憶し、國史中の最大痛恨事とせず置きぬが、佛教の三世因縁でなく、普通の事を普通に見、因縁話の争はれぬ者あるを考へるを禁ずるを得ない。何として彼の如き次第になつたか、原因を尋ねれば際限がなく、あれも悪い、これも悪いとなるとし、差し當つて崇徳上皇を讃岐に流し、上皇が五部大乗經を血書して安樂壽院に納めようとせられたのをば、朝廷で拒絶せられた殘忍な處置に遺憾を感じねばならぬ。上皇は大に怒り、「大魔王となつて天下を亂さう」と言

はれ、髪も爪も延びるが儘、この世から魔道に陥らうとされた。

世間にて保元の亂に滅亡した人々が大天狗小天狗となつて天下を亂すと取り沙汰したとは、尤もの譯であつて、繪本の天狗のやうな者こそ出なければ、次から次と騒ぎが起り、それも次第に大きくならうとする。保元の亂に齎殿の下なる京都で上皇を流罪にし、罪障消滅の寫經を返却するの例を開いては、承久の亂に東夷の酋長、武士の頭領、主家の源氏を滅ぼして平然たる北條氏が、廢立を行ひ、三上皇を島に遷し奉つたのも、順序として怪しむべきを覚えぬ所であつたらう。

そこで保元の亂は誰の罪か。關白や、太政大臣や、責に任ずとせば、彼等は萬死するも罪を償ひ得ない程の無能振りなれど、公務と私事との區別なく、國家が如何なるものか、進歩するか、退歩するか、全く考へず、幅利きの女に説かれ、笑つたり、泣いたり、怒つたりする位のもの、戀歌を作るの意で政治に臨み、治亂興廢の如き物々しい事は麻呂はいやぢや〜と言ひ、實に話にならぬのであつて、これは一朝一夕の事ではなく、幾代も前より弊害が積み累り、

誰が何をしたと云ふよりは、醉生夢死の時代に習慣づけられ、禮を知らぬ武士が怒鳴り立てる時、他から武士を呼び來つて、これに當らしめる外ない。

承久の亂は天地晦冥と形容すべき所ながら、百二十年後、高時に殉死する者八百七十餘人、鎌倉に自殺する者六千餘人とあり、一族郎黨が滅び、一應結末を告げたとし、眞に結末を告げたのでなく、南北兩朝の對立といふ更に一層忌はしい事變を生じ、それが漸く歸一して、武力争奪の時代に移り、一轉して群雄割據となり、勇を勵み、智を磨き、遂に匹夫より起り、位人臣を窮め、海外に兵を派遣するあり、こゝで漸く公卿政治の弊害が跡を絶つたと云へる。王朝時代の官僚が今少しく職責を果たしたならば、保元の亂がなく、固より承久の亂はあるべくもなく、考へて見れば彼等の罪は大きい。(昭和一四・四・七)

癖の良い悪い

書經に伊尹が「習ひ性と成る」と言つたとあり、世界に最も古い諺の一に居らう。西洋で「習慣は第二の天性」と言ひ出したのは何時よりの事か、これも可なりに古いとし、その諺を引用する者あるや、ウエルリントン公は「第二の天性とな、何、習慣は天性に十倍する」と言つた。この「習慣」は英語「ハビット」であり、「習ひ」とか、「慣れ」とか、「癖」とか云ふに適し、單に「習慣」では風俗習慣と混同し、聊か意義を異にする恐れあるので、先づ豫め斷はつて置く。「習ひ」、「慣れ」、「癖」も互に違ふと云へば云ふべく、實に違ふにせよ、その中間ぐらゐに心得て置けば、當らなくても遠くはない。普通の談話では「習ひ」と云はず、「慣れ」又は「癖」と云ふ。

母が小兒を携へ、「何時から此の子に教へませうか」と問ふや、醫者で詩人なるオリヴァ・ウ

エンデル・ホルムスは「祖母から始めねばならぬ」と答へた。癖は生れながらに受け、慣れは生れてからとし、子の癖が父母の慣れよりする所があり、自身の慣れで愈々助長する所があり、何處まで癖で、何處から慣れか、これを明かにするはむづかしい。ウエルリントンはナポレオンに勝つて評判になつたものゝ、これはブリユヘルと呼應し、疲弊した敵を破つたもの、餘り稱するに足らないが、「習慣は天性に十倍する」と言つた程あつて、常に注意深く、心身を鍛錬するに心掛け、榮達した後も軍用寢臺に寝たくらゐ、それでナポレオンと同年に生れ、三十一年も生き延びた。

無くて七癖、有つて四十八癖と云ひ、良い癖は固より結構、良くななくても、悪いと云ふ程でないのは其の儘とし、悪い癖に段階が多く、殺人、傷害、放火、姦淫や、強盜、窃盜、詐欺、横領や、常識を備へた者に於て、自ら敢てしないは勿論、他から勧められても應じないが、旅館で夜中に亂酔放歌し、隣室の客の安眠を妨げるとか、汽車で大の男が荷物を横にしてあぐらかき、女子供を見て見ぬ振りするとか、罪惡とこそならなければ、今一步我儘が募れば由々しい

罪作りとなりさうなのがある。

三二二

近來著るしく減じたのは酒の亂暴飲みであつて、前には軍人が必ず酒を飲むもの、飲まねばならぬものと考へられたが、今は飲まぬと明言して不思議がられず、學生や勞働者で往來を酔拂つて歩くのも甚だ少くなつた。酒よりも煙草が罷められぬとは前から言はれ、今も忙しい中でマツチを擦つて喫煙するのが何處でも見るが、他人から見て氣の毒に感ぜられぬでない。自身はそこに妙味があるとしても、さういふ癖のない人は、やたらに口を歪めたり、足を貧乏揺りしたりすると同様の癖と思ふ。人毎に一つの癖どころか、幾つも癖があり、良い癖を助長するのが望ましいと同時に、良からぬ癖を根絶やしするやうに有りたい。(昭和一四・四・九)

英佛兩國の元首

外交上のお世辭は當り前、空お世辭も已むを得ないとなつて居るものゝ、先月二十一日佛國

大統領ルブラン及び夫人が英國を訪問し、皇帝及び皇后に歡待され、兩元首の交換した挨拶は、時が時であつて、普通の禮式を通り越し、幾らか兩國の眞情を吐露した所がある。大饗宴の後、皇帝が大統領の健康を祝し、「佛英兩國の祝賀が屢々正式に行はれたけれど、今日の如く眞意よりし、且つ著しいのがなかつた」と云ひ、「我々兩國は幾世紀間光榮ある歴史を顧みることが出来る——義勇の功績のみでなく、學術技藝の方面に於ても」と云ひ、「孰れも自治で人民に貴重なる自由及び正義を擁護した」と云はれた。

更に語を繼ぎ、「三十五年來、卿の國と我が國と地理上に隣國たると同様、天道が密接の友交關係を結ばしむるを發見した」と云ひ、兩國が利害を共にするを説き、「兩國の政府が互に援助し、世界の當面する問題を解決するに全力を注ぐのみならず、列國關係を正しく支配すべき原理を破壊するが如きに對し、一切與みしない」と云ひ、最後に「我等は充分に眼前の困難を知るも、我は信する、我等は我等の國民を卓越せしめ、危機に臨んで必ず發揚した我等の力及び不滅の心神を意識し、將來に信念と希望とを抱いて進む」と云はれた。

三二三

それに對して大統領は先づ「如何なる同情の表明も陛下の歡待の御言葉より貴重なのがな
し」と云ひ、昨年七月皇帝の佛都行幸に言ひ及び、兩都に於ける歡迎の調諧は兩帝國の交友を
象徴するとし、「兩帝國は世界の多くの地に隣接し、道徳的に境界が錯交する」と云ひ、「民衆
の良心に根づき、兩國の交友は今日に於て彼等の存在の自然且つ必然の事情となつてゐる」と
云ひ、條約を重んずるに於て同じく、他國の内政に不干渉なるに於て同じく、平和を愛するに
於て同じとし、一轉して「彼等は國家の安全を確め、一般平和に新協同を齎らすため、政府に
一層強い軍備を要求する」と云ひ、「新しく英佛兩國の政治家は現に進行する惱みの時期に打
ち克つやう世界を助ける」と結んだ。

兩元首が何を意味するかは、その明言する所で知るを得、言外で察することも出来る。「兩
帝國は世界の多くの地に隣接し、道徳的に境界を錯交する」とは、曾て互に競争し、佛が英の
米洲植民地十三州の獨立を助けた所以であつて、それが今や互に相ひ援助し、現状を維持する
に汲々たること、双方共に危険を感じたのに外ならない。幾丈といふ大きな蛇も頭を碎かれて

は、萬事休してしまふ。今や英本國、佛本國、更に狭くしてロンドン、パリが、空中から爆
撃される危険に曝されてゐる。世界の平和をお題目にするは、苦し紛れの悲鳴でないと、誰が
辯護してくれるか。(昭和一四・四・一一)

米國の前途

何處でも國情は複雑であつて、簡単に取扱ふべきでなけれど、普通に米國と稱する北米合衆
國の如く複雑なのがない。聖人のやうな善い人も居れば、酒頭童子に輪を掛けたやうな強惡非
道なものも居り、輿論の力が有るには有り、輿論政治の實を見つゝ、時として健全な分子が輿
論を制し、時として不健全な分子が勝利を占め、如何に方針が決するかは豫め知るを得ない。
何分にも現代持つ國の第一位に立ちながら、建國以來僅に一世紀半、基礎が固まつたやうで固
まらず、特別の事變が起らなければ、その儘に過ぎて行き、一旦事變が起ると共に、目が廻る

やうな局面が展開することもあらう。

人で云へば米國は別天地に育ち、國家としての苦勞が足らず、獨り天下で極度に獨り好がりする趣がある。ワシントンが大統領となつた頃、艱難辛苦で漸く獨立し、深く前途を憂慮し、他國へ力を出さぬやうにと戒めたが、歐洲の多事で國運が發展し、領土が幾倍し、モンロー主義で西半球に主人顔し、遂にそれで満足せず、東半球に力を伸ばさうとし、世界大戰に大西洋を越えて出兵し、さしもの戦局を決定したと云ふので、全世界の覇權を握つたかに高上りし、何にでも口出しせず居れず、金力に次ぐに兵力を以てすべしと怒號し、他から見れば長者のスポイルト・チャイルドが成長し、我儘勝手に振舞ひ、齒の浮くやうに思はれるも、何とも致し方がない。

彼は南北戰役で百萬の戦死者を出し、後にスペインと戦ひ、歐洲に出兵し、實戰の經驗があると信するが、南北戰役さへモルトケが注意の價値なしと言ひ、その後の戰爭は演習と大差なく、眞に運命を賭するの實戰に至つて何となるか、知れたものでない。彼は兵器に、軍艦に、

飛行機に、有らゆる工夫を遣らし、世界第一と信するも、そこが大きなボンチたる所であつて、それで必勝を期し得るか、とんだ目に遭はぬか、篤と思案すべき所。

英國は植民地十三州を失つた大失敗の經驗があり、随分用心深くなつた。佛國は大小の失敗多く、臆病な程に用心深い。米國は建國當初英本國とこそ戦つたれ、今の國民の大部分は當時の末孫たるよりも、金を求めて來住したのであつて、アングロサクソン國の名ありながら、純粹のアングロサクソンより獨逸人が多く、加ふるに人口の一割が黑人、苦戰に陥つた場合に尙ほ統一を保ち得るやが疑はしい。米國は嘗て南北に分れた事があり、今後歐洲又は東亞に戦ひ、勝利を得ない場合、折角の金を棒に振り、内亂が起つて止め度なくならぬと附言すべきかどうか。近來とかくお調子ものが居り、力の及ばぬ處に力を出さうとするが、その擧句の果てに目玉の飛び出ることにならう。(昭和一四・四・一三)

道樂の職業化

「藝は身を助く」とは、封建時代に祿で暮らし、定めの日々に定め席に坐れば事が済み、結構な身分と農工商に羨まれ、それが何かの事件で祿を取上げられ、生計に苦む場合、道樂に覺えた藝、読み書き算盤、乃至劍道、弓道、花、謡曲等で口過ぎするを指すのであつて、何もしいのを上品、働くのを下品とする世間の標準から言ひ出されたことゝ考へられる。藝と云つても殿様藝、何程のものでなければ、無いよりもまし、細々と暮らし、又の日を待つことが出来た。時として文武を奨励すれば、「世の中に蚊ほどうるさきものはなし、ブンブというて夜も寝られず」と云ふのが痛快と評判になる程、世が頹廢した。

それは武士階級のこと、その上級は幼少の頃から「ちやんとお膝に手をついて」と教へられ、汗水垂らして働くを差止められたが、下々では何でも稼がねばならず、「稼ぐに追付く貧

乏なし」とて、稼ぐを何よりとし、世間で遊びとする所も、それで儲けを得るならば、それに越したことなく、遊びといふ遊びが悉く職業化するに傾いた。後にこそ廢娯運動が起つたれ、京都の白拍子靜や、大磯の遊女虎や、押しも押されもせぬ歴史的人物となり、後にも事實は兎も角、奥州仙臺陸奥守と高尾とが津々浦々まで噂され、明治の初めに全國の學生が「今紫の舞、盛紫の歌」を謡つた。それ程まで遊廓の遊びが職業化し、大鼓持とか、箱屋とかいふ職業も出來上つた。

道樂が職業化するは、世間に興味が湧き、遊び半分にするよりも、全力を注ぐ方が有利となるからであつて、同一の能力では勉強するほど發達し、特に秀でたのは勉強して愈々發達し、それだけ一方に偏し、他に損するを免れない。他に損して悔いない位でなくては、相撲で日下開山となる譯にゆかず、日下開山となるには、そのみを以て世に立たねばならぬ。拳闘、野球、蹴球等が職業となつたのも、見物人が多く集まるよりし、籠球の如きは、如何に巧みにするとして、職業として成り立つまい。

英國で紳士氣分を重んじ、眞に重んじなくても、重んずるかに意識するを欲し、スポーツを道樂とする者にミスターをつけ、これを職業とする者を呼び捨てにするが、米國ではそれ程に區別せず、英米聯合で開催する際、待遇に關して議論の起るを常とする。これは昔氣質の遺つた所と、成上り根性の盛んな所とを以てし、興味が甚だしく湧き、その比例で利益を伴ふ時、職業とする者が道樂とする者に勝ち、これをアレナより驅逐するを得ない。我が日本で相撲が職業となり、道樂とする者は何としても職業とする者に勝つことが出来ない。碁將棋でも名人となるには、道樂氣分に於てせず、全力を注がずに置けず、藝が藝でなく、生命となる。(昭和一四・四・一五)

第二の世界大戰

世間で第二の世界大戰を噂し、英佛米蘇が聯合すること前と同然、結果も同然になるかに考

へるがあるが、假りに再び大戰が勃發するとし、前と頗る經過を異にするを豫定せずに置けぬ。世界に不思議な輿論があり、前に獨逸に對して反感が高まり、大國も小國も相ひ率ゐて其の反對に立ち、これに徹底的打撃を與へるを痛快とし、反獨諸國を一括して國際聯盟を組織し、永遠の平和の保障せられるを祝賀したが、先づ國際聯盟に不平が起り、一國が去り、二國が去り、聯盟が有名無實になるに伴ひ、反獨熱が減じ、獨逸が何處まで力を伸ばすか、興味を以て見ようとする傾向を禦ぐを得ない。

對獨反感に種々の事情ある中、カイザーに對する反感が幾らか與かつてゐた。カイザー髭で評判になつたヴィルヘルム二世は、只物ならぬと見える代り、どこか小面憎く、一寸困らして見たく思はれもした。アレキサンドル大王の才能あれば格別、大王の再生と呼ばれ、それ程の才能なく、徒らに偉がつては、反感を挑發するに止まる。それも一度困らしたいと云ふだけであつて、子々孫々永遠に帝位に即けないとなり、聊か藥が利き過ぎ、それ迄にしなければ同情せられる所がないではない。獨逸の國家として何が悪いか。不穩當な事があるとして、それは

獨逸に限つたのでなく、他に一層甚だしいがある。

彼のカイザーは困つた代物、我が日本に對しても三國干涉の音頭を取つたり、黃禍を宣傳したりした。その叔父英國皇帝エドワード七世は世界晴れて日本と同盟を結ばれた。四方八方、これに似た事があつては、一旦事變が起り、孤立無援に陥るも已むを得ぬでないか。側近者は御無理御尤もの連中ばかり、平時には兎も角、有事の日にへマ續き、獨逸伊三國同盟から伊を脱退せしめるなど、何たる無能の體たらくぞ、それが今やヒットラー總統の下、日本及び伊國と防共協定し、遠く東洋に於て、近く歐洲に於て、緩急事を處すれば、第二の世界大戰の起るとも第一の時と趣きを異にするべきでないか。

前の世界大戰は、獨逸が孤立に陥つて尙ほ四年半も戦ひ、剩へ絶えず攻勢を取つた。當時日本及び伊國が加はつたならば、結果が何となるべきか。況や日本及び伊國が當年よりも著しく國力を増進し、各々機宜に應じて活躍する場合、獨逸の再び無條件降服を餘儀なくせられるを考へることが出来まい。英國は世界陸土の四分一を占め、太陽が領土に没しないと稱するも、

如何にして之を保全するか。前に獨逸を袋叩きにしたとて、何時でも柳の下に鱒が居ると思つてはとんだ事にならぬとしない。前の世界大戰に英佛米等が勝つたので、再び勝たうと夢みては、夢が逆夢とならう。(昭和一四・四・一七)

有 爲 轉 變

事實は小説より奇なりとは當り前のこと、小説を事實より奇なりとするこそ、事實を知らな
いか、知つても注意せず、知つたと云ふ程に知らないかよりするに過ぎない。基督はソロモン
の殿堂も此の百合の花に及ばないと言つたとか。百合の花に感心すれば、夜間星の輝くを見て
氣を失つて然るべしともならう。兒童は玩具で遊び、世間知らずは小説で樂み、蟹は甲羅に似
せて穴を掘る。事實で小説を超越し、奇々怪々、應接に追ないものが、次から次と起り、偶々
小説を読めば、自然の山から眼を轉じて盆景を見るが如く、趣向は面白いとして、規模とい

ひ、結構といひ、簡單で、小さくて、較べ物にならぬ。

三二四

さう言ひ出たのは、有爲轉變が一通りならず、世界の注意を集めたのが幾つとなく起つたからであつて、露國のニコラス二世が皇太子として日本に來遊し、巡査に斬られて日本の官民を驚かし、周章狼狽が歴史に汚點を遺すかと思へば、日露戦役で日本を世界の一等國にし、世界大戰で前の敵國が同盟國も嘗ならぬ状態になると見えるか見えぬに、露國に革命が起り、皇帝、皇后、皇子、皇女、悉く殘殺され、弔ふ者もないとは、運命の翻弄も餘りに甚だしく、如何なる人も之を小説化することが出來ず、小説化するに忍びなからう。奥國の末路も之に譲らず、盛衰興亡を目前に見る。

獨國で創業の主なるウイルヘルム一世が九十二歳で崩御、皇太子が位に即き、在位僅に九十九日、痛で崩御、皇太孫が二十九歳でウイルヘルム二世となり、意氣軒昂、一世を睥睨するの概を示し、續いて絶えず問題を世界に提供し、遂に大戰亂を捲き起したが、實は其れ程の肚がなく、オツチヨコの標本とも云はれ、頻りに頑張ると見え、和蘭のドルンに遁げ出した。今や

當年の上等兵ヒットラーが總統となり、帝政時代に増して國威を發揚するを見て何と感ずるか。その外にも西國のアルフォンソ十三世が佛國に流寓し、故國の動靜を聞いて感慨を禁ずるを得ない。

これを思ふにつけても、領土が全世界に普く、朝の太鼓が夕まで續く英帝國の帝冠を弊履の如く捨て、エドワード八世よりウィンザー公に轉ぜられたのを以て、驚くべき身の處置振りとせずには置けぬ。これに驚くのは帝王の経験ない者のこと、遠い昔に悉達太子が人生の果敢ないのを見て遁世した例があり、父帝ジョージ五世は露帝ニコラス二世と從兄弟で、顔が瓜二つ、獨帝ウイルヘルム二世と顔こそ其れ程に似なければ、やはり從兄弟、それで互に争つた末、露帝は悲惨な最期、獨帝は他郷で味氣なき世を送り、その他荆棘の冠を見せ附けられ、寧ろ有爲轉變を餘所に見ること、祖父エドワード七世の皇太子時代の如きを憶られたでないか。

(昭和一四・四・一九)

三二五

一種の最高道樂

三二六

ローマの老カートーは世間に頹廢氣分の弘まるを嫌ひ、極力これを抑制するに努めたけれど、自身は文學を好み、文才もあり、六十歳になつて（一書に八十歳になつて）ギリシヤの原書を読まうとし、ギリシヤ語を學んだ。近世で英國大法官カムデンは英佛伊の文學書を読み盡くし、スペインに移らうとし、スペイン語を學んだ。蒸氣機關の發明家ワットは七十五歳で能力が衰へたかどうかを試めさうとし、獨逸語を學び、能力が衰へないと知つた。忙しい身で老いて語學を勉強するなど、餘計な事と考へられるも、原書ならで眞の意義を解せず、意義を解しても妙味を感じ得ないとならば、さうするの外ない。

歐洲は土地及び民族で言語を異にするとし、大體上に語脈を同くし、翻譯するに難くなく譯書を読んで甚だしく原書の眞意より遠ざかるの恐れがないのに、尙ほ譯書で満足せず、勞力と

時間とを割いて原書を読まうとする傾向あつては、東洋で歐洲の書を読む場合、數學書や幾何學書の如く單に意味を汲取るのみで足るとするは格別、クラシックとなつては、到底眞意を翫味することが出來ず、英獨佛の現代語でさへ、翻譯して物足らず思はれる所があり、ギリシヤ、ラテンから英獨佛に譯したのを重譯するに至り、靴を隔てゝ痒を搔くどころか、壁を隔てたやうな事がないとしない。

東洋の漢字に關して何の議論あるにせよ、四千年間の記録が傳はり、西洋で滅多に讀むを得ない書を読むのは、一の幸福であり、餘り多くを望むを要しないにせよ、ホメロスとか、プラトンとか、西洋で古典の最上乘とする所をば、譯書の儘にして置くのも、明盲目同然の憾みがある云へば云へる。と云つて多事多端の世の中で、西洋の古典を原書で讀むまで死語を學ぶのも如何はしい次第と考へられるが、死語を一々研究し、上古の人が讀んだ通りに讀むこそ容易ならぬ骨折りなれ、譯書で讀んで肝要な所を原文に照らすは、道樂半分にし得ないでなく、その割合に意義の鮮明を覺えることが出来る。

大體の意味に通ずるには、譯書で澤山なれど、日本語と洋語と、英獨佛相互間の言語の隔りよりも多く隔り、一字一句が重きを成す所では、重譯書でピントが合はぬは勿論、譯書でも安心し得ないのが多い。大量製産で譯書も粗製を免れまいが、今の所で原書の大意を傳へるに止まり、一皮剥いて知らうとするには、肝要の點のみでも原書に照らし合はすに若くはない。世間の多數には無用の業ながら、山登りからしてヒマラヤのエヴェレスト峰に登るを世界第一の快事とする者あるが如く、東西を通じて最も貴重視せられる書を原文の儘に讀むを一種の最高道樂として宜からう。(昭和一四・四・二二)

米國の例の手

英國の史家クリシーはロンドン大學の教授となり、後に印度セーロンの裁判長に轉じたが、一八五一年教授職に在つて『世界十五決戰』を著し、米國が日本に開港を迫るべきを言ひ、

「大膽に、侵入的に、無遠慮に」と形容し、同年果してアウリツク提督が使命を帯びて出發し、支那に達した時、召還の命令があり、ペリー提督が代つて出發し、日本の浦賀に着いたのは一八五三年七月であつた。これより先き、一八三七年ニューヨークのオリファント商會(支那貿易に従事しつゝ、傳道に助力した者)で日本の開港を企てた際に「人道、宗教、及び貿易」を標榜し、要領を得なかつたものゝ、その後も幾らか之を念とした。

オリファント商會で日本へ船を仕立てるや、備砲を去つて平和を示さうとした。ペリーは軍艦に乗り、いざと云ふ場合に砲門を開くの準備したけれど、ペリーが前任者アウリツクに代つたのは、平和に局を結ぶべきを認められたのであつて、米國人はクリシーが「米國で大膽に、侵入的に、無遠慮に日本に開港を迫らう」と言つたのを好まず、米國を誤解するものとした。クリシーは英國人の心を以て米國の態度を推察し、米國の比較的多く「人道、宗教、及び貿易」を念とするに氣附かなかつたと云はゞ云へ、その差は米國人の思ふ程のものでなく、同じく血を分つたアングロサクソン國と云ふべきだけの事がある。

米國には植民地時代に本國より人道と宗教とを求めて來住した者があり、その傳統が幾らか遺つて居るとし、「人道、宗教、及び貿易」と「大膽に、侵入的に、無遠慮に」とチャンボンになり、年代を経るに従ひ、後者に重きを置き、何處まで甚だしくなるか測り知れないと思はれるが、それでも我が日本に對して其の兼合ひが巧みと云はうか、面白いと云はうか、如何にも親切と感ずれば、それに増して不親切を見せ、そこで何たる不法の行動と怪めば、痒い所に手の届くやうに處置し、成る程と感心させられ、手練手管が並一通りでない。

英佛蘭米が下の關に戦ひ、米國のみが償金を返還したのも、さすがとすべきが、差別待遇で少しも假借する所がない。明治三十八年米國大統領ルーズヴェルトが日露談判に斡旋し、我好意を表したかと思へば、同四十一年戰艦十六隻、裝甲巡洋艦二隻、驅逐艦六隻、運送船八隻の大艦隊を東洋に廻航し、暗に示威運動した。日本のみに對したのでなければ、日本にも對した。今のルーズヴェルトは先代よりも日本に好意なく、とかく支那事變に偏頗の處置多く、いけ好かないやうであつて、齋藤大使の遺骸を護送するに軍艦を以てし、友誼に厚きを想はし

めるなど、どちらが眞意か。表に「人道、宗教」、裏に「大膽に、侵入的に」か。

(昭和一四・四・二三)

戦時の景氣

韓非子に「與人與を成し、則ち人の富貴なるを欲す、匠人棺を成し、則ち人の天死するを欲す」と云ひ、漢書刑法志に「諺に曰ふ、棺を鬻ぐ者は歳の疫を欲す」とあり、それは大約二千年前の事であつて、今も別段に變りがない。近年富貴が前と趣を異にし、今は官が高くても、金があると限らず、金を積んでも、無官たるを免れないが、どちらでも芽出度い事があれば、衣裳屋とか、裝飾屋とかに注文があり、肴屋で大鯛を用意したりし、流行病があれば醫者が奔走し、死ぬのが多ければ棺桶屋が轉手古舞ひし、何でも忙しいのが商賣繁昌、棚の上の大黒様は、吉事でも凶事でもお構ひなく、あれも結構、これも結構。

フランス革命と云へば恐ろしい變亂、昨日人を斷頭臺に刑し、今日自ら斷頭臺に刑せられるの状態で、人心恟々、さぞかし生きた心地しなかつたらうと想像されるが、歡樂場には依然歡聲が湧き、女が酒の罇に或る人に象つた栓をさし、「御覽なさい、今度は此人の首が此通り』とて栓を切つて墜し、一座手を拍つて喝采した。けふは人の身の上、あすは我が身の上、と心配しさうであつて、僅かの間でも得意は得意、又其の得意が僅かの間でなく、實際に永續するかも知れられず、そこに興味を覚え、飲めや語へで騒ぎ廻るのが絶えない。如何に一面で悲惨の情況を呈するとも、弔ひの鐘を祝ひと聴くのがある。

非常時から戦時となり、護國の英靈として祭られるのが連続し、その遺族及び關係者が強い衝動を感じるも、それさへ一概に言へず、餘徳を感謝するのが無いではない。軍需關係で利益を得來り、得つゝあり、得ようとするのは、それで國事に貢獻する所あるにせよ、戦争あればこそするのであつて、戦争を呪ひ、眉に皺を寄せるよりは、愉快な顔して祝賀し、氣ものんびりして大束を極め込むを禁ずるを得ない。大儲けに慣れたのは左程でもなく、日々の暮らし

に追はれたのが急に収入を十倍し、數十倍しては、普通の調子を失ふも已むを得まい。

貯金報國が有るとし、大抵の遊び處が大賑ひ、温泉が満員、そこへの汽車電車が満員、絶對満員でなくても満員に近く、押し合ひへし合ひ、「熱い〜」とて百圓札四枚を扇の代りにするなど、滑稽とも何とも言ひやうがなく、それも勝ち戦よりのこと、負け戦では如何に勤めたとて誰も其の眞似しないと云ふものゝ、戦線の勞苦、遺族の悲哀、今後の經營、恵まれない階級、等々を考へれば、成るべく内輪にして貰ひたくも思はれ、今日此頃で國家社會に關して素養ある人と素養ない人と何の比例になるか、一旦緩急あつて義勇公に奉ずるとは何を意味するか、指導の責任ある者は、過去を顧みて現在に慮る所なくてはならぬ。(昭和一四・四・二五)

五十年と一百年

本年は佛都パリーのエツフェル塔建設五十年記念式が催されるが、塔は革命勃發一百年記念

の萬國博覽會のために造られたのであつて、五十年の記念は都合佛國革命の一百五十年の記念ともなる。近く一世紀半は過去十五世紀間よりも多事多端、さしも世間を驚かした佛國革命も、續いて起つたナポレオン戰役、王政復舊、第二共和、第二帝政、佛獨戰役、等々から世界大戰、他の國々も多少これに似た所があり、今や東洋は支那事變の眞最中、西洋は獨のヒットラー、伊のムツソリニの世の中、何時何處から何事の起るかゞ知れず、遠い昔話は差し當つて用がなく、さういふ事にかまげて居れぬと云はれもする。

然しさう慌てたものでなく、現在は何時でも過去と將來との中間にあり、將來を慮るほど過去を顧みずに置けぬ。エツフェル塔の設けられた萬國博覽會の開催は明治二十二年のこと、塔は幾らか日本で評判になつたけれど、それが昔に聞えた佛國革命の記念に設けられたと知つた者が何程あつたか。帝國憲法發布の歳とて、革命に興味を覺えた時代と、これに興味を失つた時代との分水嶺を形つくるが、黒田内閣に於ける大隈外相の條約改正案が内地の注意を奪ひ、佛國の博覽會が何とあるか、そこどころでないとの調子であつた。固より後と違ひ、新聞の外

國報道が少く、電報の如きは有るか無しかの状態。

佛國革命勃發の一七八九年は、我が寛政元年に當り、彼に於て大亂が捲き起り、我に於て太平の極致を祝賀し、眞に正反對とすべきが、頼山陽が文政九年日本外史を完了し、記事の終りに「源氏足利氏以來、在軍職兼太政官者、獨公而已、蓋武門平治天下、至是極其盛云」と書いたのは、長州の不平青年が「其の盛んなるを極む」とは「是より衰ふ」を意味し、幕府は必ず倒れると言ひ合ひ、蹶起して兵を擧げ、果して數回の小戰後、江戸城明渡しとなり、全國政治の一變したること、彼の革命と同列に言へないとし、全く比較すべきものが無いと限らない。

今や米國のエムパイヤ・ステート・ビルヂングといひ、クリスラー・ビルヂングといひ、建築物の高さに於て世界第一を誇るも、エツフェル塔は最高建築で時代に率先したのみならず、骨組が仰々しくなく、すらりと空に聳え、それで極めて堅固なる所、建築の妙技を示す。廣告に使用し、無線電信に使用し、テレビジョンに使用するが如き、當初建築師が何程豫想したかは姑らく措き、確かに一の天才の事業たるを失はない。エツフェルはその外に幾つも天才を

證明したが、惜しい事に犯罪の嫌ひで盛名を傷つけた。革命の二百年記念に高さ約一千尺の鐵塔が成り、塔の五十年記念に罪が忘れられ、單に功が輝くかどうか。(昭和一四・四・二七)

前に勝つたとして

「二度あつた事は二度ある」と云ふも、「一度あつた事は二度ある」と云はない。二度あつた事は必ず三度あるかどうかも斷定を差控よべきにせよ、相當に確かさを増し、言ひ換へれば、蓋然性が多くなつたと言へる。一度あつた事は二度あるとするに至り、蓋然性が甚だしく減じ、殆ど全く偶然と擇ぶ所がない。射的で二度命中すれば、幾らか自信を強くして宜いとし、一度命中したのみでは、僥倖か何か知れたものでないとせず置けぬ。それでも世間で兎角一度で天狗になり勝ちであつて、意氣揚々、エヘンと乗出し、物の見事に失敗し、ペソをかくのが珍らしいとしない。小さい事でも、大きい事でも。

世界大戰が獨逸の無條件降服に終つたのは、種々の事情よりし、中にもカイザーが才能を恃み、獨裁を敢てする割合に才能なく、文武を通じて人を得なかつたのに基づく所多く、せめて最初から小モルトケの代りにファルケンハインを參謀總長とせば、今少しく効果的に作戦し得たらうと考へられるが、何にしても外交には孤立し、速戰速勝の計畫には失敗し、徒らに力押しに押し、年數を経て多勢に無勢となるを免れなかつた。尙ほ四年半の四年間攻勢を續けた所、獨軍が強いのか、聯合軍が弱いのか、後者が勝つたとしても、餘り大きな顔する譯にゆかぬ。獨逸が軍隊崩壊し、敵の處分するが儘になり、二十年で國力を回復するのみか、前よりも強くなつたのは偶然でなす。

聯合軍が勝ち、英國のロイド・ジョージ、佛國のクレマンソー、米國のウイルソン、伊國のオルランドが四巨頭、「ビッグ・フォー」と稱し、日本の西園寺公を加へてビッグ・ファイヴとすべき所をば、それを省き、事實に於て伊國をも省き、ビッグ・スリーで大戰の善後策を決定し、英國と佛國とが比較的多く分前を得た。米國は上院に於て大統領ウイルソンの主張を

容れず、之をして悶死せしめたけれど、米國の力で最後の勝利を得たとし、只さへ鼻息の荒らかつたのに、幾段と荒らしくし、全世界の和戦は我が一國で決するかに振舞ひ、現に有頂天。

今や形勢が世界大戦の始まらうとした當時に彷彿し、英佛米に於て再び獨逸に無條件降服を餘儀なくすべきを考へて居るらしいが、前に聯合軍に加はつた伊國は獨と共にし、當年のオルランド時代と違ひ、ムツソリーニが着々國運を發展し、獨逸と防共協定するのみならず、前に獨と戦つた日本も之と提携するの勢あるに於ては、再び大戦が開けるとして、同一の結果に終るを豫想するは、打算を誤るの嫌ないか。前に世界大戦で勝つたとて、再び勝つべきを信ずるは、『二度あつた事は三度ある』を誤解し、『一度あつた事は二度ある』とし、僥倖に浮かれることにならないか。(昭和一四・四・二九)

大オツチヨコ

米國の先代ルーズヴェルトは何かにつけて先輩の名を擧げる際、ワシントン、リンコーン、グラントと云ひ、グラントは政治家としてではなく、軍人としてであり、數多い大統領中、大統領らしい大統領はワシントン、その次ぎがリンコーン、それから自身を意味すると口の悪い連中が言つた。連中の一人には、ルーズヴェルト内閣に列し、日本にも來り、後に大統領となつたタフトが居り、ルーズヴェルトの獨りよがりと笑つた。然し何としても彼のルーズヴェルトは大統領中の傑物たるを失はなかつた。これに較べて今の大統領ルーズヴェルトを何と見立てて然るべきか。偉いか、偉くないか。

随分血縁が遠いためか、寫眞の上で少しも先代と類似點なく、性格も餘程違ふやうに考へられる。ワシントンも、リンコーンも、境遇が境遇であり、必要に應じて必要な事をするに止ま

り、場當りとか、大向ふとか、芝居めきた事をしなかつたが、先代ルーズヴェルトは多少の芝居氣がありながら、それが腹藝となつたり、六法を踏んだり、聞いてゐて溜飲が下つた。今のルーズヴェルトは絶えず芝居をするに忙しく、これで旨く當たらう、當たらねば何としようかなど、頻りに飛廻りつゝ、どれもこれも幾らか見當を外れる恐れがある。初めは一寸上出来、先代よりも小才が利くと見えたのに、後は後ほど失望させられる。

今のルーズヴェルトは大國の最要職に居つて、國家及び世界を何と解してか、昔の王様が何でも出来ると心得た如く、東西兩洋に向つて勝手な熱を吹き、それで通るものと信するらしく、獨國のヒットラー總統に對するメツセージも、本氣の沙汰かと思議な位に感ぜられる。左右に良い頭腦がなく、御無理御尤も、御大の尻馬に乗るのみかも測られぬけれど、彼のメツセージと、ヒットラーの之に應酬する演説とを對照するに、斯くも論旨に優劣があるかと、今更のやうに道理を判別する智能の程度に疑を懐かすに置けぬ。

米國が如何にして現在の領土を得たか、英佛ソと同じく之を柵に上げ、持たぬ國の少しでも

持たうとするを責め、世界の平和を脅かす者と罵ること、人類への同情、與國への禮儀、文明への憧憬を捨てたことになり、若し捨てたと思はず、何處迄も自ら正しとするならば、習ひ性となり、是非の判断に堪へないとせねばならぬ。世界の人類を平均すれば、ルーズヴェルトとヒットラーと、孰れの主張が正しいかを知るものが多く、實に遙かに多からう。今のルーズヴェルト閣下は當初希望を囁せられたに似ず、近來兎角オツチヨコチヨイの行動が甚だしく、ヒットラーのため物の見事に土俵外に投げられたところ、そこが大オツチヨコ!

(昭和・一四・五・一)

政治家と金

今の英國首相の父なるジョセフ・チエムペレンは、ロンドンの大きな靴屋に生れ、十六歳から二年間靴業に従事し、それからベーミンガムで親戚が営む螺旋工場に入り、側に蘭を栽培す

るなど、三十八歳でパーミンガムの市長となり、大學を新設し、その他いろ／＼と盡力し、三年後に同市から衆議院議員に推された時は、既に相應の資産家となつたが上、選挙區が競争のない根據地となり、少しも後顧の憂がなく、誰れ憚らず、全力を政治に注ぐを得た。自由黨に活躍し、愛蘭問題で分離し、保守黨と共にし、拓相職で首相以上に重きを成し、獨のカイザー、米のルーズヴェルトと、世界の三大立物と呼ばれた。

子二人、オーステン及びネヴィル、共に政界に活躍し、現に弟が英帝國の首相たるは、性格及び材幹の群に秀でて所あるに因るも、父が財産を作り、根據地を遺したのに因ることが少い。兄弟が互に質を異にし、一樣に言へぬとし、父よりも品がよく、順應性、包容力がある代り、父ほどに強情我慢、思立つたが最後、目的のため手段を擇ばない辛辣味を缺くは、父にお膳立をして貰ひ、苦勞らしい苦勞の足らぬよりして居らう。父も生れて貧乏知らずながら、本來幾らか旋毛曲りなに加へ、繁劇な業務で財産を作つたゞけ、ともすれば是が非でも通さうとし、そこに短所もあり、獨得の長所もあつた。

實に父なる人は政治に金の必要を知り、先づ之を作つた。金がなければ誰かに用立て、貰はねばならず、それでは折角活動すべき位置を得ても、足かせ手かせ、自身の思ふやうに進退する譯にゆかず、甚だしきは操り人形も同然、我が身が我が身でなく、或る一部の金儲け器械となつてしまふ。如何に有象無象が金權者流に使はれることよ。ユダヤ閥が跋扈するのも、彼よりするか、我よりするか、知れたものでない。そこで父チエンバレンが政界に打つて出るに先んじ、うんと金を作つたこと、政治家として順序を得たとせずには置けぬ。

彼は政治運動に不自由を感じない程に金を作り、我が一生に止まらず、子孫に及ぼしたけれど、それでさへ尙ほ相場に手を出したと疑はれた。金が敵の世の中とは世間の何處でも已むを得ないか。それにつけても政治家は金の始末を考へ、乞食に似ないやう、泥坊に似ないやう、注意せねばなるまい。憲政の先進國と云はれる英國でさうであり、後れ馳せに憲政國となつた我が日本で、兎角の噂を免れないが、一人前の資産家は幾人もあるとし、黨首として運動するに堪へるのが甚だ稀れ、政友會で中島氏對鳩山氏が中島氏對久原氏となり、金豪と金豪とが兩

兩相ひ對立するを見るに至つた。ナチャ、フアツシヨヤ、その點が違ふ。(昭和一四・五・三)

政黨と新聞

舊自由黨と舊改進黨との對立した頃、前者は比較的世間に人氣があつて、その割りに新聞で受けがよくなく、後者は比較的世間に人氣がなくて、その割りに新聞で受けがよかつた。これは其の黨首も同じであり、板垣は一般に人氣ものながら、新聞の上に輕んぜられ、大隈は人氣が引立たなくても、新聞で太鼓を叩かれることが多かつた。これはさまざまの事情よりし、事情にも事情があるとし、板垣が武士肌で不平士族と共にし、地方の農民を激勵するに對し、大隈が紳士風で職業階級と共にし、都會の商人と懇談すると云ふが如きが少からず與かつた。自ら求めたよりは、勢が促がしもし、餘儀なくもした。

不平士族とても一概に言へず、自由黨の領袖なる林、竹内等、煮ても焼いても食へず、儲けに抜け目があつたものでなく、その反對に改進黨の名物として鑛毒事件の田中の如きがあるけれど、地方で自由黨員と云へば、ざつくばらん、意氣投合し易きを覚え、改進黨員と云へば、しんねりむつり、利害で動くやうに考へられ、それだけ都會で自由黨員が亂暴で、無責任で、借金持ちと思はれ、改進黨員が素養あり、常識あり、餘り間違ひがないとせられた。偶然と感ぜられぬ程、板垣と大隈とが兩黨を代表した。後にこそ板垣が老碌し、大隈が天下の人氣ものとなつたれ、板垣が意氣颯爽、大會に演説した頃、政界の第一人者と見え、それで大政黨が出来上つた。

新聞は中立を除いて兩黨に分れたものゝ、輿論を示すらしい大都會の新聞は、中立を標榜し、眞に中立であつても、改進黨の主張に傾くのが多く、それが憲政黨になつても別段に替りがない。自由黨の變形した政友會は、前の壯士連が減じ、憲政黨と孰れ劣らぬ身なりになつても、素姓が争はれず、善く云へば直情徑行、意氣に感じ、意氣を重んじ、悪く云へば遠慮會釋なく、目的のために手段を擇ばず、感情に強くて理窟に絡む新聞記者に接するにあつさり過ぎ

る。理窟を説くは憲政黨の方が長じてゐる。

その關係が政友會の内部に現れ、舊自由黨の肌合ひのものが中島氏を推し、これから遠ざかつたものが之に反對すると見えるがどうか。地方的事情もあれど、革新派は何時迄も病人を總裁として置くを欲せず、適當な人物があれば推戴しようでないかと言ひ、中島氏に快からぬ連中は一致結束して反對する。所で大都會の新聞が革新派に同情するよりも、これにケチをつける傾向あること、先年自由黨に同情せず、多少改進黨と歩調を合はせたのに似て居りはせぬか。つまり革新派には新聞記者向きの人物が少く、新聞紙を計算に入れず、力が一切を決するとし、一切を決するとして、道路の摩擦で幾らか損するを免れまい。(昭和一四・五・五)

お足の研究

唐人が金陵を過ぎ、「六朝如夢鳥空啼」と詠じたが、明朝に金陵を南京と稱し、それから再

び繁華を誇ひ、殊に蔣政權が之を首都としてより、南北が勢を變ずると見え、それが敢へなく没落して、更に夢と化した。今後別に興隆の運に向ふとも、今まで夢の跡が多く、「六朝文物草連空、天淡雲閑今古同、鳥去鳥來山色裏、人歌人哭水聲中」その中で後の語り草となるものが擧げて計へ難く、最も卑近で最も廣く知れ渡つた「錢神論」の如き、愚作ならば愚作として、兎も角も空前絶後たるを失はない。これに對して「錢愚論」も出たけれど、その全文が傳はらず、孰れにしても六朝は錢に注意を拂つたと見える。

錢神論は晋の魯褒の作に係り、大約二つの意義から成る。第一は錢が普く世に通用すること、「内が方で地に象り、外が圓で天に象り、その積むこと山の如く、その流ること川の如し」と云ひ、「翼なくして飛び、足なくして走る」と云ひ、錢が廻りものとの意であつて、我が日本で平安朝に早くも錢を「足」(アシ)と呼び、婦人が「オアシ」と稱し、オアシの語が今日でも一般に使はれてゐる。これは「足なくして走る」と云ふのが如何にもとか、成程とかと思はれたのに因らう。「達磨にオアシがあるものか」と云ひ、次から次と洒落が移り、それ

が悉く足なくして足あるよりも自由に走るを意味する。

然し錢神論は之に重きを置かず、それよりも錢に絶大の力あるを説くに急であつて、「錢の在る所は、危きも安からしむべく、死も活かしむべく、錢の去る所は、貴きも賤しからしむべく、生も殺さしむべし」と云ひ、「忿諍辯訟は錢に非ざれば勝たず」と云ひ、「錢あれば鬼を使ふべく、況んや人に於ておや」と云ひ、「地獄の沙汰も金次第」といふを通り越し、明治年間に唱へ出された「拜金宗」よりも金の力に重きを置いた。それで作者自ら隠遁生活を送り、姓名をも知らさなかつた所は、一寸世に類がない。その時代には、他にも蔡母民や、成公綏や、「錢神論」を作り、一時錢神論の述作が流行したとは、妙な時代も有れば有るもの。

これは西暦二三世紀のこと、それから千六七百年間、東西で金錢を念とし、特に近世になつて經濟學の研究を積み、貨幣に關して微に入り細に涉りながら、戦時で一方に生命財産を捧げ、何物をも犠牲にするを辭せず、一方にアブク錢がころがり込み、ドンチャン騒ぎに飽き足らず、義勇奉公か、貯蓄報國か、無駄使ひせず、悉く獻金するか、無駄使ひせねば藝者が泣

き、細君が泣き、デパートの株主が泣くか、あちら立てれば、こちらが立たず、貨幣の研究が出来ても、お足の研究が出来ないか。借問す、千六七百年間お足の知識に何の進歩あるか、と魯褒が笑はう。(昭和一四・五・七)

玉手箱の傳説

浦島太郎の傳説は如何にして出来上つたか、既に考證されたかも知れぬけれど、龍宮で遊んだ所はタンホイザーのヴェヌス山に於けるに似て居り、玉手箱を明けた所はバンドラの箱に似てゐる。近年我國で浦島に興味を覺えたのは、ワグナーのタンホイザーよりしたとし、玉手箱はバンドラの箱に似たやうで似ず、似ないやうで似、そこに多少の疑問がある。玉手箱を明けて青春が忽ち老衰化したのは、太郎一人に限られたこと、他の何人にも無關係であつて、それも箱に不老の妙薬を祕藏し、これを手にする者が永遠の青春を得たか、又は箱に老衰の毒氣を

入れ、随つて皺が寄り、随つて之を箱に入れたか、薬とも、毒とも、孰れにも解せられる。

バンドラの箱も、人間の災害を入れてあり、それを開いたので人間が災害に悩まされるやうになつたと云ふのと、人間の幸福を入れてあり、それを開いたので有らゆる幸福が去り、たゞ蓋をした時に希望のみが残つたと云ふのと、二つの解釋があり、浦島の玉手箱が一個人の禍福に限られて居り、バンドラの箱が全人間界の禍福に關する點に於て大きな差別を見るが、畢竟するに量の問題に屬し、質に違ひがなく、若し有るとすれば、浦島に何も残らず、バンドラに希望が残つた所にある。

浦島の玉手箱から白煙が濛々と立上つたと云ふのみで、その白煙が幸福であつたか、災害であつたかゞ知れず、若しバンドラの如く希望だけを引留めたならば何となつたか。青年美を保ち得る限り、龍宮に歸るの希望を抱き、如何にかして果さうとしたらうが、既に白髪も有るか無いか、幾百歳の老翁と化しては、何の希望を以て生くべきか。タンホイザーは墮落しても老衰せず、杖から青葉の出るのに希望を繋いだ。そこが浦島と違ふ所であつて、若しタンホイザー

が玉手箱を開いたとせば、別段に容貌が變ぜず、ヴェヌス山に歸らうとして歸られず、歸られなくても歸らうとし、歸られるか、歸られないか、何時か歸り得られようかと云ふのが希望の希望たる所とする。

バンドラの箱から一切の幸福が去り、希望だけ残つたとは、基督教が弘まつてから附會されたものと考へられる。基督教徒が迫害された時、現世に苦むとも天國に無上の幸福を得るとの希望を繋ぎ、希望それ自らが何物にも代へ難い幸福となつたのであつて、佛教にも幾らか此類の事がありながら、迫害といふ程の迫害がなくて特に強調されなかつた。希望は幸福であり、これを達した刹那が殆ど無上の幸福とし、その反對に希望の達せられないのが苦痛となり、甚だしい苦痛となる。蔣政権の如きは、前に希望で浮かれ上つたゞけ、失望の淵に沈み、バンドラの箱に希望が残つたのが恨めしくないか。(昭和一四・五・九)

日本の第一印象

東からでも、西からでも、日本に來ての第一印象は想像通り、寧ろ想像以上の島國たることであり、何から何まで小さくて、小綺麗で、面白さうで、同時に餘り深味がなく、底力がなく、通り一遍で、大した事がないと見える。悉くとは云へぬけれど、紀行文とか、觀光客の挨拶とかで察することが出来る。英國は紛ふ方ない島國、地圖の上にて日本とどちらと云ふ所ながら、船で近づいた所、上陸して見た所は、大陸と特別の違ひがなく、テムス河が流れるか流れぬかに流れ、大陸の他の國々と一様に感じ、單にドーヴァ海峡を過ぎ來つたことを思ふに止まり、何等島國たるを印象づけられない。

日本は東から東京灣に入るか、西から長崎に近づき、又は瀬戸内海に入るか、孰れにても白砂青松、丘陵が彩り、遠山が霞み、恰もフェリー・ランドに到着したかの如く、上陸すれば小

さな人が迎へ、小さな家が並び、小さな汽車が走り、小さな森に小さな神社が見え、何が何でも小さくて綺麗といふ感じに打たれ、時として大工場、大デパートがあるとて、建築物は百尺以内に制限され、米國の摩天樓と較べ物にならぬ。人が應對するに、可笑しくもないに笑ひ、氣輕な代りに奥行がなく、つまり智慧があつても猿真似の上等と思はれもする。これが普通の第一印象であつて、帝國を判斷するに付き纏ふ。

日本に第一印象で判斷の附かぬものあること、速断流に於て全く知るを得ない。支那で帝政の末に日本と戦つて失敗したのは、歐米を標準にして日本の力を輕んじたのに基づき、露國で帝政の末に日本と戦つて失敗したのは、象が犬猫を見るやうに心得たのに基づく。交戦國以外でダビデがゴリアテに勝つたやうに言つたけれど、これは意外の感に打たれたのを強ひて道理づけたのであつて、結果を見てこそ先見の明ありさうに口走れ、結果を見ない間は日本を敗れるものとした。それ程に彼等は日本を知らず、知つたやうで誤解してゐる。

支那で日本と戦つてゐる連中は、例外なしに第一印象を訂正せず、訂正する程に知識を増さ

ナ、非を遂げて非なる所以を悟らない。日本では其の反對に蔣介石を買被つて居るのがあり、單に非を悟らないのを偉いとし、一世の雄と賞めたりする。彼及び彼の部下が、日本の第一印象を固執し、如何に意氣込んだとて、金もなく、力もなく、直ぐ疲れて進退維れ谷まるとした事、近眼者流も甚だしい次第なるが、支那のみを咎める譯にゆかず、これを煽て上げ、火中から栗を拾はうとする英米佛ソも、支那と同じく日本を知つたやうで知らず、蔣政權が重慶に立籠れば、日本で手も足も出さず、泣きを入れて來るとした所、眼が見えるやうで案外に見えない。(昭和一四・五・一一)

怪傑の夢の跡

怪傑と云へば星亨を聯想するが、星と趣を異にして矢張り怪傑の列に入る者に英國のロイド・ジョージが居る。今より正に滿二十年前、ヴェルサイユ會議に彼が本國の首相として佛國

首相クレマンソー、米國大統領ウィルソンと世界三頭政治の形を呈し、大戰の善後策を決定し、永遠の平和の前提として國際聯盟を創設した。立案に種々の経緯があり、二三流が奔走したにせよ、兎も角も彼の三人が中心人物となり、未曾有の戦亂の跡始末をしたと知られる。伊國と我が帝國とを加へて五大國と稱したもの、伊の首相オルランドは多く與からず、西園寺全權は除外された。これが抑々夢の破れる元。

彼の三頭は互に性格、才能、及び背後の國情を異にし、クレマンソーは虎の綽名通りに押しの一手を以て臨み、自國の利權を主にし、他を多く問はず、ウィルソンは大學教授のお里を離れず、各國民の微妙な感情を慮らず、忙しい時に原論を講釋するが如き態度に出で、ロイド・ジョージは氣轉を利かせ、それも一理、これも一理、仲裁役で漁夫の利を占めようとし、曲りなりにも複雑な問題に結末を告げたこと、孰れ劣らぬ英傑と云ふべきやうで、二十年後の今日、折角結定した所が次から次と破れ、英米佛で大騒ぎして居るとは、英傑と讚美するに如何はしく、先づ怪傑として置く。

ウイルソンは一九二一年六十六歳で歿し、クレマンソーは一九二九年八十九歳で歿し、ロイド・ジョージは現に七十七歳で健在しつゝあるが、この三人は極端に性格及び境遇を異にしながら、均しく世界大戦の善後策を誤つた責を負はねばならぬ。ウイルソンは生前に追窮され、煩悶して病臥した。クレマンソーは首相として大難に常り、それで大統領になれなかつた。ロイド・ジョージは自由黨を保守黨と労働黨とに喰はれ、政界に立場を失ひ、迷子となる。中でクレマンソーが一世の雄たるの資質を備へ、怪傑でも只の怪傑扱ひすべきでない。

三人が各々夢をみて、その夢が破れた。他の二人は國際聯盟の破綻を見ずに終つたが、ロイド・ジョージは當年の同盟國なる日本が英國に袖にされ、聯盟を脱退したのを何と考へるか。本月八日徴兵制の採用に賛成した後、『日本の印度を脅かすに關心を怠つてならぬ』と言ひ、『世界大戦に印度が百萬の兵を動員して近東の防衛に當つた』と言つた。英國が傳統的の自負心を驟へし、徴兵制を布いたとて、多寡の知れたもの、印度が前に百萬の兵を出だし、約束を反古にされたのを忘れると樂觀するを得るかどうか。英國及び佛國が二十年前と今日と如何に

列國間の位置を變じたかに徴し、彼等怪傑の果敢ない夢の跡を辿り得られる。

(昭和一四・五・二三)

六十年式

今は前ほどでなければ、やはり世界の大部分に於ける洋服の流行は、男性が英國ロンドンよりし、女性が佛國パリよりして居らう。本年の女の春着は「六十年式」を加味した所が多く、それは英國で「ヴィクトリア朝風」と云ひ、佛國で「第二帝政風」と云ひ、事實に於て當年の皇后ユージエニーの嗜好に出たものとか。「六十年式」とは言ふ迄もなく一八六〇年のこと、自分として誕生の歳に當るので幾分の興味を覚えるが、正に佛國で第二帝政の全盛期、皇后が三十五歳、日本ならば姥櫻といふも、化粧の巧みな佛國で姥どころか、少くとも遠目には十年前の結婚當時と聊かの替りがなく、眞に歐洲、寧ろ世界第一の美人。

岩倉大使一行が佛國に到着した時は、既に帝政が破滅し、彼の美人を見るべくもなかつた。これに先んじて徳川慶喜の弟昭武が將軍名代としてパリーの萬國博覽會に赴き、日本皇帝の弟たるを以て優遇され、ナポレオン三世が右手に皇太子、左手に昭武を携へ、皇后と共々國賓に挨拶して廻つた。時に昭武は十五歳、多く知る所はないが、隨行員は皇后の美麗なのに打たれ、この世界のものでないやうに感じたと後に語つた。本來の美に加へ、能ふ限りの美装を施したので、さもあらうと推察されるが、彼の皇后は自ら美にするのみでなく、宮廷に有らゆる美を窮極するに努め、外國の元首關係者をして田舎じみるのに氣耻かしく思はしめる所があつた。

然し變亂に變亂が次ぎ、幾代の王朝の遺風が消滅し、新朝廷の高貴は悉く出來星、殊に皇后は美は頗る美ながら、スペイン伯爵の女、それも素姓が争はれず、綺羅寶石を飾るとて、輕々しくて品がないと謗られ、加ふるに牝鶏の晨するも甚だしく、皇帝に餘計な助言し、メキシコに出兵せしめて失敗し、普國と開戦せしめて失敗し、他にも色々牛を賣り損つたやうな事ある

が、裝飾及び一般奢侈に烟眼を具へ、只さへ女の裝飾に重きを置かれた佛國をして愈々女服の流行を支配せしむるに與かつたことが少いとしな。彼の女は美粧の天才でもあつた。

所で彼の女が四十五歳で普國の兵に逐はれて英國に遁れ、四十八歳で夫に死なれ、五十四歳で獨り子に死なれ、それで九十五歳まで生き、普國皇帝の没落を見届けて歿し、二十年後の本年、會て君臨した佛國に於て、『六十年式』の名で皇后全盛期の服裝が復活の勢を示すとは、世界に美人が多く、絶世の美人さへ次から次と現れるのに、斯くまで榮華の絶頂に登り、不運のドン底に落ち、反旗を翻へした人民の子孫が今更のやうに追慕すると見えるのがない。我が日本は現に服裝の流行どころでないが、貴婦人がひの中には、後れ馳せに『六十年式』で彼の女に追隨するのあらう。(昭和一四・五・一五)

頽廢への導き

三六〇

「盛んなる者は必ず衰ふ」とは、必然の理かどうか、兎も角も世間で常識になつて居り、進化を説くにも退化を避くべからずとし、たゞ退化が更に一層進化を遂げるの段階となると云ふ所に單純な「盛者必衰」觀と違ふを覺えるが、一時期一部分に限るに於て「盛者必衰」を普通の現象とせず置きぬ。そこで文明も發達から成熟、それから爛熟、それから腐敗となるの順序であつて、成るべく發達期間を長くし、成るべく成熟期間を長くし、早く爛熟に移らず、斷じて腐敗に移るまいとするのが、世の健全分子の精神及び行動と認められてゐる。所で果物でも、肉でも、爛熟に移らうとする所が最も美味、文明もそれがある。

「酔うた酔た〜五勺の酒に、一合飲んだら由良之助。」正覺坊の綽名ある者は一合が一升でも足らぬけれど、五勺でほろ酔ひになる連中は、一合から二合と飲み、一升到近づく迄にハ、

レケで倒れるのが常、もつとと思ふ間は足らず、足るべき時に前後不覺、或は小間物店を擴げ、正覺坊は幾ら飲んでも酔はず、飲むのが面白くもあり、自慢にもする中、早くヨイ〜になる。「譽れの盃」の馬場三郎兵衛は井伊直孝と組打ちしたのか、藤堂高虎と組打ちしたのかそれさへ知れず、底抜上戸の擧句の果てに何となつたか、講釋師が勝手に語るに過ぎない。

文明は人間の幸福を増進し、今は腰に十萬貫を纏ひ、鶴に乗つて揚州に上るが如き、何程の事でなければ、それだけ文明の形を粧ひ、幸福に似て不幸に導き、それに誘はれる者が幾人あるか知れない。近世文明の始まると共に、微毒が世界に普及し、我が日本は僅かばかり西洋と交通し、後に鎖國を以て居り、鎖國で經過したに拘らず、「已惚れと瘡氣のない者はない」との諺が出で、鼻と花とをかよはせ、「はなのないのは寂しかるらん」と云つたりした。治療法が進んで鼻缺けがなく、骨ガラムが目立たぬにせよ、若考録は先づ其れと推察される。淋病の自身及び子孫に於ける影響も容易ならぬと考へられる。

阿片と煙草とが殆ど相ひ平行して擴まり、若し政府で阿片の常用を禁じなかつたならば、そ

れのみで人類が衰微に傾いたらう。煙草は之に較べて害がない上、政府の収入になり、楽しんで献金すると同然と言ひもするが、果して身體に害がないかも疑はしいのみならず、火災の原因となるのが珍らしくなく、最近に板橋セルロイド工場爆發の如き悲惨事があり、少しの癖から飛んだ事變の起るを慮らねばならぬ。精神的方面にも之に似たことが絶えず、ボードレールや、フェルラインや、デカダン文學は或る點で進歩を示すと同時に、爛熟から腐敗に誘ふのであつて、進歩は必ず慶賀すべしと限らず、頽廢への導きもある。(昭和一四・五・一七)

才能と勉強と壽命

徳川時代に神童が珍らしくなく、「十で神童、二十で才子、二十五から只の人」と云ひもしたが、神童らしい神童で最も著名になつたのは山田麟嶼であり、十三歳で儒官となり、祿二百石を賜はつた。今ならば帝大教授といふ格、十三歳の帝大教授など、一寸想像も及ばない。後

に進境が見えず、好んで笛を吹き、太宰春臺が苦言したりする中、二十四歳にて疱瘡で歿した。疱瘡に罹らなければ、何となつたか。愈々二十五から只の人となつたか。孫なる山田圖南が醫學で秀でた所から察すれば、麟嶼も只の人で終らなかつたとも考へられるけれど、何分にも二十五にならなかつたので、斷言するを得ない。

痘では誰が死なぬと限らないにせよ、麟嶼は本來強い方でなく、それで早く斃れた所もあらう。神童はとかく身體が弱く、弱いので運動するよりも讀書し、愈々弱くなるの傾向がある。

麟嶼は荻生徂徠の門に入つて間もなく徂徠が歿したが、徂徠の門で服部南郭と安藤東野とが同年に生れ、南郭が七十七歳で歿し、東野が三十七歳で歿した。東野が何病に罹つたか、明白を缺くも、幼少で父母に別れた所からしても、恐らく肺病であつたらう。同門中の最も才物で、徂徠も『之に假すに年を以てせば、豈に不佞の能く及ぶ所ならんや』と言つた。天才肌で多藝多能、若し壽命を得ば、蘇東に匹敵する人物となつたらうと想像されるが、遂に病氣に勝てなかつた。

普通に我國で東坡の事を云へば、頼山陽を聯想し、實に幾らか似て居るとし、東坡は海波の去來するが如く、山陽は河川の流れるが如く覺えぬでなく、それでゐて山陽に纏つた業績があり、或る點で寧ろ頽瀆に似てゐる。然し東坡は六十六歳、頽瀆は七十四歳、山陽は五十三歳で歿し、山陽が今一層長命したならば、より多く力を伸ばし得たらうと推察して誤るまい。山陽が嗜血したのは最後の年のこと、肺病に罹つたのは何時よりか。近年治療法が進歩しながら、陸奥伯が五十四歳、小村侯が五十七歳で、肺病にて斃れたので、山陽も仕方がないか。

山陽は祖父享翁が七十七歳、父春水が七十一歳、母靜子が八十四歳、叔父春風が七十三歳、同じく杏坪が七十九歳、血統で七八十に達し得べき筈であつて、さうならなかつたのは過度の勉強が與かるか。餘り勉強せず、休み／＼勉強するよりも、勉強し得るだけ勉強する方、生活として充實して居るとすべきか。それとも加減して勉強し、壽命を延ばすのが、結果に於て優るか。「才子多病、美人薄命」とは何處まで事實か。「天才の事業の大部分が努力」と云ふよりは、才能に恵まれても、勉強せねばならず、過度の勉強で健康を損ね、働くに働けなくなる

恐れがあり、そこが加減もの。(昭和一四・五・一九)

金の使ひ方

カーネギーが「富んで死ぬのは耻辱」と言つたのは、或は賛成しないのがあり、恐らく賛成しないのが多からう。「金を作るよりも、これを使ふ方がむづかしい」と言つたのは、賛成の聲にこそ大小があれ、一般に成る程として賛成するに傾かう。貧乏人の多い中で金を作るは容易の事ではなく、運鈍根どころか、特殊の才能を備へねばならぬが、さて金を作つて何に使ふかとなり、善い智慧の出るのが割合に少く、寧ろ甚だしく少い。地獄の沙汰も金次第、金さへあれば何でも出来さうで、折角金を作つて何をするかとなり、大地主とか、大株主とか、大邸宅の主人とか、誰の名義になつても變りないのを普通とする。

ロンドン・タイムズ社で名士の歿する毎に評傳を掲げ、これを集めて發行するが、中で金持

ちが何の比例か、單に金を作つたゞけでは、評傳の綴りやうがなく、綴つたとて誰も興味を覺えず、それで綴りもしない。世間で知ると知らないと何程の事もなく、評判は泡沫も同然と云はゞ云へ、折角金を作つて何處の何物とも知られず、知られたとて因業爺、吝嗇漢、ケチン坊、アカニシでは、金の有難味がありさうにない。骨を折つて金を作つた以上、金持たすが何としても企て及ばないやうな事を企てる位でなくては、骨折損の骨頂になつてしまふ。

紀文が節分の豆撒きの代りに吉原で錢を撒いたとあり、これならば十千萬兩でも一夜に使ひ得れど、アブク錢がアブクになるに過ぎない。カーネギーはスコットランド人で極めて勘定高い男、厘毛も苟もせず、それで幾億の金を使はうとするので、金を作るよりも骨が折れた。然し念に念を入れつゝ、何とかして金を使つたので、彼の生活の有意義なるを示し、生前に兎角の評あるを打消してしまつた。米國で之をば善く金を作り善く金を使ふの一方の横綱とし、ロツクフェラーを他の一方の横綱としたが、三役以下前頭の中、時として其の壘を摩するのが無いではない。金を作るに巧拙があり、金を使ふに巧拙がある。

藤原銀次郎氏は聊かスタンフォードと境遇を同くする所があり、スタンフォード大學を視察して感じ、全資産を抛ち、東京に特殊の工業大學校を設置するに着手した。一面にスタンフォードの感化が我が帝國に及ぶとすべき所があり、一面に青が藍より出でて藍よりも青く、逆にスタンフォード大學の参考となり、他の大學に及ぶと想像されるがどうか。資産はスタンフォードの幾分一に過ぎないけれど、効果に於て其れ以上を期待し得られぬでない。スタンフォードは大學開校後三年目に歿し、未亡人が世話を焼き、焼け世話と云はれた。藤原氏は工業教育で世に益するの外、如何に金を作つて、如何に之を使ふかの例を後世に垂れる。

(昭和一四・五・二二)

謀叛人の國へ

英國皇帝及び皇后は現に加奈陀を巡遊中であり、遠からず米國に赴かれる豫定になつてゐ

る。パトリック・ヘンリーが「シーザーにブリュタスがあり、チャールズ一世にクロムウェルがあり、ジョージ三世に……」と云ひ、「謀叛く」の聲が起つてから約一世紀半、ジョージ六世が當年の謀叛人の國を御訪問あらせられるとは、小さくして喩へれば、先代萩の鶴喜代が成長して政岡と共に仁木彈正の邸宅を訪問することになり、寛大と云はるか、過去を咎めぬと云はるか、それとも利害關係で前の事を水に流し、何喰はぬ顔するか、ジョージ三世とジョージ六世と、正反對の態度なること、替れば替る世の中かな。

ワシントンには仁木彈正と似ても似つかぬ人物ながら、それは今日から見ての事であつて、獨立戦役當時に於て英國朝廷で極悪非道の人間と取り沙汰した。民権黨（ホイッグ）にこそ同情し、或は賞め立てるもあつたれ、敵國なる佛國と結んで官軍と戦ひ、飽まで國王の統治より分離しようとするなど、政府側にて少しも假借すべきを覺えず。宮中で有りとも有らゆる制裁を加へ、謀叛人の再び起らないやうに膺懲するに決定し、一にも二にも謀叛人と罵つた。遠く海を越えて意の如くならず、七年間戦つて獨立を許すを餘儀なくされたけれど、その後も米國に對

して反感を催ふし、君主が之を訪問するが如き、全く考へ及ばず、謀叛人の國たるを忘れなかつた。

時代が一切を解決し、今は昔を回顧して残念がるのがないとし、米國の繁榮を見るにつけても、これが我が領土ならばと羨望の情を禁じ得ないのが無いでなからう。若し米國が獨立せず、加奈陀と共に英國に屬せば、英帝國なる者が世界の覇權を握り、現に獨逸が何とあらうとも、何等齒牙に掛ける所がなからう。一旦海上權を失ふと共に、英本國の五千萬人が一週間で飢餓に迫るの恐れあり、何としても米國に泣きを入れねばならず、太陽が領土内に没しないと云ひつゝ、考へて見て随分危険な状態になつてゐるのも、元は米國獨立よりの事、その獨立が恨めしい。

同盟國なる日本を捨てたのも、米國の機嫌取りのためであり、前に謀叛人であつたとて、背に腹は替へられず、謀叛人様々として歡待するのが、傳統的手、殊に近年露骨になつて居り、まじめに考へては、世界陸土の四分之一を領有する皇帝の位も案外に感ぜられ、前のエドワ

一八八世、今のウインザー公が人妻と手に手を執り、大陸を放浪せられること、深く悟られた結果としてドラマにならぬとしない。頭を下げて謀叛人に頼むのも、冠を戴けばこそその事、それがしはエヘン、自主自由に世界を通らうと存する、と言はれるかどうか。弟は皇帝として謀叛人の國へ御訪問とある。(昭和一四・五・二三)

妙 な 運

板垣伯が刺客に刺されて「板垣死すとも自由は死せず」と言つたと傳へられた。さういふ文章めきた語が出べき筈がなく、これは傍でさまざまの談話を綜合して言ひ出したのであるけれど、伯の當時に於ける感想たるは確かであり、後に伯自らさう言つたと明言もした。そこは本來軍人育ちのせいか、議論好きの割りに文句に拘泥せず、文句は左右で進言するが儘にし、或は自ら言ひ出したやうに思つた。若し伯が間もなく歿したならば、彼の句が名言として傳は

り、銅像又は碑石に刻せられ、或は外國の格言集に加へられたらう。場合が場合だけに、彼の語は明治年間の名言どころか、千古の名言と聞えたらう。

それは伯が四十六歳の時のこと、幸にして死せず、八十三歳まで生き延びたが、不幸にして彼の名言が實現せず、無用の死句と化した。明治年間に容貌といひ、才幹といひ、氣魄といひ、見ても見なくても軍人らしい軍人は山地將軍であつて、戊辰の役に板垣の下で働いた人、その言ふには「板垣が政治家とならず、軍人で通ほしたならば、誠に天晴れであつたらうに、惜しい事をした」とあつた。伯は或る程度まで政治家の資格を備へたとして、何分にも金に無能力であり、人情反覆の間に處置するに適せず、加ふるに早く耄碌し、「自由死して板垣死せず」と言ひ囃されるに至り、幸か不幸か、不幸か幸か、人が判断に惑ふ。

政友會第七代總裁鈴木氏は、誰が言ひ出したか、「腕の喜三郎」と呼ばれ、如何にも腕がありさうに噂された。腕があつたらうけれど、衆議院議員選挙に落選し、貴族院に入つた所は、「ありや何だい」と云はれ、そこに政友會の降り阪を示す所がないとしない。降り阪はさうい

ふ偶然の出来事よりせず、種々の事情よりして居るにせよ、その際に或る選挙区から立候補するか、又は落選と共に断然總裁職を辭退したならば、さすがに腕の喜三郎だけの事があると思われ、同時に政友會の總裁職が好い加減なものでなく、相當に重きを置かねばならぬとせられらう。

政黨の總裁たる者は、落選の際に同黨の誰かゞ身代りになる位の信望がなくてはならず、それがない程ならば、總裁たるの信望を缺くとして辭退するが順序、さなくとも病氣で黨務を掌ることが出来ず、代行委員四人を置いた程では、如何に勅選議員が恩典とは云へ、職務を虚くするに忍びないとして、辭職するのが男らしい所爲とすべく、況んや自ら統率する政黨が分裂して相ひ争ふに至り、病軀を驅つて調停に乗り出すか、力が及ばないとして責を引き、政治より斷絶するか、孰れかに出てこそ「腕の喜三郎」たる所がある。腕がないのでなく、腕が揮へぬのであらう。人に運不運があり、意の如くならぬ事が多いとし、妙な運もある。

(昭和一四・五・二五)

頬 被 り

「頬被り」といふ語は源平頃から行はれて居り、恐らく其の以前よりと考へられるが、着物か何かを頭から被るのであつて、手拭に限るやうになつたのは、徳川時代に入つてからの事、殊に三尺手拭が普通になつてからであらう。前に面を覆ふを主にしたのに、後に幾らか鉢巻の効用を帯び、頬被りであぐらをかき、酒を飲んで管を捲いたりした。これはペランメイ連に限るやうでも、幕末に高杉晋作が「三升樽片手にさげて破れかぶれの頬被り」と語つた所は、頬被りが如何にも豪快さを想像させるに足る。この頬被りは何等覆面を意味せず、赤裸々に一切をさらけ出し、捨てばち、焼けのやんばちとなる。

「破れかぶれの頬被り」は頭に鉢巻きする代り、頭から頭まで巻くのであつて、三尺手拭が出来てから自然に考へついたのであらう。誠に手拭に限つたこと、ハンケチでも考へつかず、夕